

東方化物脳 ～100%の
脳が幻想入り～ 不定
期更新

薬売り

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間は脳を100%中10%しか使えない。だが、稀に10%以上使っている生物が居る。その中にも、世界にたった一人だけ100%脳を活用することが出来る。その名も、神田 零。予測不可能、理解不能の技を使って幻想郷の異変を解決へと導く。

この作品はシリアスが多めな作品です。なんじやこりやあ!?!つてなったらブラウザバックすることをお勧めします。それと、タグにもありますが、残酷な描写やエグい表現があります。

※これは東方の二次創作です。

序盤の方を修正しています。

目次

オリジナルキャラクターの特徴もしく	
は技	1
プロローグ	5
永琳の苦勞	
永琳の苦勞	1 『苦勞』
永琳の苦勞	11 『能力』
永琳の苦勞	19 『裏切り』
25	
永琳の苦勞	1 V 『臭い』
永琳の苦勞	31 『後悔』
41	
諏訪信仰の蛙	
諏訪信仰の蛙	1 『信仰』
諏訪信仰の蛙	11 『神格』
55	
諏訪信仰の蛙	1 I I I 『脅迫』
61	
諏訪信仰の蛙	I V 『鍛え』
67	
諏訪信仰の蛙	V 『一騎』
72	
諏訪信仰の蛙	V I 『信頼』
82	
九人の欲と一人の希望	
九人の欲と一人の希望	1 『聖徳』
88	
九人の欲と一人の希望	I I 『志望』
93	
九人の欲と一人の希望	1 I I 『臆』

- | | | | | | |
|-----|-----|------------|---------|----------|-----|
| | | 九人の欲と一人の希望 | I V | 『覚悟』 | 100 |
| | | 九人の欲と一人の希望 | V | 『怨霊』 | 107 |
| 112 | | 九人の欲と一人の希望 | V I | 『死人』 | 116 |
| | | 九人の欲と一人の希望 | V I I | 『希
望』 | 124 |
| | | 空の雲は輝いて | | | |
| | | 空の雲は輝いて | I | 『歴史』 | 130 |
| 136 | | 空の雲は輝いて | I I | 『正拳』 | |
| | | 満月は光る | | | |
| | 167 | 空の雲は輝いて | V I I I | 『名前』 | |
| | 160 | 空の雲は輝いて | V I I | 『処理』 | |
| | 155 | 空の雲は輝いて | V I | 『幼虫』 | |
| | 145 | 空の雲は輝いて | V | 『死骸』 | 149 |
| | 140 | 空の雲は輝いて | I V | 『害虫』 | |
| | | 空の雲は輝いて | I I I | 『弟子』 | |
| | | 満月は光る | I | 『竹取』 | 173 |

	満月は光る	11	『美貌』	179
	満月は光る	111	『英雄』	183
	満月は光る	IV	『藤原』	190
	満月は光る	V	『開華』	196
	満月は光る	VI	『花畑』	201
	満月は光る	VII	『満月』	211
219	満月は光る	VIII	『夢月』	
	満月は光る	IX	『月見』	229
	玉の緒の刀			
	玉の緒の刀	I	『天狗』	235
	玉の緒の刀	II	『風神』	243
	玉の緒の刀	III	『偽装』	250
309	心の隙間の温かみ			
	心の隙間の温かみ	I	『喪失』	303
	心の隙間の温かみ	II	『契約』	309
	心の隙間の温かみ	X	『友情』	298
	玉の緒の刀	IX	『靈魂』	288
283	玉の緒の刀	VII	『再開』	276
	玉の緒の刀	VI	『酒呑』	272
	玉の緒の刀	V	『仲立』	266
	玉の緒の刀	IV	『必殺』	257

心の隙間の温かみ	IX	『椰揄』
心の隙間の温かみ	336	VIII 『知名』
心の隙間の温かみ	331	VII 『悪神』
心の隙間の温かみ	327	VI 『未来』
心の隙間の温かみ	320	V 『排煙』
心の隙間の温かみ	316	IV 『小人』
心の隙間の温かみ		III 『計画』

340

お知らせ	385	
椿の香り	377	III 『過去』
椿の香り	372	II 『料理』
椿の香り	365	I 『九相図』
椿の香り		
心の隙間の温かみ	360	XI 『現実』
心の隙間の温かみ	354	X 『無駄』
心の隙間の温かみ	345	

オリジナルキャラクターの特徴もしくは技

神田零

身長 180 cm

体重 80 kg

性格 何時もは適当だが、やるときはやる。仲間などを傷付ける等をしたら、場合によろが殺される。何もしなければ優しい。

容姿 イケメンの類い。それ以外の言葉はない。

能力 脳を100%活用する程度の能力

技

視界ジャック 相手の視界を覗き見ることが出来る

アナライズ 相手の弱点。または、耐性を知ることが出来る

ナビゲーター どんなに離れてても、相手の位置を確認できる

ディアく相手の心を読むことが出来る

熱の細胞く焼けるように熱い『熱の細胞』を創ることが出来る。まわりの物の殆どが溶ける

冷の細胞く凍るように寒い『冷の細胞』を創ることが出来る。まわりの物の殆どが凍る

痺の細胞く雷のように痺れる『痺の細胞』を創ることが出来る。まわりの物の殆どが感電する

治癒の細胞く何でも治すことの出来る「治癒の細胞」を創ることが出来る
亜空間の原子く亜空間を創り、そこから攻撃したり、物をしまったりする

超音波く特殊な音波で相手の動きを止めたり、動きを鈍くしたりする。一時的である
怪音波く特殊な音波で相手の防御する力を低くする。一時的である

強音波く特殊な音波で相手の筋肉の力を落とす。一時的である
コンツェントラツイオンく集中し、攻撃力、防御力、素早さを上昇させる。一時的である

瞬間移動く瞬間移動をする。間に壁があっても移動が出来る

遠隔操作く機械や物や生き物を自由自在に操作することが出来る

チャージく攻撃力を大幅に上昇させる。ただし怒ったときだけでしか使えない

空中浮遊く空中の上や水面の上を歩くことが出来る

インフィニティく物凄い力で攻撃する。大妖怪が受けたら生死をさ迷うだろう
創造くあらゆるものを創ることが出来る。生き物は創れない

水威力く水で創った弓矢。どんな物でも削り、そして貫くことが出来る

液体潜行くどんなに浅くても液体（水、血液、硫酸、塩酸、溶岩 e t c）があれば、自身の体の細胞をバラバラにして潜行する。

空中分散く細胞をバラバラにして霧状になる。

その他

彼は顔が広いため、誰に聞いても彼のことを知っているだろう。長生きをしている八意永琳が言うには「昔からの恋人」と言う。

本当に恋人かは不明だが昔から生きていることは間違いない。

種族は分からないが、私の予想では「蓬莱人」と思う。

そんな彼だがやはり顔が広いからか、人里でちよつと歩くと声をかけられている。

昔話では彼が英雄として書かれている本がたくさんある。

結構アウトドアなタイプであるため、2、3日見かけないと皆が心配してしまうよう
だ。

あの博麗の巫女も「異変だ!!」と言い幻想郷中を飛び回るらしい。だが神田零、本人

に聞くと「俺が居ない時は大体、外の世界で遊んでる」らしい。

こんなに信用されているのなら、どっかのスキマ妖怪も見習ってほしい限りである。

源義経

身長 147 cm

体重 47.5 kg

性格 零への忠誠心が強く、ある程度は従う。但し、自身の意思を確りと貫く真面目な者。零からは『丸』と呼ばれている。

容姿 なんととも言えぬ

能力 刀に変化する程度の能力

技

秘技 『百艘潰し』 出鱈目に斬っているようで、全て致命傷を与えている。

妙技 『風ぎ裂け』 風のように静かに、一瞬で仕留める。人によっては回避される。

その他

零が外の世界に行っている間は義経殿が留守番をしている。

但し、大体寝ているか修業中なので、零は外の世界に行っているのかは聞きにくい。

プロローグ

皆は「ルーシー」と言う映画を見たことはあるだろうか。

俺はほとんどその主人公と同じだ。

宇宙と一緒に生まれた俺は何のために、そして誰が生んだのかが分からない。

俺は滅びた星を再生するために生まれたんじゃないかと思った。

ただそう思っただけ、宇宙の役割は星の創造と破壊。

俺の役割は星の再生、そう思った。あの星に着くまでは…

俺は最近、水がある星が崩壊したことを知った。

その星の名前は、『地球』だ。

地球に到着して早速再生しようと思ったが…

俺「なんだ、勝手に再生してるじゃないか」

地球にはすでに人間と言う生物が居る。

その人間と言う生物は都を造り、更には神なんかも創りあげた。

俺「じゃあ、帰ろ…待てよ？」

勝手に再生するんだったら、俺は何のために居るんだ？

俺の役割じゃないのか？それともこの地球が特殊なのか？

俺「気になる…」

人間になってこの星を調べよう。

この星の人達にはそれぞれ名前があるらしい。

じゃあ、俺の名前は…神田零にしよう。神田零…うん、思い付きにしては良い名だ。

名前を創り、人間になった瞬間、ぼやけた視界が綺麗になった。

男「おう、その兄ちゃん。金をちよつと貸してくんねえか？」

ほう、金なんて物もあるみたいだな。

零「金を渡して、俺に何の利益がある？」

男「あ？良いから渡せや!!」

男が俺を殴ろうとする。

ハア、俺をただの人間と思ってるな？確かに種族を人間にしたが、なめすぎだろ。

俺に勝てる筈がない。無駄なんだよ、滑稽だ。

俺は脳から『波』を送り相手の動きを強制的に止める。

男「なっ!?う、動け…ねえ…」

零「お前の動きを制御した」

男「た…助け…て…」

零「良いよ」

男「え？」

俺は波を送るのを止めた。

零「だっってお前に興味無いもん」

男「あ、ありがとうございます」

呆れた。自分よりも強いと分かれば威勢をなくす。ことごとく呆れた。

零「でも、お詫びはしてもらおうよ」

男「な、何でしょうか!？」

零「都まで案内して?」

零「ここが都か…狭いな。いや、この星にとっては広いのか?」

男「広いですよ!!」

零「そうか、じゃあここで一番偉い奴の所まで連れてつてくれるか?」

男「そ、それは流石に無理ですよ!!」

急に彼は焦り始めた。

零「そうか…ありがとな。ここまで連れてくれて感謝する」

男「とんでもないですよ!!」

零「じゃあな」

そう言い、その男に別れを告げる。

多分、ここが一番偉い奴の家だな。

零「さて、『瞬間移動』!!」

さて、中に着いた。

零「色々物色するか」

零「ん？これは、何だ？教えてくれないか？そこに居るんだろ？」

？「それは薬よ」

零「薬か」

その者は、俺に弓矢を向けて喋っている。

？「何者？」

零「俺は、神田 零」

？「名前じゃないわよ」

零 「一応人間だ」

? 「ふーん……そう」

そう言いその者は俺に矢を放った。理不尽だな。

? 「……」

零 「人間ってさ」

? 「え!?!」

零 「何で出来たのかな、君は知ってる?」

? 「ええ」

零 「じゃあ、君の家に住ませてよ」

? 「……………はい?」

これが物語の始まりとなった。いや、すでに始まっていたのだ。そう、俺が
■
■
■
■
をしたから。

永琳の苦勞

永琳の苦勞 1 『苦勞』

零「ここに住ませてくれないか？」

私「……………はい？」

今思えば、あの言葉がきつかけなのよね…

はあ…本当に人間かどうか調べたら人間だったから、良い実験体が見つかったと思つたけど、どんな薬にも反応しないのよ。特に毒薬。はあ…実験体と思つたら実験対だったわ。

しかも、彼が寝てる間に実験してたのに、朝に会ったら「俺を実験に使うな」つて言うのよ!?

もう、なんで住むこと許可したのかしら…

零「おい、永琳」

永琳「なにかしら？」

まあ、唯一喜ばしいのは彼がイケメンつてことよねえ。

零「今日はちよつと出掛けるから、なんか手伝えと言われても手伝わねえぞ」

永琳「は!?!ちよつと待ちなさいよ!!」

零「じゃ!!」バタン

はあ、黙っていれば本当にカツコいいのに。

永琳「じゃ!!じゃないわよ…」

永琳「あんた腐つても居候でしよ…」

ああ…銀髪が白髪になるわ…

永琳「ああ、そこはそっちじゃなくてこっち」

部下A「こっちですか?」

永琳「そうそう」

はあ、いつもは零がやるのに。

部下B「八意様、神田様は?」

永琳「どっか行つたわよ…」

部下B「ああ、なるほど…」

なるほど？まるでどっか行くのは知っていたかのような言いぶりね…

いや、彼が適当なのは皆知ってるか。

はあ、本当はあんなに適当じゃあすぐクビ何だけど、頭が私並みに良いからなあ…

いや、下手したら私よりも…い、いや、そんなことは無いわ!!

はあ…今日、私誕生日なんですけど…誰もおめでとうって言ってくれない…泣いて良いかしら。あれ？前がぼやけて…

永琳「薬の材料が…切れたわね。買いに行きましようか」

部下A「僕が行きましようか？」

永琳「いや、良いわ。外の空気も吸いたいし」

部下A「そうですか。分かりました」

永琳「じゃあ行ってくるわ…」

店員 「38900円になります」

永琳 「はい」

店員 「1100円のお釣りになります」

永琳 「はい」

もう一日が終わるわ…結局誰にも祝われなかったわ。

もう、なんなのかしら…

女性 「あら、八意さんじゃないの」

永琳 「こんにちは」

女性 「あなた、良い部下を持ったねえ」

永琳 「え？」

女性 「それじゃあね」

永琳 「え、ちよつと…」

なにかしら…

永琳「はあ…もう6時か…」

今から自分の誕生日プレゼントを買っても遅いわね。

せめて、部下には祝われたかったわ…

そう思いながら扉を開ける。

皆「お誕生日おめでとうございまーす
!!!!!!」

永琳「え？」

零「おめでとう」

…：理解が出来なかった。最高の頭脳を持ってしても、数秒かかった。しかし、理解している最中、自然と目から熱い何かが流れ出てきた。

零「泣くなよ」

部下A「全部、神田様が計画したもののなんですよ!!」

永琳「う、うそよ…だって…きょうどっか行ってたじゃない…」

零「あれは、誕生日のために買い物をしに行ってたんだよ」

永琳はあることを思い出した。

「あんた、良い部下を持ったねえ」

それは、零のことだったんだ

零「じゃあ、今日は飲むぞ〜」

皆「おおおおおおお〜〜〜!!!」

零「あ、その前に…」

零は懐から何かを出す。

零「はい」

永琳「こ…これは…?」

零「首飾りだ。綺麗だろう?」

そこには、光輝く宝石が何個も付いている首飾りがあった。

零「これ買うために、結構節約したんだぜ?」

永琳「あ…:…ありが…:…とう…!!」

その日は仕事のしの字も無い、楽しく、にぎやかに、騒いで誕生日会を開いた。

そして…

永琳「今日はありがとね」

零「かまわないよ。これは今までのお礼だ」

永琳「そう…」

その日は、まるで月も祝っているかのように綺麗に輝いていた。

零「俺は、お前には感謝しても仕切れないんだよ」

永琳「え？」

零「お前に出会って1年位か」

永琳「ええ」

肯定しながらも、もう一年かと思い、微笑んだ。

零「俺は、いつも適当で、大雑把で、やる気が無くて…でも、そんな俺をお前は受け入れてくれた。優しくしてくれた。一緒に笑ってくれた」

永琳「…」

いつも、彼はこんなにも私を思ってくれていたのか？嬉しさと同時に悔しんだ。私は彼を軽く見ていた。

零「たまに俺を実験台にするが…」

永琳「一言余計」

零「ハハ…でも、それでもお前には感謝してる」

永琳「うん…」

零「最高に大好きだぜ!!」

永琳「!!」

嬉しかった……でも……零の言っている好きは、そういうのじゃないのだろう。
ズルいわ……本当にズルい……なら……

永琳「零……こつち向いて!!」

零「ん? なん……!!!」

反撃をするまでよ。私は零にキスをした……

彼も最初こそ驚いたが、抵抗はせずにいた。

永琳「私はあなたのことが好き。貴方は……?」

零「……」

ああ、やっぱダメよね。こんなんじや……

零「……さっき言っただろ?」

永琳「え?」

零「お前のことが最高に大好きだった」

永琳「!!!」

零「俺は、お前を愛してる」

ああ……やっぱズルいわよ

本当に……

ズルいわ

永琳の苦勞 11 『能力』

あれから零は恋仲の関係なった。

だから、キヤツキヤウフフの感じになると思っただけけど…

零「永琳、その薬取ってくれ」

そんなこと無かった。今まで通りでビックリしたわ。

いや、まあ…良いんだけど…もうちょっとなんかラブラブイベントがあっても良いんじゃないかなと思うんだけど…

零「永琳? どうした?」

永琳「え!? あ、なに?」

零「いや、だからその薬取って」

永琳「分かったわ。はい」

零「ん、ありがとう」

永琳「どういたしまして…」

ハア、もう諦めてるけどね…

部下A「八意様!! 神田様!! 妖怪が数匹、都を襲っています!!」

永琳「え!？」

零「知ってる」

部下A「え？」

永琳「え？」

ん？知ってる？何故？

部下A「なんで知ってるんですか？」

零「匂いで分かった」

化けもんか、あんたは…

零「じゃあ行こうか」

永琳「え、ええ…」

何とか収まったわ…でも…

永琳「ねえ、零」

零「ん？なんだ？」

私の声に反応し、こちらに振り向いた。

永琳「貴方、さつき匂いで妖怪が居ること知ってたみたいなこと言ってたけど…ここから現場まで結構離れてたわよ？鼻が良いって言葉じゃ済まされないわ」

犬なんか、比じゃない。

零「う〜ん…俺の能力みたいなものかな」

永琳「能力？」

零「ああ」

永琳「と言うと？」

零「永琳は人間の脳は100%中10%しか使われていないことは知ってる？」

永琳「ええ」

零「でも、稀に10%以上脳を使用してる人が居る」

永琳「え!!」

零「10%以上になると、色々な能力を覚醒することが出来る」

それは驚くべき事実だった。さりとして、それは顔には出さずに訊く。

永琳「じゃあ貴方は？」

零「ああ、俺は『100%脳を活用する程度の能力』だ」

永琳「え…」

え？100%？

どうゆうこと？

零「簡単に言うると『何でも出来る能力』だ」

永琳「はあ!？」

なに言ってるのよ!?

そこまですつたら人間じゃないわよ!!

零「ああ、人間じゃない」

永琳「え!？」

心を読まれた!?

零「俺は元々人間じゃない」

永琳「じゃあ、元々何よ」

私は半分呆れて訊いた。

零「分からない…」

永琳「え？」

答えは意外にも『分からない』らしい。零はそのまま話を続けた。

零「なんの為に生まれたかも、誰が生み出したのかも……」

永琳「……」

その時、永琳は考えていた。何とか零の種族が分からないかと。

永琳「月に行きましよう」

零「え？」

永琳「月には『世界の真理』っていう本があるって噂で聞いたことがあるわ」

零「世界の真理？」

永琳「そう、その本はありとあらゆる種族にことが載っているらしいの。そのほかに、宇宙の始まりや、宇宙の外のことも載っているみたいなの」

我ながら素晴らしい案である。

零「本当か!？」

永琳「ええ、私もずっと前から行って見たかったし、ついでよ」

零「ついでかよ」

永琳「ええ」

零「あ、言つとけど、今は人間だからな？」

永琳「分かってるわよ」

よし、明日から準備しようかしら。
がんばろう!!

永琳の苦勞 111 『裏切り』

永琳「ここは どうしたらいい？」

零「ここは…横20メートル、縦15メートル、高さ30メートルにした方がいい」

私は今、月に行くための機械の設計図を考えている。

それを零に手伝ってもらっているわけだが…ほとんど零が考えていて、私は設計図を書いている感じだ。

やっぱり私より頭いいのかしら…その頭脳が欲しいわ。

零「欲しいのか？」

永琳「え？」

そういえば、零は人の考えていることを読めるんだったわね。

永琳「欲しいのかって…じゃあ、欲しいって言ったらくれるの？」

零「脳の細胞を創ることは出来るぞ」

永琳「……………そうだった…貴方は人外だったわね…」

零 「じゃあ、今から創るから一分位待つてて」

永琳 「いや、いらないわ」

進んでお願いしようとは思わない。

零 「え、そう？じゃあいいや。にしても昼か…何か作ろうか？」

永琳 「ええ、お願い」

零 「出来たぜ」

永琳 「ああ、ありが…今日つてめでたい日だっけ？」

零 「え？別に？」

永琳 「じゃあなんでこんなに豪華なのよ」

居間にいくとビックリするぐらいの大量で豪華な食べ物がそこにあつた。

ここから海まで凄く遠いのに、何で蟹があるの？なんでウニがあるの？なんで鰻があ

るの？

てか、この鰻でかくない？

零「この鰻、痺れて痺れて苦戦したよ」

まさかの電気鰻?! 日本じゃないじゃん!! ※永琳は天才なので電気鰻のことを知っています

てか、何で触れるのよ!?

零「俺が人外だから☆」

永琳「心を読むな!!」

結局、部下達も呼んでパーティーをすることになった。

部下A「いやー、食った食った。ありがとうございました、僕達を呼んでくれて」

永琳「このアホが十分で世界を旅して、三分で全部の食材を使って料理したから食べ

きれなかったのよ、むしろ助かったわ」

零「誰がアホだよ」

永琳「貴方よ」

零「ド直球に言うなよ、普通に傷つくぞ。俺のハートは90%がガラスで出来ているんだぞ」

永琳「残り10%は？」

零「カツコ良さ」

永琳「…」ドスツ（無言の腹パン）

零「うげえ!?俺でも痛いもんは痛いんだぞ!？」

永琳「あつそ」

零「こ…こいつ…!!」

永琳「てか、昼ご飯の筈なのに何で今、夜なのよ」

上を見上げればスツカリ暗くなっている…

はあ、ほぼ宴じゃないの…

零「じゃあ帰るか…」

永琳「そうね…」

零「そういえばさ、さっきのパーティーで気になるやつが居たんだよ」

永琳「どんな？」

零「なんか、見た目人間だけど中身が妖怪だったな…」

……………は!?

永琳「イヤイヤイヤ、なに言ってるのよ!?!妖怪!?!この都に妖怪が入れるはずないじゃない!?!」

零「いやでも妖怪だったぞ?」

永琳「もし妖怪が居るんだとしたらなんで私に言わなかったのよ!?!」

零「めんどいから」

永琳「はあ!?!」

零「あと、あの妖怪…勘だけど相当強いよ」

永琳「勘って…」

でも、だとするとスパイかしら? 私でさえ、分からないくらい妖力を隠すのが上手

いつてことは零の言う通り、強いかもしれないわね…

永琳 「明日から捜しましょう」

零 「ガンバレー」

永琳 「え？なに言ってるの？貴方もよ？」

零 「ロケットはどうするのさ？」

永琳 「……………」

零 「ガンバレー（笑）」

永琳 「頑張ります……………」

うう…一人で捜すのか…最近苦勞してばっかじゃないの…………

ロケットを造って、月に到着したら『永琳の苦勞』って本だそう…

永琳の苦勞 1V 『臭い』

永琳「その妖怪はどんな奴？」

零「んん、何か人気者っぽかったなあ」

人気者か…捜しやすいわね。

永琳「他は？」

零「うくん、面倒だから絵に描くわ」

そう言うのと、そのメモ帳に絵を描いていく。

まあ、零のことだからすぐに終わるでしょ。

零「出来た」

永琳「早ッ!？」

早く終わると思っていたけど、十秒で終わるとは…

零「ほれ。これだ」

永琳「ウマッ!？」

え？写真か何かですか？絵なのこれ？そう思いながら絵を見る。

永琳「これは!？」

零「あ、もうわかった？」

永琳「誰だ!？」

……

零「……………は？」

永琳「誰かしら？」

零「……………オーバリーアクションをするな。紛らわしい。捜しに行ってこい」

永琳「すみません。貴方の反応が見たくて……………」

零「早く行ってこい」

永琳「ハイ……………」

冷たいのね……………貴方……………

く十時間後く

見つかんねえ……

部下A「誰ですか？」部下B「知りません」部下C「見たこと無いです」部下D「W

hat？」……

何故だ。零よ、全く人気者じゃないぞ……

永琳「ツ!？」

それはいきなりだった。殺気を感じた気がした。

気のせいだろうか……

もう殺気は感じない……やはり気のせいか……

部下「永琳様」

永琳「え!?! ああ、何?？」

部下「その紙は何ですか?」

永琳「ああ、この人を捜してるのよ」

部下「どれどれ……」

部下? 「…………」

永琳「ツ!？」

また殺気、しかもこの部下の顔が一瞬、鬼のような形相になった気がする。

……でも、今はなっていない……やはり気のせいだ。

疲れているのかしら…

部下? 「ああ、こいつですか? 知ってますよ」

永琳 「本当!? 教えて!!」

やった!! やつとだ!! スゴいぞ私!!

これで零にも褒めら…

永琳 「ツ!?!」

まただ…: 今度は一瞬ではなく、ずっとなっている。

この重い殺気に身体は動けない。

部下? 「この人物はこの俺だ」

部下? 「前の宴では仲良くやっていたが、俺に関する全員の記憶を消した」

動こうとしても動けず、ただただ奴が迫るのを見ている。

部下? 「フフフフ…: どうした? 八意永琳…:」

永琳 「クツ…:!!」

妖怪 「お前を喰えば俺達は最強になる…: 来い…:」

私はその妖怪に引つ張られながらついていった。

そこは古い屋敷だった。周りには妖怪ばかり。

妖怪2 「よくやったな!!」

妖怪 「簡単だったよ…」

妖怪3 「またまた〜」

嫌だ。死にたくない。まだ生きたい。まだ零と遊びたい。零と笑いたい。零と悲しみ合いたい。零と…零と…

妖怪 「まあいい…早速頂くとしよう」

零と愛し合いたい。

妖怪 「いただきまーす」

助けて!! 零!!

ゴロゴロゴロゴロ…

妖怪3 「ん? 雷?」

妖怪 「そんなわけないだろう。外は晴れだぞ?」

? 「雷は俺だ」

妖怪「ッ!? 誰だ!!」

零「零だけど何か?」

永琳「れ……い……?」

零が居た。雷の音と共に、彼は現れたのだ。

妖怪「何故貴様がここにいる!!」

零「臭いだ」

妖怪「は?」

零「永琳の花の匂いとお前らのクソを何日か放置したような臭いが感じられたからだ」

妖怪「チツ…何だ? もう一回言ってみろ」

零「お前らのクソを何日か放置したような臭いが感じられたから、と言ったんだ」

零「お前らの臭いのせいで、永琳の匂いが台無しになるんだよ。ああ、くさい」

妖怪2「テメエエエエー!!!」

明らかな挑発に乗る妖怪。

零「去ね…いや、逝ね」

そう言うとき零は腕から青いカッターのような物を出し…

零「はああ!!」

零「……クソが」

妖怪「……グハア」バタン

妖怪が倒れた。

妖怪「負けたか……最後に言っておこう。俺達はロケットを発射することを知っているからな……ハハハハハハハハ」

意味が分からない。ロケットを発射することを知っている？

スパイをしているのだから知っているのは当たり前だろう？

妖怪「ハハハハハハハハ」グサ「ガア……」

零は最後に妖怪を刺した。

零の目からは、少し焦りの感情が伝わった。彼は、何に焦っている？

永琳「ありがとうね、零」

零「ああ、どういたしまして」

永琳「ねえ、零」

零「ん？」

永琳「私の匂いってお花の匂いなの？」

零「ああ、お前の近くに居るだけで、その匂いで癒される。今もな」

永琳「そう……ねえ、零」

零「ん？」

永琳「好きよ」

零「ああ、俺もだ」

こんな一時がずっと続けばいいのに……もし、この時が終わるとしても、その時まで
…いや、そのあともこの人を愛そう。

永琳の苦勞 V 『後悔』

永琳「デッキリターーーー!!!」

やったわ!!ロケットが完成したわ!!

いや、疲れたわ

にしても大きいわね

その大きいロケットが三機、都に居る人は余裕で入るわね。

永琳「終わったわね!!」

零「ああ、そうだな」

ん?そんな喜んでない?

永琳「どうしたの?」

零「何でもないよ」

どうしたのかしら?

皆「乾杯!!」

ロケツトが完成した為、打ち上げをすることになった

が、やはり零は何かを考え込んでるような難しい顔をしている。

永琳「本当にどうしたのかしら」

心配になってきたわ……

心配する必要ないわ。

あの人お酒飲みすぎてるのよ、普通の人の50倍飲んでるわよ。

零「……………ヒック」

いや、バカでしょう？ 真正正銘の。テーブルの上で腕を伸ばして潰れてる。何か考え事をしてて、いつの間にかこんなに飲んでたみたいな感じで。

ホント、バカだ。

ていうか、バカだ。

永琳「にしても、何を考えていたんだろう？」

きつと零の事だから「風呂とかどうするんだろう」とか考えていたのでしょね。あの
人、お風呂好きだからね。

え？何で知ってるかって？

そりゃあ、恋人ですもの。

永琳「さてと」

周りを見ると皆、床やテーブルに寝っ転がっている。

飲んでいる人は、12、3人。

減りすぎだろ。

いよいよ、この時が来たわ。

ロケットがもうちよつとで出発する!!

機長「ロケット発射まで1時間前」

永琳「楽しみだな」

零「なあ、永琳」

永琳「ん? なにかしら」

零「お前は、俺の事が好きか?」

永琳「え!? いきなり!? ……そ、そりゃあ、好きよ…」

零「そうか…俺もお前が好きだ」

どうしたのかしら…

零「ハグしていいか?」

永琳「え、ええ…良いわよ?」

零「ありがとう」

本当にどうしたのかしら、まるで別れみたい。

零「じゃあな」

永琳「え? それってどういう…」

その瞬間、零は消えた。いや、瞬間移動した。

外に：

永琳「なに：あれ」

窓を見ると底には大量の妖怪。

大妖怪が1体や2体なんてもんじやなく、50や60くらいも居る。否、それ以上か。そして、私を襲った妖怪の言葉を思い出す。

「俺達はロケットの事を知っている」

そう、つまりロケットが発射するこの日に襲つてやるといふ意味なのだ。

ロケットには都の人達、皆が乗るから襲いやすいぞという忠告だったのだ。

零は皆を死なせたくないから、今まで黙っていたんだ

そのことを、永琳は一瞬で理解した。

永琳「ここを開けて!!」

部下A「分かりました!!」

部下は急いで開けようとするが：

部下A「開かない!?!」

零によつてロックされてしまっている。

すると、ロケットがいきなり揺れ始めたのだ。

永琳「なに!?!」

部下C 「ロケットが発射します!!」

永琳 「なんでよ!!」

部下C 「発射のボタンが勝手に!!」

全て、零である。

皆を守るため、全て。

零 「すまない、永琳」

妖怪D 「オマエダケカ？ 舐メラレタモノダ」

窓の向こうに俺を呼んで、泣いている永琳が見える。

お願いだ、後悔しないでくれ。

俺は…

零 「死なない!!生きて、必ず君に会う!!」

零 「亜空間の原子」!!」

永琳、どうか後悔しないでくれ。

俺はお前を愛している。

お前も俺を愛していると言ってくれた。

だから、また会える。

愛しているから、また会える。

お前が俺のことを愛さなくなっても、俺はお前を愛す。
ただ、それだけだ。

諏訪信仰の蛙

諏訪信仰の蛙

1 『信仰』

暗い…

目をつぶっているからか？俺はゆっくりと目をか開けた。

そこには大空が広がっており、とても綺麗である、が…酷く、身体中が痛い。俺は、自分の体を見る。

…皮膚は黒く、そして剥がれていて、動いただけでポロポロ落ちる。

しかし、それは当たり前だ。妖怪達を、俺と一緒に核爆弾で討伐したのだから。幸い、いや、皮肉にも俺は妖怪よりも外れた人外のため生きていられるが…

零「…あ…え…」

喋れない…当然。

細胞で回復するしかないな…

やっと回復した。

一日もかかり、半端ない眠気が襲っている。

良いや、めんどくさい。ここで寝てしまおう。

零「お休みなさい……」

俺は誰も応えないのを知っているながらも、その言葉を言い、眠りについた。

零「う、う……ん……」

? 「あ、起きた」

零「ん？」

俺が起きた瞬間、誰かの声がした。女性……いや？女の子？

零「ここは……」

? 「ここは諏訪の国さ」

どうやら、この少女が住んでいる『諏訪』という国らしい。
でも何故ここに…

零「俺は何故ここにいるんだ」

? 「私が運んだからだよ」

零「何故?」

? 「いやさ、散歩してたら道中に君が倒れてて、慌ててここに運んだのさ」

零「そうか…ありがとな」

どうやら、この少女は倒れてた（本当は眠ってた）俺をここまで運んでくれたのか。
ありがたいな。

? 「ムフフ、もつと褒めて良いよ?」

零「ハハ…ああ、もつと褒めてやる」

そこから十分位褒めまくった。

? 「そこまで言われると照れるな」

零「ハハハ。可愛いな」

? 「え、そう? 可愛いのか、照れるな。ムフフ」

零「君は……」

？「もうそれ以上言ったら照れすぎて死ぬからもう良いよ」

零「そうか。そうだ、君の名前を教えてくださいませんか？」

諏訪子「洩矢諏訪子だよ!!この国の崇り神をやってるよ」

零「そうかそうか、崇りg…ええ？崇り神？」

この少女が、崇り神？

諏訪子「うん、皆からは、『御社宮司様』^{ミシヤグジさま}って呼ばれてるよ」

零「へー、やはり人間は神をも創ることが出来るのか」

諏訪子「え？どうしたの？」

零「なんでもない、こつちの話だ。そんな事より俺の名前を言ってなかったな、俺の

名前は『神田零』だ。宜しくな」

諏訪子「神田零かく宜しくね」

零「うん。さて、起きようかな…」

諏訪子「あまり無理しないでね？」

零「ああ、ありがとう」

にしても、御社宮司様ねー。聞いたことないな。

何時から居る神なんだろうか。

零「なあ、諏訪子」

諏訪子「ん？」

零「何時から存在する神なんだ？」

諏訪子「地球が滅んで再生した後に生まれた」

零「へ〜」

諏訪子「零は？」

零「俺？俺は…確か、137億歳かな？」

諏訪子「……は？いや、は？」

零「宇宙が生まれたのと同時に生まれた」

諏訪子「いや、なんだその冗談」

零「冗談じゃないぞ？」

………

諏訪子「本気で言ってる？それ…」

零「ああ、本気だ。だから力もあるぞ」

諏訪子「へ、へ〜。じゃ、じゃあ見せてくれない？」

零「ああ、良いぞ。『亜空間の原子』」

すると、諏訪子の目の前には、よくわからない歪みが空間に出来た。

諏訪子「ス、スゲー……」

諏訪子は目を輝かせている。

そんなにスゴいのだろうか、よくわからない。

零「種族は地球に来たときに、人間に変えたけど、元々何だったのかよくわからないんだ」

諏訪子「種族を変えた!?!じゃあ、『神様』に成ることは出来る?」

零「まあ、やろうと思えば……」

諏訪子「じゃあ、神様になってこの神社の一本柱になってよ!!」

零「え?」

ここから諏訪信仰の物語が始まる。

諏訪信仰の蛙 11 『神格』

零「神になれって言われても…俺は人間が良いし、人間っていいなだし…」

諏訪子「そこをどうにか!!」

神になってくれ、か…俺は人間が好きだからな。

零「なんで俺を神にしたいんだ？」

諏訪子「神は多い方が信仰が増えるんじゃないかなって…ダメかな…?」

零「うくん…じゃあ、500年位なら良いよ」

諏訪子「本当に!?!ヤッホーウ!!」

でも、何の神をやれば良いんだ？

零「何の神をやれば良いんだ？」

諏訪子「あ…」

考えてなかったのか…

零「じゃあ、『細胞の神』ってのはどうだ」

諏訪子「お、良いね!!でき、細胞って何？」

零「え!?!」

人間や神は細胞とかの概念はないのか？だが、永琳や部下達は皆知っていたんだぞ？
おかしい、永琳達が研究者だからって言う言い訳もできない。都に住んでいた人も
知っていた筈…なのに、どういうことだ？

1. 都の人が何もかものデータを持っていった

2. 地球がもう一回滅んだ

3. 諏訪子がバカなだけ

まず、2は無いな。こんなに直ぐに地球が滅ぶ筈がない。

3も無いな。いくらバカでも神だからな、言葉くらい知っているだろう。

となると、1か…当たり前だな。自分の研究を置いていく程バカじゃないからな。

零「細胞っていうのは…」

…というのが細胞なんだ」

十分くらい説明して理解したようだ。

諏訪子「へく、カッコいいね、その『細胞の神』って」

零 「ところで、諏訪子も神なんだよね？」

諏訪子 「当たり前じゃん」

零 「じゃあ、そこそこ強いんだよね？」

諏訪子 「まあ、人並み：じゃなかった、神並みには」

零 「そうか、じゃあちよいと戦ってみたいんだが、良いか？」

諏訪子 「いいよー」

零 「よし、じゃあ…」

零 は辺りを見渡す。

零 「ここじゃ、ダメだね。違う所でやろう」

諏訪子 「そうだね、じゃあついてきて」

諏訪子 「ここでいいんじゃない？」

零 「そうだな」

まわりには何もなく、草原が広がっていた。

零は転がってた小石を持ち…

零「これを投げるから、落ちた瞬間スタートな」

諏訪子「うん」

そう言って投げる。

そして、地面に着いて…

カツと音をたてた。

零『冷の細胞』!!』

先制したのは零だった。いや、先制と言うより、威嚇。

しかしながらその威嚇に、諏訪子は舌を巻いた。

なんと、まわりに生えている草が凍っているのである。一瞬だった。

ただ、凍っているのは零の半径10mくらいの範囲なのだ。だから、零が草を凍らせていると直ぐに分かったのである。

零「どうした、諏訪子？口が開いているぞ」

諏訪子「ツ!!はあ!!」

諏訪子は気合いを入れ、鉄の輪のような物を出した。

そして…

諏訪子「ハッ!!てやッ!!」

零に向かって投げた、勢い良く。普通の人間なら当たるところだろう。そう、普通の人間なら……

零「よつと」

零は避けずに、その鉄の輪を掴んだのである!!

高速に投げられた、あの鉄の輪をツ!!

零「うくん、これは……鉄か……諏訪子も能力持ちか」

諏訪子「そうだよ、坤を創れるよ」

零「そうか。『坤を創造する程度の能力』ってところか……」

諏訪子「え？」

零「何でもない、それじゃあ行くぞ!!」

そう言い、零は掴んだ鉄の輪を諏訪子に投げる。

しかも、さつき諏訪子が投げたスピードの10倍で。もう速すぎて見えない。

諏訪子「あぶなッ!?!」

流石、一応神様だけあってギリギリではあるがなんとか避ける。

だが、それで安心してしまった。

零「諏訪子、もうちよい投げ方を練習すれば俺みたいに来たのに」

諏訪子「え?…ツ!!」

諏訪子はとっさに後ろを見ようとした、が…時すでに遅し、諏訪子の首に零が投げた鉄の輪が当たった。

実は、零は投げ方を少し工夫して投げたのである。

投げて、帰ってくるようにしたのである。尤も、鉄の輪を少し変形させたが…

諏訪子「……………」

零「あくあ、気絶しちゃったか。しゃーない、一回神社に帰ろう」

そう言い、諏訪子を背負って帰っていった。

草達（凍ったままなんだけど…）

諏訪信仰の蛙

III 『脅迫』

あれから499年経った 画面の前の君、時間飛ばしすぎとか言わない
 諏訪子「も」ううず少ご居しいてよお（泣）」

零「うわあ!?!鼻水垂らしながら抱きつくなよ!」

諏訪子「だだつてええ:::れ零いがああ:::」

毎日こんなんだ。正直めんどい

いや、嬉しいよ? でもめんどい

零「あー泣くな泣くな。500年だけって約束したろ?それにまだ1年もある」

諏訪子「も」うういいぢ年ねしんし「じかがない」よよおお」

零「いやだからさ、その間に思い残したことをやろうってことさ。なにか思い残すこ

とは?」

諏訪子「あーうーうーうー:::」

諏訪子は考える

諏訪子「な無いい」いいー

いやさ、確かにめんどいとは思ってたけど、ないって言われると傷つくんだが:::

? 「ドンドン 諏訪の神は居るか!」

零 「ん、少し待つてろ」

誰だ?

零 「はい、どちらしよう?」 ガラガラ

大和の神 「私は大和の神だ。手紙を預かっている」

零 「手紙?」

そう言われ渡された

零 「諏訪子。大和から手紙」

諏訪子 「ぞん なごどよ」 り…へ? 今なんて?」

零 「大和から手紙」

諏訪子 「ええええええええええ!! なにやった私!? 困った、ヤバイよヤバイよ!! リアルガチだよこれ!! いったいなにやった私!? え!? 大和の神がワザワザ来てくれたの!? 本当になにやった私!? おかしいぞ、マジでなに!? てかなに!? バカなのか私は!? 私は・f43n
1) <#% [「なの?」「落ち着け」アツハイ

慌てすぎだろ

諏訪子 「ふーふー…落ち着いた…さて、読もう」

零 「お、おう…」

手紙にはこう書いてあった

『我ら大和は汝らの国、諏訪の国の信仰を貰う

でなければ、国を襲おう』

とだけ、書いてあった

零「…………お前には思い残しが無くても、俺にはある」

諏訪子「なッ!? チョッ、零!？」

零「出掛けてくる」

諏訪子「出掛けるってまさか…」

零「ああ、大和に」

諏訪子「あ、危ないよ!! 私はずいぶんだから」

零「嘘だな、信仰が無くなれば諏訪子は死ぬ」

諏訪子「で、でも…」

零「おい、諏訪子。俺を誰だと思ってる? 細胞の神様だぜ? 安心しな」

そう言い、零は消えた

零 「ここが大和か：『ナビゲーター』」

一番大きい建物の最上階の手前から3番目の部屋に、タケハヤスサノオノミコト 建速須佐之男命が居る

零 「探知した。『瞬間移動』」

時空が歪み：

零 「着いたか：」 ギイイ

戸を開ける

須佐之男 「もう来たか、早いな。諏訪の者よ」

零 「ああ、来た」

須佐之男 「ふん：：さて、一応用件を聞こう」

零 「諏訪の信仰を貰うとの事だが、断る」

須佐之男 「なら攻めこもう」

零 「それも断る」

須佐之男 「ふん、我が儘な神よ」

零 「お前は自己中心な神だ」

須佐之男 「自己中心で何が悪い？ 我はお前らと違って格が違う。お前は殺せるか」

零 「お前のような神、幾らでも殺せるであろう」

須佐之男「ふむ、なら、殺ってみろ」

須佐之男は神力と殺気を放つ

須佐之男「ふはは、どうした。やってみろ」

零「……………」

須佐之男「恐怖で言葉が発せぬか。だろうな。お前とは格が違うのだ。お前に力など有るはずが…ぬッ!？」

零は須佐之男の10倍もの神力と殺気を放つ

須佐之男「驚いた。我ら上位の神と同等の力を持つと言うのか」

零「まだ1割、こんなのは序の口である」

須佐之男「我は1割も出しておらんかった」

零「だからなんだ。貴様を殺し、諏訪を平和にしよう」

須佐之男「崇り神の国の神がなにを言う」

零「俺は断るぞ」

須佐之男「ふん…仕方がない。なら、こうはどうだ。大和の神、タケミナカタ建御名方とミシャグジ御社宮司を一騎討ちで戦わせる。どうだ」

零「ふうん…考えさせて貰おう」

須佐之男「3日後、答えを聞こう」

零「3日後か…良いだろう。それまでに済ませよう」

零「ただいま」

諏訪子「れ”い”いい!! (泣)」

零「うおお!?!…ごめんな」

諏訪子「ウワアアアアン!!」

一騎討ちか…どうしたものか

今の諏訪子では勝てはしないだろう

明日、ちゃんと話そう

諏訪信仰の蛙　Ⅳ 『鍛え』

諏訪子「大和の神と私が一騎討ちい!？」

零「ああ、そうだ」

案の定、ビックリしている

諏訪子「そ、そんなあ…私、勝てる気がしないよ。て言うか勝てないよ…」
零「そうだな」

諏訪子「少しは否定してほしかった…まあ、事実だけどさ…」

相手は聞くところによると、『乾を創造する程度の能力』らしい

諏訪子の能力の『坤』と相手の『乾』は相反する能力だ
須佐之男スサノヲはそこをついたのだろう

零「だから、負けない為にこれから鍛えるぞ」

諏訪子「ええー、やだよー。めんどくさいよ」

零「自分の信仰が無くなれば死ぬことは知ってるだ…ん、待てよ…」
今まで、さらつと思ひ込んでたが…

諏訪子…御社ミシャグジ宮司の信仰は根深いはずだ…

結果がどうあれ、諏訪子は死なないんじやあないか？

須佐之男はこれに気付いているのか？

どちらにせよ、鍛えないといけない

諏訪子をボコボコにされたくは無いし、鍛えさせるチャンスだ

この事は、諏訪子には内緒にしておこう

少し、須佐之男にこの事を話して一騎討ちを無くそうとも思ったが、さつきも言った通り、諏訪子を鍛えさせるチャンスだ

諏訪子「零？どしたん？」

零「ん？ああ、なんでもない。兎に角、鍛えるぞ。一騎討ちは受けると言うことでいいな？」

諏訪子「嫌だけど良いよ」

零「んじやあ、伝えておく。それじやあ、早速やるか」

諏訪子「はあ…やだなあ…」

零「いいか？まず、基礎からやるぞ」

諏訪子「うん」

零「まず、飛ばされた時の受け身だ。教えるからそこに仰向けになつてくれ」

諏訪子「ん、わかった」

昔、永琳の部下（兵士や軍人）に教えて貰っていたが、まさか教える側になるとはな
効率よく教えてもらっていたよ

俺も伝達力はあるから、効率よく教えられると思う

諏訪子「へえ、結構受け身つて使えるね」

零「ああ、受け身は日常で転んだ時とかにも使えるし、これは最初に覚えるべきだ」

諏訪子「そうだね」

零「さあ、次だ。次はだな…」

夜は更け、諏訪子が寝たことを確認して大和に向かった

須佐之男 「一騎討ちで決めると言うことで良いのだな」

零 「ああ」

須佐之男 「そうか、それじゃあ：1ヶ月だ。1ヶ月後にそっちに向かう」

零 「1ヶ月か、良いだろう。一騎討ちの時はズルをするなよ。部下にも言っておけ」

須佐之男 「フン、よかろう。言っておこう」

零 「ズルを一つでもしたら、俺がソイツを殺す。それは『お前も含む』からな」

お前も含む、その言葉に殺気や怒り等を込め、須佐之男に言い放った

須佐之男 「我も含むのか、それは困ったものだなッ!!ハッハッハッ!!」

その言葉をからかうように対応する

なめやがって。今すぐ殺してやりたいが、こいつの部下に諏訪子が襲われる可能性が

ある

残念だ

諏訪子を鍛え上げてそっちの神を叩きのめさせてやる

1ヶ月? 十分すぎる期間じゃあねえか

俺はこいつの目を睨んでその場を去った

零「ただいまー」

当たり前だが返事はない

一様寝てるか確認するか

戸を開ける

諏訪子「ムウ……ン」……ウ……ン……」

相変わらず寝相が悪いな

零「明日も頑張るか。諏訪子も頑張れよ？」

そう言うのと、偶然とは思うが「うん……」と言っていた

思わず笑みをこぼした

戸を閉め、俺も寝ることにした

諏訪信仰の蛙 V 『一騎』

諏訪子「この日がやつと、来たか…」

諏訪子は一騎討ちをする会場に立っていた

向こう側から大和の神達が来ている

そう、今日が御社宮司ミシヤグジと建御名方タテミナカタの一騎討ちの日だ

建御名方「お前が御社宮司か」

建御名方が前に出る

諏訪子「そうだ。私の名は御社宮司!!またの名を洩矢諏訪子!!」

神奈子「我が名は建御名方!!またの名を八坂神奈子!!」

二人「いざ、参らん!!」

諏訪子と神奈子の一騎討ちが始まる

須佐之男「ほう、チャクラか…」

諏訪子はチャクラを、神奈子は御柱おんぼしらを出した

互いに、一步も譲らぬ戦い

一つのミスも犯してはならぬ戦い

その戦いを見守る神々

零「頑張れ、諏訪子ツッ!!」

須佐之男「建御名方!!何をしている?遅い、遅いぞオ!」

神奈子「クッ!はああツ!!」

諏訪子「ウグツ!オラアツ!!」

互角、だろうか

いや、少し神奈子とやらが押されている

いいぞ、諏訪子

須佐之男の顔を見る

何をにやついている?

零「:『ディア』アイツの考えを読む」

……これはツ!?

零『ナビゲーター』ツツ!!」

辺りを確認する

ソコかツ!?!クツ!!間に合わん!!

諏訪子「ツツ!?!」

すると、いきなり諏訪子に目眩が襲った

神奈子「ドンラアアアツ!!」

神奈子の御柱をくらう

諏訪子「グハア!？」

神奈子「お前は中々の勇者だった。挑発することもなく、本気で我が力に挑んできた。お前のような戦士は久しぶりに戦った。感謝するぞ。そして、お前はここで死ぬ運命なのだ」

すると、会場の外から：

神ども「ギヤアアアアアアアツツ!!」

大和の神の叫び声が聞こえた

砂埃の向こうには、死んだ神と零が立っていた

零「スサノオオオオオオオオオオオオオツツツ!!!」

いくら須佐之男でも、この威圧に恐怖する

零「言ったよなあ…ズルをするなど…：…言ったよなああああああツツ!!」

須佐之男「ふ、ふん…：知らぬ。その祟り神が負けるのは絶対の確信を持っていた。そんなこと、この須佐之男がするわけがなかるうが。無いことを真実にしようなど出来ぬのだ。見苦しい悪あがきを見せて、滑稽だな」

零「『いいつ、何故分かったのだ』つと、完全一致で思っている」

須佐之男「なッ!？」

須佐之男は驚いた、本当に完全一致で思っていたからだ

零「いいか？俺は心を読めるんだ!!んなことわかんだよ!!神奈子とやら!!諏訪子の首筋を見てみる!!何かがある!!」

神奈子は諏訪子の首筋を見る

神奈子「こ、これはッ!？」

首筋には痺れの毒が塗られた矢があつた

それは小さく、針のような物だった

さつき、零が殺した神を見る。吹き矢を持っていた

神奈子「針が…刺さっている!」

須佐之男「建御名方!!貴様アアアアアッ!!」

須佐之男は持っていた剣で神奈子に急接近した

そして、剣を振りかざす

ガキイイイイン…

零「お前はこの戦いに関わった全ての者を侮辱した」

そこには、青い鉄のような…否、ダイヤモンドのような物に包まれた手で、須佐之男の剣を掴む零が居た

須佐之男「ッ!?この手!!まさかッ!!」

零の手を見た須佐之御は突然笑いだす

須佐之男「ついに見つけたぞオ!!お前を探していたぞ!!」

探していた?

そう、口走ったのだ

須佐之男「お前を倒せば、俺が最高神だア!!天照アマテラスなんか屁でもないぞ!!」

零「気でも違ったか。須佐之男よ。今の姿、愚かに見えるぞ」

須佐之男「何億と探し求めた物が目の前じゃあ誰でも狂うぞオ!!」

零「部下に嫌われてちやあ、上司失格だな」

そう言うのと須佐之男の後ろから…

神奈子が御柱で殴りかかった

須佐之男「グヘアッ!!??」

神奈子「侮辱しやがって…お前のことを尊敬していた私を殴り殺してやりたいわッ

!!

須佐之男「き、貴様ア…ガハア!!」

吐血

愚かで、無様である

神奈子「死ねええええええええッ!!」

神奈子が須佐之男を、御柱で殴ろうとする

だが…

須佐之男「己の柱など、我が剣で絶ち斬ってやろうぞッ!!」

御柱は斬られてしまった

神奈子「なッ!？」

須佐之男「オラアッ!!」

神奈子が斬られる

神奈子「ウガアアッ!!」

須佐之男「フハハハハハハ!!裏切った罪は苦しみながら償え!!」

両腕を斬られてしまった

須佐之男「安心しろ!!後でちゃんと、首を飛ばしてやるよ!!」

零「オラアアアッ!!」

須佐之男に攻撃しようとした、が…

そこに須佐之男は居なかった

須佐之男「そこには誰も居ないぞ…」

零「ッ!!」

背後をとられた

須佐之男「死ねえ!!」

剣を振りかざそうとする

零にはスローモーションに見えた

永琳達の研究を思い出した

生き物は死ぬ際、物事がスローに見えるとか

俺は死ぬのだろうか

地面に着いた雨のように、なくなるのだろうか

この命、無くなるのだろうか

雨のように無くなるか…

水を掴んでも、切っても、地面に行く運命のように、人生が終わるのか……

「君はやはり、何も出来ないものだ」

ふと、声があった気がした

何も出来ないか……前に聞いた気がするな、この言葉
何処で聞いたんだろう

「水は斬れないが、水が斬ることはできる」
斬ることが？

「君が、細胞を操るように、水も操れば良いさ」

「一滴一滴の雫が石を削るだろう？それと同じように……」

相手ヲ貫ケバ良イノサ」

恐ろしい、考えだ

ふと須佐之男を見た

そして、神奈子と諏訪子を見た

こいつなら、良いか

スローモーションが普通速度となった

ジャキイイイン……

須佐之男「……な……んだ……と……」

須佐之男の剣を斬ったのである

そう、水で

零「この水、どっから取ったと思う？」

零はさつき殺した神を見る

須佐之男もその神を見る

そこには、干からびた神が居たのだ

須佐之男「な……」

零「さあ、初めての弓矢。当たるかな」

須佐之男は零を見た

そこには、水で創った弓矢を放った零が居た

このスピードでは避けることが出来ない

ヤマタノオロチを倒し、手に入れた剣で跳ね返そうとするが……

矢はいとも容易く剣を削ったのである

そして：須佐之男の眉間を貫いたので

水威矢と名付けよう

零は須佐之男を倒すことに成功したのだ

零「神奈子!!直ぐに治す!!」

零は神奈子の両腕を拾い、くっ付ける

零『治癒の細胞』

神奈子の両腕はちゃんと治ったのだ

零「これで大丈夫だ、神奈子………？神奈子？」
気絶している

零「ふう、仕方がない。神奈子と諏訪子を神社まで運ぶか」
そう呟いて、この場を去った

諏訪信仰の蛙 VI 『信頼』

諏訪子「うう……」

神奈子「起きたか!!」

零「その様だな」

目を開けると神社の天井がある

そして、零と私と戦った神奈子が居た

諏訪子「なんで……あんたが……ここに……」

零「神奈子、説明してやれ」

神奈子「分かった。実は……」

……つて言うことがあったんだ」

諏訪子「だからあの時、目眩がしたんだ……」

神奈子「申し訳なかった!!」

諏訪子「良いよ、別に神奈子は知らなかったんでしょ? それに須佐之男は死んだんでしょ?」

零「ああ」

どうやら、諏訪子は神奈子のことを許したようだ

零「神奈子、お前はこれからどうするんだ? もう大和には戻れんだろう?」

神奈子「旅に出るとする」

零「そうか」

諏訪子「……ねえ。ここの一柱になってよ」

神奈子「え!?!」

神奈子は諏訪子の言葉を聞いて驚く

零「なるほど、その方がいいな」

神奈子「ま、待ってくれ。良いのか? 元は敵だったやつだぞ?」

諏訪子「元は、でしょ?」

神奈子「う……」

零「じゃあ、許してくれたお礼にこの神社を守る。って言う理由でどうだ? 納得しな

いか？つて言うか納得しなさい」

神奈子「うう……」

零「ここへ来て500年、俺ももうここを離れる。代わりにお前がここを守れ」

諏訪子「……………」

諏訪子は少し落ち込んだような表情を見せた

神奈子「……分かった。ここを守らせてもらう。よろしくお願い申し上げます」

諏訪子「うん」

零「俺は明日、ここを出る。二人で仲良くここで暮らしてくれ」

諏訪子「本当に行くの？」

零「大丈夫さ、たまに帰る。それまで待っていてくれ」

諏訪子「うん……」

零は諏訪子の頭を撫で、優しい声で答えた

諏訪子は顔を赤くして、笑っていた

神奈子「零よ、私はお前に感謝する。私が憎んだ須佐之男を倒し、傷も治してもらい。

本当に感謝する」

零「いや、零には及ばんさ。俺は傷ついた奴を治しただけ、ただそれだけだ。こんな感謝仕合の話をしてても楽しくない。酒を飲もうぜ」

神奈子「ああ、そうする」

零「諏訪子はどうだ。飲むか？」

諏訪子「怪我人なのになんで酒を薦めるのよ」

零「二人で飲むより三人で飲んだ方が、美味しい酒が飲める」

諏訪子「分かったよ。倉にある酒を持ってきて」

零「よしきた」

諏訪子「最高級のにしよう。しばらく会えないんだし、どうせならね」

零「分かったぜ」

諏訪子達は眠くなるまで、盛り上がった

そして夜中頃には諏訪子や神奈子は寝ていた

その夜明け近く、零は皆が寝ている間にここを出る準備をしていた

零「しんみりした空気は嫌なんだよな。二人には悪いが、ここを出ることにする」

零は旅の準備を終えると、神社の戸を開けて外に出た

零「また会おう。別に最後じゃないんだ。いつか会えるさ。その時までさよならだ」

そう呟き、鳥居を潜ろうとした

諏訪子「待って!!」

後ろから諏訪子の声があった

後ろを振り返ると、涙目になりながら叫んでいる諏訪子がいた

零 「諏訪子!?!何故…」

諏訪子 「物音がしたから…本当に行くの?」

零 「ああ、行くさ。さつきも言ったが、また帰ってくる」

諏訪子 「本当だよね!!絶対だからね!!」

零 「ああ、約束する」

必ず、と固い約束をする

諏訪子 「そう、じゃあ…目をつぶって手を出して」

零 「……?」

零 は言う通りに行動した

零 「こうか?」

諏訪子 「そう…」

すると突然、零は諏訪子に引っ張られた

そして…

諏訪子 「………」

零 「………!?!」

唇を重ねた

諏訪子は恥ずかしそうにしながら零に離れた

諏訪子「わ、私は貴方が好きなの。だから……ゼツツツタイに帰ってきてね!!」

零は戸惑ったが、直ぐに

零「分かった」

と笑顔で答えた

零「それじゃあな、元気だな」

諏訪子「うん、病氣やったりしないでね」

そういい、手を振りながら見送られた

見れば朝日が出ていた

綺麗だ：

俺は次の旅先を考えながら大きく歩く

九人の欲と一人の希望

九人の欲と一人の希望 1 『聖徳』

零 「ふう、やっとなつた。にしても、大きい都だな」

あれから結構な時が経った。俺は色々な所を旅し、この星の楽しさを実感していた
零 「今まで旅した中で、一番と言つても過言では無いぐらい大きい…楽しみだ」
そう眩き中に入ろうとするが：

?? 「止まれ」

零 「……」

?? 「お前、何者だ？強い力を感じるぞ」

零 「ただの旅人だ。妖怪とも戦ったこともあるから、その鍛えた力ではないか？」

?? 「それだけでは説明がつかない。上手く隠してはいるが、私には無意味。お前、名
は？」

零 「名前を相手から聞くより、自分から名乗り出るのが普通だろう」

?? 「お前に誇り高きこの名を教える義理無し。早く名乗れ」

零 「ふむ、良いだろう。神田零だ」

?? 「神田零ツ!? ほう、お前がか…」

なんだ、こいつ。俺のことを知っているのか?

?? 「本物かどうか、確かめて貰わせるツ!」

刹那、電撃を感じた

?? 「なんだ、偽物か」

零 「いや、偽物なんかじゃない」

?? 「なツ!」

零 「避ける必要がないから、避けなかったただけだ。静電気を避けたって仕方がないからな」

?? 「……分かった、お前が本物の神田零と言うことを確認した」

零 「……さつきから、思っていたんだが何故、俺の名を知っている?」

?? 「お前は、旅人の中でも有名な存在。知らない方がおかしい」

だからか。なんか、最近妙に視線を感じると思ったら、有名だったのか俺は…

知らなかった…

屠自古 「すまない、申し遅れた。私は蘇我屠自古と言う者だ。お前に頼みがある、来い」

零 「何故、上から目線なんだ…良いが、何をするんだ」

屠自古「良いから!!」

零「…え、俺頼み事を聞いてあげてんだよね? 可笑しいぞ?」

なに、この腑に落ちない感じは…

太子「私の部下がご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした!!」

物部つて言う人「太子様!! 貴女様のような人が頭を下げるなど!!…屠自古! 貴様がこの旅人にアホのような態度をとったから!!」

なあにこれえ、どういう状況? 俺にはさっぱり分からねえ

零「あの…気にしてないし、顔を上げてくれ」

太子「ありがとうございます!!」

物部「なんと! 心優しいお方じゃ!」

屠自古「…」

零「それより、何故俺はここに連れてこられたのですか?」

神子「はい、それは…あ、まず自己紹介をさせてもらいますね。豊聡耳神子と言いま

す

布都「私は、物部布都だ！宜しく！」

零「ああ、宜しく」

そう言い、握手する

布都「それで頼み事なんだが、遣隋使を守ってはくれぬか!!」

零「ふむ、別に構わん」

神子「いいんですか!?!」

零「良いが、遣隋使とは？」

屠自古「海を挟んで向こう側にある、『隋』と言う国がある。その国に行つて勉強をして、隋の知識を持つて帰るのだ」

零「ふむ、今までで行つたことは？」

神子「ありません」

零「なるほど、あつちの妖怪に殺されれば仕方がないからな」

神子「それもありますが、船が無事行き来出来るかも不安なのです」

零「それは、俺に頼んでも仕方がない。天候はどんな超人でも操れない。天人ぐらいじゃないか？操れるのは」

いくら俺でもそれは不可能である…多分な

多分、出来ないと思う。うくん、どうだろう？

神子「そうですか…でも、この願いを引き受けてくれてありがとうございます!!」
零「んで、いつ隋に行くのだ？」

神子「一ヶ月後です」

零「そうか、わかった」

そうやって、改めて握手をした

九人の欲と一人の希望
II 『志望』

神子「こちらが小野妹子さんです」

妹子「貴方が神田零殿ですな。私が小野妹子です」

零「神田零だ。よろしく」

遣隋使の中でも、優秀な人物「小野妹子」か。妹子という名前の割りには髭オツサンな外見だな。しかも目付き悪い。

だが、こいつに『ディア』をしてこいつの基本的な志しを見たところ、太子様のために勉強するぞ!! ってな感じの普通に良いやつだった。

うーん、でも無闇に人の心を見るもんじやないな。今度から気を付けようしよう。

そんなことを思っていると、妖怪の臭いを感じ取った。

実は、この國を守る、言わばポランティアのようなこともやっていた。

零「あ、妖怪が近づいてくる。ちよつと追い返してくるわ」

妹子「なんと！護衛をしてくれているとは本当だったとは。ありがたい」

零「それじゃ。『瞬間移動』」

「ありがたい」この言葉を言われて嬉しくない奴は…いや、時と場合によるが、大体は嬉

しいだろう。実際、その言葉があるからこそ無料で守っているのだが……
さて着いたぞ。

おや？

零「妖怪の臭いが妙に強いと思ったら、血肉が飛び散ればそれは臭いが強いわけだ」
おまけに自然エネルギーも微かに残っている。

零「仙人か？ 殺り方に容赦がないことをみれば、戦闘慣れした仙人か、仙人と言うことを悪用した邪悪なる者か」

??「後者よ」

後ろから声がする。

零「隋から来たのか？」

青蛾「ええそうよ。霍青蛾。よろしくね」

零「ピツタリな名前だな。なぜここに来た？」

青蛾「ここに、人が死ぬのは何故なのだろうと悩んでいる偉い人がいるらしいから、道教を薦めてみようかなって思ってたよ」

偉い人？ 神子か？

へえ、欲を見通せる者故の疑問なのだろうか。

一応、俺は不老不死だが、寿命がないってだけで、攻撃よ衝撃による死はある筈だ。そ

んな俺だが、その事について疑問になったことはない。

青蛾「貴方ではなさそうね。でもお強いよね？」

零「まあな、道教はこの國にはあまり向かないと思う、一応案内はするが…」

青蛾「あら？簡単に信用していいのかしら？」

零「嘘をついてないからな。分かるんだよ、そう言うの」

青蛾「ふくん。まあいいわ。案内してくれるのは嬉しいわ」

零「こつちだ」

案内をすることにした。

一応『ディア』をして、確認したが、本当だった。

青蛾「にしても、貴方からすごいエネルギーを感じるわ。何者よ」

零「旅人さ」

青蛾「旅？何故、旅を？」

零「実はさ、恋人が月に行つたんだよ」

青蛾「月？貴方達、すごい技術を持っているのね…こんな島のような国でその様な技

術は…恐れ入るわ…」

零「まあ、俺は妖怪から守るためにここに残つたんだ。それ以来会っていなくてな。

いや、会えなくてな…」

永琳は今、何をしているのだろうか。

俺は瞬間移動は出来てもある程度距離があつたらそこへは行けないし、物を創造することは出来ても、ロケットのような細部までしっかりやらないと動かない、機械系の物を造ると生命エネルギーが危ない。

零「だから、俺は旅をしながら月へと行く方法を探しているんだ」

青蛾「そう。強くて硬い、誰にも壊すことの出来ないその愛が、貴方をそうさせているのね」

零「やめろ、恥ずかしい。わざわざ口にしないでいい。ほら、ここだ」
國についた。

すると番人が…

番人「零様、そちらの方は…」

零「こいつは…「恋人よ」…は？」

青蛾「恋人なのよ」

番人「そうでしたか、失礼しました。どうぞ」

中に入る。

青蛾は俺にくつついている。

零「なんのつもりだ？」

青蛾「恋人のつもりよ」

零「俺には恋人がいる。一人しか愛せない」

青蛾「夫は妻を何人ももっていいのよ」

零「俺はそれに反対する人なんだ。離れろ」

青蛾「女に向かつて離れるなんて、私綺麗なのに」

零「心は汚いけどな」

青蛾「全く分かりませんわ」

零「邪仙が」

青蛾「じゃ、邪仙はひどくありません？」

零「知るか」

そう言い、睨む。

早く離れろと言わんばかりに。

青蛾「わ、わかつたわよ」

零「よろしい。さて、もうそろそろ着く。あの大きい建物がそうだ」

青蛾「へえ、そんな大きくはないわね」

零「まあ、こんなもんだろ」

そんなことを言いながらてくてく歩いていく。

零「にしても、よくここまで来たよな。船は大丈夫なのか？」

青蛾「ええ、運良く波は少なかったのよ」

零「なるほど」

そう言い、門を開けた。

布都「おお！おかえ…り？その方は一体なんだ？」

青蛾「零の…」

殺気を放つ

青蛾「友人です…」

布都「おおそうかそうか。にしても…もしかして、隋の人か!？」

青蛾「え？ええそうよ」

布都「零!! 私達の為にワザワザ隋の人を呼んでいてくれたのか。どうやって連絡したかは分からないが、どうでもいいこと。ありがとう!!」

零「え？」

布都「さあこつちじや。太子様に紹介せねば!」

なにか勘違いをしているようだ。

ま、いいか。

青蛾「この娘、少しおバカな娘ね」

零「そつとしといてやれ」

だが、そこが良いところでもある。

布都「さあ速く!!」

零「分かった、行こうか」

青蛾「フフ、ええ」

九人の欲と一人の希望
111 『臆』

布都「太子様!!朗報ですぞ!!」

神子「ど、どうしたのですか?」

布都は嬉しそうに、神子のことを呼んだ。

神子はその興奮した布都の顔を見て、少しビツクリとしている。

布都「なんと、零殿が隋の人を呼んでくれたらしいのです!!」

神子「隋?!」

扉の向こうには、布都の反応が面白く静かに笑っている零と、青い髪をした美人の女性が居た。

青蛾「ご機嫌よう。私、霍青蛾と言う名の者で御座います」

神子「え、あ、ごきげんよう。豊聡耳神子と言います」

青蛾「早速、この小さな島に來た理由をお話したいかと思えます。その方が本題に入りやすいので。零さん、少し豊聡耳様と、その部下達と話させてください」

零「…?構わないが…いや、聞かないでおこう。分かった」

青蛾「あら、女性に優しいのね。しつこい男は嫌われますから」

零はドアを閉じ、町へと向かった。

・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |

しかし、気になる。

何故、俺を外に追い出したのか……

まあ良いや。その飯屋で腹を満たそう。

ガラガラガラ

店員「いらつしやい！」

零「あーつと、すまない。空いてる席はないか？」

店員「すいませんね。相席しかありません」

零「どこだい？」

店員「あそこです。でもあの席に座っている人は、結構地位の高い人ですぜ」
そこには屠自古が居た。

零「ああ、知り合いだ。気にしなくて良い」

店員「ええ!?そ、そうなんですかい…」

零「ああ、心配ありがとう」

そう言い、屠自古が座っている席へ行った。

零「やあ、独りか？」

屠自古「…いきなり無礼な事を言う奴だなと思つたら、お前か。何だ?私を口説きに来たか?口説き方間違つてるぞ?」

零「安心しろ、俺には恋人がいる」

屠自古「自慢か？」

零「半分な。おい、その店員。オススメ一つお願いだ!」

店員「まいど!!」

屠自古は少し不機嫌そうに言葉を発した。

屠自古「何の用だ？」

零「この店で飯を喰おうと思つていたら、空いてる席がここしかなかつただけだ」

屠自古「ふん、確かに混んでいるな」

零「お前もここで飯か?ならちようど良い、奢つてやるよ」

屠自古「え、いや良いよ。何か企んでるのか?」

零「お前の中の俺のイメージはなんなんだよ」

屠自古「ズル賢い、嫌な男」

零「そこまでド直球で、しかも真顔で言われると逆に清々しいな」

『ディア』で心を読む気にもならなかったわ。

屠自古「だが、なにも企んでいないのなら、奢られても構わないぞ」

零「何故そんなに上からなんだ…」

店員「ハイお待ち」

零「いただきます」

・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |

屠自古「ふう、旨かったな、あの店のは」

零「いっぱい喰いやがって」

屠自古「奢ると言ったのはお前だ」

零「分かっている。男に二言はないって言うだろ？」

屠自古「さてどうかな」

零「……」

屠自古「着いたな」

零「ああ、そうだな」

戸を開けた。するとそこには、何やら考え込んでいる神子と布都が居た。

零「どうかしたか？」

神子「え、あ……いえ、なんでもありません」

零「そうか？なら良いんだが……」

どうしたんだろうか……何かあるのは確かだ。

『ディア』をしようか……

そうしよう。

零は『ディア』を試みた。

神子（どうすれば……零さんには心配かけたくないし……でも、人が何故死ぬのかの研究が続けられる……でも、怖いよ……い、いや、臆してはダメ……）

なにかに恐怖を抱いているようだ。だが、それを乗り越えれば人が死ぬ理についてを追求することを続けられるらしい。

布都は……？

布都（太子様に万が一の事があつたら……その為には私が最初に実験台として……太子様

の為なら死など怖くない…)

『死』?死ぬのか?

何故?何のために?

……あの邪仙か…

零「神子、布都」

神子「え、はい?」

布都「な、なんじゃ?」

零「アイツに何を言われた?」

神子「え…あの…」

布都「隋の戦術や文化について話し合っていたんじゃ!!」

零「そうか…」

青蛾は確か…道教を薦めに、この國へ来たそうだ。さつき、聞いたからな。

「道教」「死」「仙人」…

もしかして…

零「尸解仙か…?」

神子「!!」

布都「!？」

どうやら、
その様だ…

九人の欲と一人の希望　Ⅳ 『覚悟』

神子「……すみません……でも、どうしても仙人に成りたいんです」

布都「……………」

辺りを見るが青蛾の姿はない。

零「謝る必要性はない。お前の人生はお前が決める」

神子「え……」

零「ただツ!!俺には人の人生を決める権利はななくとも思い直させる権利はある……!」

神子「……………」

零「もう少し考えるべきだ。生きて周りの人間を想うか、人が死ぬ理由を世界の人間を想うかを……………」

神子は布都、屠自古を見た。

きつと彼女は、その周りの人間に値する布都と屠自古を見ていたのだろう。

神子「わ……私は……」

唇が震えている。

零「布都……お前もだ」

布都「……！」

零「考え直すんだ」

布都「…私は太子様に…」

零「なんでもかんでも神子に頼るんじやあねえぞ」

布都「ッ!!」

零「お前の意思だ。お前自身の人生の『覚悟』に必要なのはな」

布都「だッ…黙れッ!!私は太子様に付いていくのだッ!!」

零は、ゆつくりと布都に近付き、囁いた。

零「それがお前の『覚悟』か…?」

布都「あ、ああ。そうじゃ。これが、私の…」

零は、ため息をついた。

いや、失望した。それが正しいだろう。

彼女から『覚悟』が見えなかったのだ。

零「君は、決断をする勇気がないだけだろう?」

布都「なッ!?!」

否めなかった。

零「自分自身の『覚悟』は正しいと胸を張って言える勇気がないだけだ」

布都「黙れッ!!」

零「自分で決める。仙人になるかならないかは、自分でだ」

布都「…なる。なるぞ。なってやるぞおおッ!!自分で決めたぞッ!!」

零「……………そうか」

布都は、泣いていた。泣きながら、零を睨み付けていた。

零「ならば、もうなにも言えまい」

神子「……………わ、私も…」

神子が震えた唇を動かした。

今にも泣きそうな目でこちらを見た。しかし、その目からは『覚悟』が見えた。

神子「仙人になります…全ての人間のために」

零「…そうか」

バタンッ

零は、哀しい顔で部屋を出た。

零「彼女らを止めることが出来なかった自分にムカつく。まったく…俺は自分勝手だ」

青蛾「あんな止め方なら仕方ないわ」

青蛾は柱にもたれながら言葉を発した。

零「道教を薦めるんじゃないやなかったのかよ」

青蛾「薦めてるじゃない。遠回しにね」

零「まあ、いい。俺に止める権利はない」

青蛾「意外と紳士的ね！」

零「……ハア。別に仙人になることが悪いことじゃあない。ただ、彼女らは一度死ぬことになるだろう？そこが気に食わなかった」

青蛾「まあ、そうね。でも安心して頂戴。必ず彼女らは仙人になるわ」

零「……必ずだぞ」

青蛾「ええ……必ず」

零は自室へと向かった。

青蛾にはドス黒い悪は心の芯には無い。それは知っている。

だから、自分への怒りが込み上げていた。

怒りの矛先を向ける人が居ないから。

零「俺は……自分勝手だな」

く朝く

空気が重い。

それだけで、現時点の状況は説明できる。

零「おはよう」

布都「おはよう…」

神子「おはよう御座います…」

屠自古「…あのさ」

屠自古が口を開いた。

屠自古「私は仙人にならないよ」

布都「ッ!？」

零「そうか…」

神子「そうですか…」

屠自古「自分で決めた。私の人生だからな。零の言う通りな。」

布都「…」

この時、布都は憎しみが沸いていた。

九人の欲と一人の希望 V 『怨霊』

屠自古「なんだ？こんなところに呼んで」

布都「……何故じゃ……」

屠自古「は？なにがだよ」

布都「貴様も太子様に忠誠を誓ったろうが!!」

布都は怒っていた。怒りは頂点に達し、今にも殺しそうなくらいだ。

屠自古「……忠誠を誓ったのはお前の意思だろう？私もそうだ。それと同じで仙人にならないの私の意思だ」

布都「なに？」

屠自古「零も言っていたが、自分の意思が無いんじゃないか？お前にはな」

布都「なんじゃと!!」

屠自古「そもそも、お前がこう怒っているのは、自分の意思が言えた私への『嫉妬』なんじゃないか？」

布都「違う!!貴様ふざけるなよ!!」

布都は屠自古の胸ぐらを掴み、叫んだ。

屠自古「ふざけてなんかいない」

布都「貴様に嫉妬だ?!?笑わせるな!!」

屠自古「だったら、大人しく仙人になれ。私は私だ。自分の愚かさを怒りと嘘の善で隠すなよ。お前が決めたんだからな」

布都「クッ!!」

布都は屠自古を掴んでいる手を外し、不発弾の爆弾のような怒りを隠さずその場を去った。

布都「あやつは何故、あそこまで冷静なのじゃ」

少し冷静になってみたが、認めたくない嫉妬を少し認めている自分がいた。それが更に苛立たせた。

布都「この怒りはッ!!どうすれば良いのじゃッ!!」

辺りの空気が変わった。一瞬にしてだ。

その異変に布都は気付く。

布都 「なんじゃ!?!」

■ ■ 「憎いか?」

布都 「出てこい!! 妖怪か? 怨霊か!?!」

■ ■ 「その怒りはどこに向ける?」

布都 「何者…なんだ?」

謎の声は、なにか安心感と不安が入り交じる感情にさせる。

その為か、大人しく話を聞いてしまう。

■ ■ 「アイツにぶつけければ良い。その怒りは何故出来た? あの男だろう?」

神田…零…

そうだ、奴のせいでこんなに苦しんでいる。

自分の意思? 滑稽なものだ。そう思えてきた。

布都 「……」

■ ■ 「殺すんだ。奴を、殺すのだ。」

布都 「……」

布都は何かが自分の中に、自分の心の中に入って来るのを感じた。

■ ■ 「ついでに言っておこう。俺の名前は……」

零「ハア……」

青蛾は仙人になるための道具等を持って来るため、一度だけ隋に帰らなければいけないらしい。なので、零が遣隋使の護衛として隋に行く為の船に、青蛾も乗るらしい。

そして遣隋使の護衛の俺は、この国に戻ったら神子とは会わず、旅を続けてほしいとのことだった。

まあ、顔は合わせづらいからもあるだろうが、それ以前に俺に心配されたくないんだろう。

零「何でこう、上手くないかなんだろうか」

零は一人寂しく酒を呑みながら考えていた。

そこに……

コン……コン……

零「……入っついていいぞ」

布都「……」

布都だが、布都ではない『なにか』が零を警戒させた。

九人の欲と一人の希望 V I 『死人』

零「用はなんだ」

布都「自分の意思についてだ」

零「わかった、聞こう」

こいつは、明らかに『布都ではない』なにかだ。

妖怪が取りついている……うまく隠れているが何となくわかる。

神子や屠自古は分からないだろう。

布都「疑問なんだけど、自分の意思を貫くってさあ、それはただ回りの意見を聞かない自分勝手な人間になれて意味じゃあない？」

零「そうは言っていない。俺が言ってるのは自分の意思を心の中に仕舞わず、ちゃんと回りの人にわかってもらえって言ってるんだ」

布都「そっかあ……」

なんだこいつ……品がどんどん悪くなっている。

布都「じゃあ……私も自分の意思を示そうかなあ」

零「……………」

布都「テメエを殺してやるぜえ!!」

零「かかってこいよ」

布都「死んで、悔やめ!!」

神子「何を…してるのです…?」

神子?そこに神子が居たのだ。

布都「え…ああ、み、神子様じゃあないですか。これは…あれですよ。戦闘の練習です。より本当の戦いに近づける為に演技をしてみました」

神子「そうですか…もうひとつ、良いですか」

布都「ええ、なんなりと」

神子「貴女は誰ですか?」

その言葉で布都は…否、妖怪は青ざめた。

布都「し、質問の意図が分かりません…」

神子「そのままです。言葉通りの」

布都「私は、布都ですよ。認知症ですか?」

神子「貴女は本物の布都と、性格が違う。態度が違う。雰囲気が違う。そして、私の呼び方も違うのですよ。本物は『太子様』と呼びます。貴女は『神子様』と呼びました」

布都「ツ!!ド畜生がアアアツ!!」

零「俺からしたら、ド畜生はテメエだよ」

零は布都を殴った。いや、殴ってはな。零の腕は布都を貫通させている。でも、傷はついていない。つまり、布都の中にいた妖怪を殴っていたツ!!布都の体に干渉して、直接妖怪に攻撃をした。よって、布都はその場で倒れそうになったところを零に支えられて、妖怪は飛んでいった!!

妖怪「貴様らアアアツ!!」

屠自古「何事だ!？」

妖怪「……ツ!!」

妖怪は、屠自古の首を軽く絞めた。

妖怪「こいつの命がなくなってもいいのか？」

零「ハア……」

妖怪「なんだ？溜め息？頭がおかしいのか？こいつは、人質だぞ!？」

屠自古「私は人質になった覚えはないな」

妖怪「はあ？」

屠自古「もし私が、雷を扱える人間だったら？」

妖怪「ツ!!グガアアアアアアアツ!!!」

妖怪はヨロヨロと倒れ、屠自古は解放される。

妖怪「……」

零「質問だ、お前はなぜ俺を狙った」

妖怪「フフ……」

零「あ？」

妖怪「フハハハハハハハハハハ!!!」

零「なッ!?!」

突然、笑い出したのだ。

妖怪「『あの人』の事を言うわけがないだろうが!!そしてまだ、俺は負けてないぜ？」

屠自古「ッ!?!体が…動かないッ!?!」

布都の体が勝手に起き上がり。

近くにあった刃物を持ち、布都に近づいていった。

神子「布都!!」

妖怪「無駄だよ!!こいつは今、俺が遠隔操作してんだからな!!触れた生き物はいつでも操れるのサア!!」

妖怪が言い終わった瞬間、布都の動きが止まった。

妖怪「なんだ?早く動けよ」

零「俺も遠隔操作出来たとしたら良いのになあ」

妖怪「何だと……テメエ、どこまで俺の邪魔をしやがる!!」

零「さあな」

妖怪「クツ!!だが、テメエは能力が大量にあるから、それぞれに分散した力が弱いんじゃないか?ほら、ちよつとずつだがこの女に近づいてるぜ!!」

零「ツ!!」

俺の弱点が分かったようだ。

ヤバい、このままじゃあ!!屠自古が!!

……!!神子が妖怪を殺そうとしている?

妖怪「おつと、神子さあん……今俺を攻撃してみろ?操っている間に俺が死んだら操っていた対象もお陀仏だぜ?」

神子「なツ!!」

妖怪「零くうん。そろそろ操ってる右手が限界じゃあないか?右手が千切れそうだよ?ん?」

零「クアツ!!」

右手から血が吹き出ている。

ゴキゴキと音が聞こえる。

妖怪「もう、テメエの腕は限界のようだなツ!!」

妖怪「次はお前……あ？」

零は、怒りでなにもわからなかった。

妖怪が見た光景は、生え変わった腕、周囲の霊力、零がチャージしたとてつもない力。

妖怪「お、おいおい。なにやってんだよ」

零「……」

妖怪「な、なんで疲労してる状態でたてるんだよ……」

零「……」

妖怪「近づくな!!俺に寄るんじやあねえ!!」

零『インフイニティ』……」

妖怪「は?……な、なん……だ?痛いぞ。痛い……痛い痛い、イタイイタイイタイイツイツ

!!!!

零「苦しんで死ぬ……」

妖怪「ウガアアアアアアアアアツ!!!」

次の瞬間、妖怪は木っ端微塵になった。

布都は、生きている。どうやら操ってないらしい。

神子「零さん……」

零「守れなかった……な……にも……」

零は、意識を手放した。

九人の欲と一人の希望
V I I 『希望』

『……零』

誰だ……聞き覚えのある。

ン？目の前の岩は何だ？

『……零』

誰かが、俺の肩を叩いている？

振り向けばいいのか？

ミ タ ナ

零「うわあああああああッ!!??」

神子「零さん!?!」

零「ハア……ハア……」

……夢、か？

後ろにウジ虫だらけの、多分女の人があった。

あれは一体……

布都「零!!大丈夫か!?!」

零「あ、ああ……そうだ!! 屠自古は!」

神子「死にました……」

零「……………クソツ!!」

結局、守れなかった!!

自惚れていた!! 今まで上手くいっていたから!!

今回も大丈夫だと……思い込んでいた……

??「そう悔やむなよ。死んだけど、こうしているんだからさ」

零「いや、俺は結局、屠自古を守ってやれなか……ん?」

屠自古「まあ、そうだけどさ」

零「ああ、幻覚まで見えるように」

屠自古「なつてねえよ。バーカ」

零「え、マジで言ってる? 神子、こいつ見える?」

神子「ええ、見えます」

……………え?

零「エエエツ!」

屠自古「いや、死んだんだけどさ、なんか幽霊として生まれ変わったわ」

零「いや、生まれてねえじゃん!? むしろ死んでるじゃん!」

屠自古「ああ、そうだな。死に変わった」

零「どうツツコめばいいんだよ!？」

屠自古「うん、私も戸惑ったよ?生きてるのか?なあんて思ってたら足無いし」

神子「実際、私達もビツクリしましたから」

零「幽霊になったのか……」

屠自古「そういうわけさ。悪霊だ」

零「どうか呪わないでほしい」

屠自古「呪わねえよ」

まだ頭の中が混乱してる……

屠自古は幽霊になったわけか……それで、俺たちの前にひよこつと出てきたのか……

屠自古「死んだ後さ、何か目の前に岩があったんだよね」

零「岩?なんでさ……」

屠自古「知らん。そして、中から聞こえるんだよ。来るなうって声」

零「岩……か……」

もしかすると……

零「なあ、それって……」

屠自古「おい、布都。なにか零に言うんじやあなかつたのか?」

なんだろうか？

布都「……申し訳なかった!!お主に……いや、皆に迷惑をかけてしまった!!お主の『自分の意思』の話に納得いっていなかった。だがもうわかったんじや!!もう胸を張って言うぞ!!お主に止められるのは分かっている!!だからこそ、言うぞ!!私は『仙人』になる!!」

フ……そんなことか……

そんな、イキイキとした眼で言われちゃあなにも言えぬじやあないか。

零は布都の頭に手を乗せ、撫でた。

零「頑張れよ」

布都「ツ!!うむ!!」

零「なあ、神子」

神子「はい？」

零「隋に行くのは明日だ。だから、最後にいつておく」

神子「はい……」

零「ありがとな」

神子「……ツ!!いい、いえ……その言葉を言うのは私たちの方です……本当にありがとうございます……ございました。この御恩は忘れません!!」

神子は、声を震わせていた。

青蛾「失礼します」

零「青蛾か…どうした？」

青蛾「いえ、ただお見舞いに来ただけですわ」

零「そうか、ありがとう」

青蛾「明日、船が出るわ。準備してね」

零「はいよ」

神子「あの…手伝いましょうか？」

零「いいよ、ありがとう」

くそして、別れの時く

零「じゃあな、元気でな」

布都「お主には感謝してもしきれぬ。また会おう」

零 「おう、元気でな」

屠自古 「死んじやったけどさ、これでよかったと思うんだ。太子様の近くで守り続けれるし」

零 「そうか、頑張れよ」

神子 「あの…頑張って仙人になりますので…あなたも頑張ってください!!」

零 「分かった。頑張るよ」

こう言うのは、悲しくなるから苦手だが…まあ、いいか。

そう思っていると、船は陸から離れていった。

青蛾 「ねえ、別に隋から戻ったら会えるんじゃないの？なんで、そんなに……」

零 「俺が旅をしている理由、言ったよな」

青蛾 「ええ」

零 「俺の役目は遣隋使の護衛、船の護衛だ。それが終わったら仕事はなくなる。だから、また旅に出るんだ」

青蛾 「そう……」

永琳……待っててくれよ……!!

空の雲は輝いて

空の雲は輝いて

1 『歴史』

零「着いたか…」

妹子「そうですね」

俺は船を降り、隋の人々に歓迎をされた。

女「ようこそ!!我が隋へ!」

青蛾「久しぶりね」

女「おお!!青蛾じゃあないか。久しいな!!」

零「青蛾、彼女は?」

青蛾「この娘は『宮古芳香』よ。私の親しい友人よ。芳香ちゃん。この人は『神田零』よ」

芳香「よろしくお願いしますね。零さん」

零「ああ、宜しくな。芳香」

芳香「え!?!あ…」

青蛾「いきなり名前前で呼び捨てってスゴいわね…」

零「…？すまない、嫌だったか？」

芳香「い、いや。なんの問題もないぞー!!」

零「そ、そうか…」

変わった娘だ。まあ、俺もだが。

しかし、いい雰囲気の国だ。

楽しそうというか、我が国より発展してるって言うかな…。

零「さ、隋の王に挨拶をしに行こう」

芳香「ああ、それなんだけど…」

青蛾「今の王様は、虫の妖怪に呪いを掛けられてて…」

零「呪い？」

青蛾「そう、呪い。どんな呪いかは王様自身が口止めしてるから、貴方には言えないわ」

零「そうか…」

芳香「その為、会うこともできないのよ」

零「ふむ…分かった。妹子には伝えておく。取り合えず、隋の技術を勉強させてもらいたい」

芳香「分かったわ!!案内するから!!」

零 「ありがとう。みんな!!この娘が案内するらしいから、ついてってくれ」

そう言うのと、妹子を含めた遣隋使は芳香についていった。

さて、俺は観光でもしようかな。

青蛾 「フフ…」

零 「どうした？」

青蛾 「あの娘、可愛いでしょ？」

零 「そうだな」

青蛾 「もう可愛くて可愛くて仕方がないわ!!」

零 「そ、そうか…」

そういう趣味か？

別に、止めはしないが…

青蛾 「違うわよ」

零 「アツハイ」

零「この『餃子』ってのが美味しいな…『拉麺』って言うのものな」

青蛾「毎回毎回思うけど、沢山に食べるわねえ」

零「いや、普通だよ。寧ろ少なくとも逆に美味しい。俺は『脳を100%活用できる』んだ。でもその為には栄養も摂る必要がある。100%に値する栄養がこれだけだったら、少なくとも感じないか？」

青蛾「そう考えれば…あなた少食ね」

零「少食どころじゃあない。普通の人間じゃあ米を三十粒食べて腹一杯って言うてるようなもんだぜ？」

青蛾「死んじゃうわ」

零「栄養失調でな。過労死や老化はない。俺って不老だから」

青蛾「あら、私と永く過ごせるじゃない」

零「お断りだ」

席を立てて代金を払い、店の外を出た。

そして、最初に目に入って来た光景は、さっきの言葉に怒ってブンブンしている青蛾……の奥にいるチンピラに囲まれている少女の姿。

チンピラ1「嬢ちゃん。チョイと内のとこ来ねえか？いいことあるぜ」

チンピラ2「ヒヒツ、可愛い顔してんじやあねえか」

少女「……貴殿方、お強いですか？」

チンピラ3「そりやあな。見た目でわかるだろ？この筋肉とか……ゲブツ!!」

チンピラは筋肉自慢を始めた瞬間、後方へと飛んでいった。

理由は、少女の拳だ。

少女「なんだ……弱いじゃあないですか」

チンピラ2「テメェ!!」

チンピラは右手のパンチを繰り広げる。しかし、予知していたかの如く、少女は右回転をし、右の拳で顔を殴る。

他のチンピラは勝てないのを悟ったのか、スタコラと逃げていった。

少女「お手合わせ、ありがとうございました」

少女は、その場で礼。

零「素晴らしい拳だ……」

少女「次は、貴方ですか？」

零「いや違う。別に相手になってやっても良いのだが、少し君に興味がわいてな。名前は？」

美鈴「私は……『紅美鈴』（カンメイリン）です」

零「そうか、俺は『神田零』だ。そして君……」

零は、少女の耳元で囁く。

君……妖怪だろうか？

ズドオオオン……

零「おいおい、人の話は最後まで聞こうぜ？」

美鈴「貴方は……強いようだ!!」

美鈴が零に蹴りを入れようとして、零はそれを指で止めていた。

零「やれやれ……どうなっても……知らないからな？」

空の雲は輝いて 11 『正拳』

美鈴「私の蹴りを指で止める……何者ですか？」

零「旅人……かな？日本のね」

美鈴「へえ……あんな小さな島のような国にもこんな強いお方はいるのか……」

零「神様にもなったことがあるぜ」

美鈴「こりや期待が出来そうだなッ!!」

美鈴は零に、拳を振りかざす。見事に零の右頬に当たった……ように見えたが、拳の独特の感触はない。顔で受け流したのだ。

そのまま回転しながら、殴つてくると予想した美鈴は左腕で受け止めようとした……だがしかしッ!!

零「ガードのタイミングが早い。バレるぞ俺に」

美鈴「なッ!?!」

なんと、零は美鈴の背後で、美鈴を腕で絞めているのだッ!!

零は美鈴が左手でガードしたのを見て、拳が効かないのが分かった。そこで、美鈴の体に沿って零の体を回転させて、背後に回ったのだ。

美鈴 「…お強いですね」

零 「お前は、俺の閉めている腕に『氣』を送り込み、この状態を逃れようとしているな？」

美鈴 「ツ!?!」

何故バレた?と言う顔をしている。

まあ、『ディア』を使えますから。

戦闘中はあまり使わないようにしてるが、余裕の声質で話していたから、気になつたつて訳さ。

そして、バレたことによつて、相手が対処法を知っていると思ひ込む。実は考えていないがな。唯一の逃げ場は無くなる。

美鈴 「ハア……ハア……」

危機、それが彼女の頭に過っている言葉だろう。

彼女がヤケクソで氣を使つたらピンチ。つまり、俺も危機の言葉が過つてる。ちよつと困るなあ(笑)

俺がこんなに余裕な理由は、簡単。彼女がヤケクソを起こさないことを信じているから。

見るからに、彼女は戦闘のベテラン。ヤケクソは流石に起こさないだろう。と言う意

味で、信じている。

零「君は、一つの拳を俺に向けた。それだけでほぼ敗けの状態だ。つまり、俺と君の差は目に見えているだろう？ここは、潔く認めた方がいい。」

美鈴「……999999戦中、999999勝でした。初めて敗けを味わい、誠に光栄です。『降参』です……」

その言葉を聞いて、俺は腕を離す。

美鈴「お手合わせありがとうございました」

零「敗けを認める君は、嫌いじゃないぞ。悔し涙もまた闘い。次に向けての力になるんだ」

美鈴「……はい」

初めての敗け。それを認めたことで悔し涙を流す。

彼女のいい経験になれたと思うと嬉しいが、女の子を泣かせたことに、不快を感じる。

青蛾「スゴいわね…芳香ちゃんと同じ…いや、それ以上かも知れないわ」

零「芳香ってそんな強いのか？意外だな…」

青蛾「武術を独学ね」

零「へえ…」

青蛾「あら？そろそろ帰りましょうか。宿の手配はしているらしいから」

零 「そうだな、そろそろ…」

美鈴 「待ってください!!」

零 「ン？」

美鈴 「そ、その…で、弟子にしてくださいッ!!」

零 「……ン？」

弟子…か？

いや、別にいいが…俺は日本人。彼女はこの母国を離れることになるんじゃないか…

美鈴 「日本にでも、地獄でも天国でも…どこへでも付いていきます!!」

それはそれで怖い。だが…そう言うことならば…

零 「良いぜ？」

美鈴 「あ、ありがとうございます!!」

師匠かく。少し、にやけてしまうな。

別に、彼女の真剣な気持ちを、軽い気持ちで受け入れる訳じゃないが、にやけるも
んは、にやけるぜ。

空の雲は輝いて 111 『弟子』

芳香「そんなに強いのか？」

美鈴「初めて負けましたもん。しかもすぐに」

芳香「へえ、今度、手合わせ願おうかしら」

零「いつでも構わんよ」

芳香「凄い自信ね」

零「まあ、神とかと戦ったからな」

皆「「ええ!」」

芳香が手配してくれた宿。どうやら芳香は人望が厚いようで、美鈴の宿泊を宿主に頼んだところ、「芳香ちゃんが言うなら」と、OKが出たらしい。

その宿の夜、女性と男性に別れて就寝する予定が、雨漏りが酷いらしいので一緒の部屋になった。ちなみに小野妹子や、他の遣隋使はもつと豪華な宿に留まっているらしい。羨ましい。

所詮、護衛ですか…うう…

美鈴「ところで師匠、いつから修行をするのでしょうか？」

零「ん、そうだなあ……。美鈴、君はいつから修行をしているんだい？」

美鈴「多分60年です」

零「60年でその技術か……。うむ。修行はお前の自由にやってくれ」

美鈴「え？」

零「俺はそれに手を加える。明日、早速やろう」

美鈴「あ、はい!!」

……と、美鈴は修行に励む良い弟子です。

にしてもこいつ、60年でこの戦闘技術が凄い。人間で言えば……。良い例えがなかったからやめよう。

青蛾「もう師匠って感じになっているじゃあないの」

零「そうか？」

芳香「そうね。私も弟子にしてみらおうかしら」

青蛾「コラコラ、弟子になっちゃったら日本に行かなきゃならないわよ。隋での仕事はどうするのよ？」

芳香「冗談よ、冗談」

零「そろそろ寝ないか？眠くてしょうがない」

美鈴「そうですね。寝ましょう」

そう言い、灯を消して寝ることに…

ガサガサッ

芳香「キヤアアアアアアアアッ!」

零「どうしたッ!」

芳香「レイイイイ!!」

暗闇の中、芳香が恐怖しながら勢いで抱きついてきた。

零「うぬおッ!?!い、一体どうしたんだよッ!」

芳香「怖いよおお…」

青蛾「ああ、また虫が出たのね」

零「虫?」

青蛾「芳香ちゃんは虫が苦手なのよ」

零「へえ、意外」

青蛾「女の子に抱きつかれながら冷静でいる貴方が、男として意外よ…」

美鈴「と、取り合えず、灯…つけましようか?」

零「よろしく」

芳香「怖いよ…」

零「芳香…」

芳香「うう…」

零「芳香!!」

芳香「ひゃう!?!」

零「もう虫は居ないよ」

芳香「あ…ありがとう…」

零「取り合えず離れてくれないか?」

芳香「…:…ごめん。もうちよつとこのまま」

零「なんだ、お前。俺の理性をぶち切ろうとしてるのか?」

芳香「いや、腰が抜けて離れられない」

零「どんだけ怖いんだよ!?!」

芳香「お願い…」

俺は永琳が居るんだ。絶対、一線を越えぬぞ!!

ちよつと期待している画面前の君!!そういうのないからな!!

…すまん。こう言うメタイことを言う作品じゃあなかつたな。

零「分かった分かった。取り合えず寝よう」

それにしても…さっきの虫、初めて見たな…一応、外に逃がしたが、新種の虫だったか？

いや、きつと隋にだけ生息する虫なんだろうな。

?? 「ふむ…零という人間が厄介だな。彼女が欲しいなあ…芳香ちゃん」

男は深く椅子に座り、グラスに入った血を飲む。

?? 「彼を始末したあと、彼女を…大好きな彼女の首を頂こう」

空の雲は輝いて I V 『害虫』

芳香「すう……すう……」

美鈴「んん……」

青蛾「ふわぁ……おは y……なんか増えてるわね」

零「ああ……嬉しい苦行だね……理性をなんとか保っているよ」

青蛾「若い娘が好きなのね!! プンプンツ!!」

零「……お前が抱きついてこなくて良かったよ」

青蛾「酷くないかしら?」

芳香に抱きつかれてそのまま寝たわけだが、何故だか青蛾を挟んで美鈴が向こうで寝ていたはずが俺に抱きついていた。

嬉しいけどさ、理性が爆発しそうだ。

これ、永琳が見てなくて良かったよ。洒落になんねえよな。

カサカサ……

零「ん? またこの虫か。昨日も居たよな」

青蛾「ええ、最近増えてるの。ええつと……蚩かしら?」

零 「まあ、この季節だしさ、仕方ないだろうよ」

青蛾 「そうなのかしらね…いやね、この国の王様が虫の妖怪に呪いをかけられたことは話したわね？」

零 「ああ、話してた」

青蛾 「この蛭。もしかして、虫の妖怪の手下なのかなって…」

蛭は『ブーン…』と、羽を広げ旅たとうとする。

グシャ…

青蛾 「ちよ…ちよつと、どうしたのよ!?!蛭をいきなり潰して…」

零 「こいつ…害虫だな」

青蛾 「え？」

零は、蛭をそこにあつた裁縫用の針で蛭を刺した。

蛭は、苦しみ悶え死んでいったがそんなこと気にも止めず、話を続ける。

零 「明らかに不自然だろう。お前がこの蛭のことを『妖怪の手下』と思つていることを話したら、こいつは羽を広げ何事もなかったかのように飛んでいこうとした」

青蛾 「それだけで…」

零 「んな訳ねえだろ。コイツ自身からは無いが、奥の方から殺意や殺気を感じれる。

お前も仙人だろ？ちよつとぐらいは感じられるだろう？」

そう言われて、青蛾は精神統一する。

本当だ。極僅かだが、感じられる。完全の悪たる殺気が。

青蛾「あ、消えた。死んじやったのね。にしても、よくこんな小さな殺気を…」

零「まあな」

感心した。やはり、腐つても仙人なんだな。どんな小さくても、一応は感じれたらしい。

うゝむ、殺したのはいいが、コイツらが邪魔で動けない。

零「なあ、コイツらのせいで動けないんだ。この虫の処理、お前に頼んでいいか？」

青蛾「えゝゝ虫の処理い？…いいわよ」

いいんだ…

青蛾はガラガラつと戸を開け、外の空気を吸いながら処理を始めた。

零「ふむ…しかし一体どんな妖怪だろうか。一体何が目的なんだ？」

芳香「零…」

零「ツ!？」

芳香「ムニヤムニヤ…」

零「…かわい顔してやがるな。さつきも思ってたんだが、一緒に誰かと寝るこの行

動で、永琳を思い出させてくれる」

芳香、そして美鈴の寝顔を見て、そう思った。

清く輝かしく感じれる、この娘らの顔は、虫の死臭により、よく思えなくなってしまう。この不快感に腹が立った。

空の雲は輝いて V 『死骸』

美鈴「ふんふーん♪」

修行を終え、散歩を兼ねてそこらの妖怪と闘っていたら、なんか分かんないけど楽しくなった。

にしても、さつきから蛍が多い。

蛍の妖怪が近くににいるのかな？

男「お嬢さん」

美鈴「はい？なんでしょう」

そんなことを考えていたら、男が話しかけてきた。

男「おやおや、思いの外美しいですね」

美鈴「ナンパですか？間に合ってますよ」

嘘だけ。

男「大丈夫」

地味に会話が成立しない。

外国人か？

ユーベ「私、『ユーベ』ナイトバグ』と言います。以後お見知りおきを」
美鈴「へえ」

ユーベ「…? 非常識な人ですね。名乗らないのですか」

美鈴「信用してないので」

ユーベ「マナー知らずには罰を与えなければ」

美鈴「……?」

なに言ってるのか?

理解不能。

美鈴「一体何を……ッ!?!」

大量の虫が足から登ってくる。

ゲジゲジ、ムカデ、ゴキブリ、ウジ虫等々…

ユーベ「ン? 虫がお好きですか? これは気が合いそうですね。でも残念です。貴女は
好みじゃありません」

美鈴「虫の妖怪か…王様を呪ったのは貴方ですか?」

ユーベ「正解ですよ」

美鈴「宣戦布告ですか?」

ユーベ「いや、たまたまそこに居たんで襲いました」

「嘘だけど」

ユーベ「おやおや」

美鈴「結構単純ですね。流石、虫なだけありますね」

ユーベ「そりゃあ、虫ですから」

美鈴「宣戦布告……ということは、殺す気ですか？」

ユーベ「物分かりが良いようで」

美鈴「そりゃあ、虫じゃあないですから」

ユーベ「虫に動じなかったのが、仇になりましたね」

美鈴「……？」

動けるし、思考もできる。

何が仇になった？

何も感じないのに、何をいつて……ン？

『何も感じない？』

ズシイイン

力が抜けた。

その場に座り込み、体の痺れを感じる。

どうやら吐いたようだ。気持ち悪い。頭が痛い。訳がわからない。

ユーベ「白眼向いて、涙と鼻水を同時に垂らして、胃酸と中身を吐き散らかして……汚ねえ顔しますね」

何事にも動じぬ心が、仇になった訳か。

意識がかすれてくる。

弟子になったばかりなのに、もうお仕舞いか。

我が生涯は、何も得れぬものだった。

ユーベ「グガエ!？」

不意な、間拔けな声と同時に意識が戻った。

ユーベ「何を……ッ!!」

芳香「友人に何するのさ」

美鈴「よ、芳香さん？」

ユーベ「よ……芳香ちゃんッ!!会いたかったよ!!」

会いたかった?言われた本人も首を傾げる。

芳香「何を言っているの？」

ユーベ「はい!」

虫野郎が芳香さんになにかを見せた。

そしたら、芳香さんはそのまま気絶した。

アイツ…芳香さんに虫を？

ユーベ「これから一緒に過ごそうね。芳香ちゃん」

ユーベは芳香さんを担ぎ、去って行く。

体が動かない。追いかけたいの…

また、意識が…

「……………りん……………いりん……………美鈴ツ!!」

美鈴「零さん……………」

私は……………何を…

美鈴 「そうだツ!! 芳香さんが拐われました!!」

青蛾 「ええ、そのようね」

零 「芳香の場所は『ナビゲーター』で分かる。行こう」

美鈴 「奴は虫の妖怪です! 名は『ユーベIIナイトバグ』! 男です!」

零 「虫……王様に呪いを掛けた妖怪か……」

美鈴 「はい……強かったです」

零さんは眉間にシワがより、なにかを考える。

零 「とりあえず、行くぞ」

美鈴 「はい!」

青蛾 「ええ」

そうして、芳香さんの場所に向かった。

空の雲は輝いて VI 『幼虫』

芳香「……………」

ユーベ「芳香ちゃん、声が出てないよ？何を言っているか分からないじゃあないか」
『いざけるな』そう言いたい。

でもしやべれない。口を動かすだけでなにもしやべれない。

アイツが座っている椅子の隣に、私の体が座っている。私の首はここにある。

つまり、生首だ。呪文により、生きている。痛みはあるのに。血は出てないが、これも呪文だろうか。

私の首は檻の中にある。小さい檻。

ユーベ「フフフフ……可愛いなあ芳香ちゃん。愛してるよ」

貴様に愛されたくなどない。私は……昨日会ったばかりだが……零……………助け
て……………

クツ……ぶつ殺してやる!!こんなやつに……ツ!!

ユーベ「フーツ……怒った顔も可愛いね。でも、芳香ちゃん。虫、嫌いなんでしょう？」

芳香「……………!?!」

美鈴「ど、どうしました？」

零「二ヶ所から芳香の反応がある……？まさかッ!？」

美鈴「……？あ、着きました!!」

ドアを開け、辺りを見渡す。

そこには、椅子に座っている芳香……の体。

檻に入っている、虫に覆われた芳香の首。

そして、男の姿。

ユーベ「なんですか？貴方達は、夫婦円満の時を邪魔し……」

零『熱の細胞』ツ!!」

ユーベ「グッ!？」

零は、その男を見るや否や、『熱の細胞』で殴り抜けたツ!!

男は吹っ飛び、壁にぶち当たる!!

ユーベ「熱っちイイイツ!？」

零「そうかそうか、熱いか。じゃあ冷やしてやるよ。『冷の細胞』」

ユーベ「アアアアアアアアアアアアアアツ!!」

『冷の細胞』で、ユーベの腕を凍らせた。

零「あーあ、これじゃあ凍傷するなあ!!」

ユーベ「グアアアア!?」

零は、ユーベの腕をもぎ取った。

ユーベ「ハア……ハア……」

零「…ツ!？」

ユーベが、零に取られた方とは逆の方の手を向けた。

零は、不審に思い飛び退いた。

ユーベ「いい勘してるじゃあないですか。貴方に呪いを掛けようとしたんですよ」

零「……何故、こういうことをする？ なにか企んでいるのか？」

ユーベ「フ、フフ……少し……下品なんです……人の生首を見ると、性的快感を得れる

んですよ。刺激もしてないのにね」

……は？ それだけの理由でか？ ふざけるなよ。

零「テメーはこの俺が、ぶちのめす」

ユーベ「怖い怖い。『神田零』さん」

零「ツ!?! 何故俺の名前をツ!?!」

名前をわかるのはいい。だが、何故名字まで分かる？

ユーベ「『神田零』……カスみたいな名前ですね。元々の名前がよかつたのに」

零「ツ!!」

ユーベ「この事件を起こしたのは、芳香ちゃんを愛する為と、あんたを殺す為に起こした」

何者なんだ!?!こいつは!?!

ユーベ「さて、始めましょうか。血が飛び交う、ダンスショーを!!」

空の雲は輝いて V I I 『処理』

ユーベ「フフフ……貴方のフルネームと、『元々の名前』を知っている理由を教えてくださいませんか？そんなんでしょう？」

零「フルネームは、まだいい。いや、良くはないが……それより、『元々の名前』ってのはなんだ？俺が何者か分かるのか？だとしたら何故わかる？」

ユーベは落とされた腕を拾って、まるで元は自分の物ではなかったかのように、気持ち悪がつて持ち上げた。

ユーベ「他人のものには興奮するんだけどなあ……うわあ、エグいな……」

零「……」

ユーベ「……で、何故知っているか、ですね。良いでしょう。教えてあげれる所までは教えましょうか……。さて、まず………というか、全部そうなんです、貴方の名前を知ったのは『黄泉』で知りました」

零「なに？つまりお前は……」

ユーベは俺の言いたいことを悟ったように、話した。

ユーベ「はい、死んでいます。そして、一時的に生き返りました。岩が置いてあったつ

て隙間がありますからねえ。僕のような体を虫に変身できる者や物を遠隔操作出来る者は出入りが出来るんですよ。因みに、遠隔操作した岩をそのままにはしません。黄泉の中と外では環境が違いすぎて、私達にも悪影響が及ぶんです」

アイツもか……あの、布都を操った妖怪もか。

そしてこいつ。須佐之男は……分からない。だがアイツも俺のことを捜していたよ
うだった。

零「で？なんで俺のことを知ってる？」

ユーベ「ダメダメダメダメダメ。これ以上は教えられませんねえ」

零「は？」

ユーベ「これ以上話せば『あの人』に殺されてしまうのでね」

『あの人』………いつたい誰なのだ。

黄泉の住人………あまり黄泉には詳しくはない。勿論、行つた記憶もない。有名な者で
言えば……伊邪那美大神とか？いや、接点がない。うむ……やはり分からない。

零「………」

こんなことをしている場合じゃあない。早くこの屑を殺さねばならない。

名前を知っている事に、不思議になり、聞きすぎた。

ユーベ「あゝあ、僕のもげた腕が視界に入るなあ。潰そ」

グシャア……と音をたてながら足で潰した。

そこには血が飛び散り、広範囲に広がっていった。

零『熱の細胞』

ユーベ「おやおや、またそれですか。それ結構熱いんですよ。私のような妖怪じゃあなければ溶けているでしょう」

零「そりゃ結構。狙ってやってるんだよ」

ユーベ「全く……一時的にとは言え、黄泉に帰す気ですか？」

零「いい勘してるじゃあねえか」

ユーベ「良いじゃないですか、かかってきてください」

零「良いだろう……ハアツ!!」

思いきり蹴った。地面を。今までで最速の速さ。

この屑の顔面から骨が見えるほど溶かしてやるッ!!

零「ウオオオオオオオオオオッ!!」

ユーベ「ウグッ!!……」

だが……ユーベは零の腕を掴んだ。

そして、笑いながら……こう言った。

「捕まえた」

笑いながらだ。殴られている途中に笑いながら。

そして、視界が歪んだ。

吐き気がする。

ユーベ「アツチイイイイツ!!」

零「うッ!?!」

ユーベ「ハア……ハア……い、痛いよ……フフ……まあ、いい。これでようやく術にか
けた。次は貴方達ですよ?」

青蛾「……いや、それはないようね」

ユーベ「は?」

美鈴「師匠の攻撃は続いている」

ユーベ「ハッハッハ!!何を言っているんですか!?!零さんはここに倒れ込んで……ハッ
!?!」

居ない。辺りを見ても居ない。

零の姿が見えないのだ。

ユーベ「ど、どこだッ!?!」

青蛾「居るじゃあないの貴方の近くにね」

何かに足を掴まれた。

恐る恐る下を見る。そこにはツ!!ダイヤモンドよりも硬、青い手が、飛び散った血から出ているのだツ!!

ユーベ「なんだこれはツ!？」

零「俺の手だよ」

ユーベ「ツ!？」

そこには、血から出ている零の上半身があつた。

零「さつきお前、腕を潰しただろう?その時、血が飛び散つた。その時思い付いたんだよ。『自分の細胞を分裂させ飛び散つた血の中に潜り込む』ってね」

ユーベ「なんなんだ…貴方はツ!？」

零「俺は、細胞一つ一つが生きているんだ」

ユーベ「クソツ!!」

零「言つとくが、吐き気は俺の細胞達が破壊する。お前の呪いは俺には効かねえよ」

ユーベ「ツ!？」

零「死んで償え。お前は这个世界に必要とされていない」

ユーベ「やめろ…」

零「…ダメだね。『熱の細胞』ツ!!」

ユーベ「グアアアアアアアアアアアアツ!熱イイイイイツ!!」

ユーベ!! ナイトバグがどんどん溶けてゆく。

次第に体から出てきた油に火が付き、全身を火が覆う。

骨が見えてくる。どうやらもう本人は死んだようだ。

俺は手を放し、自分の細胞を集める。

ユーベは、もう動かない。喋らない。

零「……芳香はツ!?!」

芳香を見れば、付いていた虫はもう消えていた。

零「芳香ツ!! しっかりしろツ!!」

返事がない。死んだようだ。

瞳は輝いていない。

零「クソツ!!」

青蛾「……零」

零「身近な人が死ぬのはこれで二度目だ……俺が芳香や屠自古に関わっていないければ死んでいなかった」

青蛾「零。こつちを向きなさい」

そう言われたのでそつちを向いた。

すると……

パアアアアアン……

ピンタをされた。

青蛾「貴方のせいじゃない。全部自分のせいにはしないで。大きい責任を一人で持ち込もうとしないで。貴方がその責任に押し潰されているのを見たくはないわ。私達が居るのよ。重い荷物を皆で持つように、大きい責任は皆で背負いましょう？」

零「……うつ……うつ……うつ……」

初めて泣いた。

その光景に美鈴は驚くような動作をする。

青蛾は、抱き締めた。

この俺を、迷いなく。抱き締めた。

青蛾「安心して。芳香ちゃん私は私が何とかするわ」

そして、俺達はその廃墟を去った。

空の雲は輝いて V I I I 『名前』

出発の日の前日。隋の王から呪いを解いてくれたお礼を頂いたが、旅にこれ程の大金は要らないので九割は神子達に寄付することにした。

そして、やはり美鈴は付いてくるようだ。

零「本当に良いんだよね？」

美鈴「はい!! 師匠に付いていきますよ!!」

零「な、ならいいんだが……」

うん。師匠に忠実な愛弟子ですよ。なんか、俺には勿体無いね。

まだ先の話だが、いつかは師匠離れしないとイケないわけだ。師匠離れしたら、弟子をつくる気で修行を挑んでほしい。

若しくは、誰かを守る存在になってほしい。自分勝手な師匠の願いだがね。

美鈴「そう言えば、あれから青蛾さん見てないですね」

零「そうだな、どこにいるかも分からん。かれこれ二週間位は経ってるし」

そう、青蛾が忽然と姿を消したのだ。いや、『ナビゲーター』をしたら多分分かるんだろうけど、彼女人生は彼女の自由だ。そっとしておくのが正解なんだろう。

まあ、確かに彼女の行方は気になるけどな。

芳香が死んだことを隋の人達に伝えるのは辛かった。

やはり、芳香はみんなから愛されていたらしい。みんな悲しんでいた。泣いている者も居た。

妖怪に怒っていた者も、悔しがっている者も。

美鈴「なんか、師匠に出会ってそんなに経ちませんが、濃い人生です」

零「多分これからも濃いぞ。なんせ、何者かに狙われているからな」

美鈴「そ、そうですか……」

苦笑い。まあ、そうだろうな。

あんな辛い体験はこれっきりが良いだろう。だが、そうもいかないんだよな。

まあ、この星に着いた以上そうなる運命……この星……か……

俺は何者なんだろうか。

そもそも、宇宙に居たんだから永琳に会えるだろうと思っていたが、元々の種族になれなかった。元々何かが分からなかったから……皮肉だ。

人間にならなかつたら永琳に会いに行けるが、人間にならなかつたら永琳に会えなかつた。

残酷過ぎる。それも、苦しいほどに。

美鈴「師匠？」

心配した美鈴が、俺の顔を覗き込む。

零「いや、なんでもない。気にするな。ほら、明日に向けて体を休めよう。お休み」

美鈴「分かりました。お休みなさい」

さて、もうそろそろ出発の時刻になる。

結局、青蛾は現れなかった。

美鈴「ああ〜いよいよ師匠の故郷に行くのですね〜ウキウキします!!」

零「そうかそうか、良い所だからな」

美鈴「青蛾さんは……どうしたのでしょうか」

零「うむ。彼女の人生だ。自由にさせてやってくれ」

美鈴「は、はあ。でも最後まで、顔だけでも見せてくれれば……」

??「最後じゃあないわよ!!」

美鈴「こ、この声は？まさか!!」

俺達は声のした方へと視線を向ける。

そこには、相変わらずの青蛾。そして……

二人「芳香（さん）!?!」

芳香がそこに居た。顔にお札をつけて。

青蛾「待たせたわね!!」

芳香「待たせたあー」

零「待たせたって……どういうことだよ?」

青蛾「キヨンシーです。だから、記憶はないけど……」

美鈴「ええ……?」

青蛾「……なんか反応がおかしいわね?」

おかしいもなにも……

零「いや、気持ちはうれしいよ。ありがとう。でも……何て言うかな……」

うん。気持ちは嬉しい。

俺のことを思っただけかもしれないが……だがな……

芳香「レイ」

零「ツ!?!」

美鈴「えッ!?」

青蛾「えッ!?何で!」

芳香「あるえー?なんでこの人の名前分かるんだろー?でも…なんか安心する!!」

青蛾「この娘には…零の名前は言っていないのに……」

曲がらない腕をブンブン振って、「ちーかーよーれー」とか言ってる。

なんか、俺の名前を言ってくれた瞬間、涙が出そうになった。脆くなつたな。

俺は、芳香の頭を撫でた。気持ち良さそうにしている彼女の笑顔を見て思った。

零「青蛾、ありがとうな」

青蛾「どういたしまして。これからよろしく!!」

美鈴「これから?」

芳香「これからあ?」

青蛾「ええ、零についていくわ。彼女、生前に零の弟子になってみたいとか言ってた

じゃない?だから、ね?」

あの時か。よく覚えていたな。

零「そうだな。一緒に行こう」

青蛾「ヤッタ!!」

芳香「ヤッタア」

零「まあ、その前に体の柔軟性が必要だな」

芳香「だな」

イチイチ繰り返すな、コイツ。可愛い奴め!!

頭を撫でるといい香りがする。お札の効果か？分からんがな。

取り合えず可愛い。後ろで小さくガッツポーズしている青蛾もな。

とは言え、これからの旅は楽しくなりそうだ。美鈴、青蛾、芳香…そして俺。うん、謎過ぎる。

次の旅を楽しみながら、船の出航を待った。

満月は光る

満月は光る

1 『竹取』

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。

野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたりそれを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

あれから幾年の月日が経った。

四人で仲良く旅をして、元々名の知れた旅人だったがもつと有名になった。

俺に関する神話さえ出てしまった。

ソレは兎も角、本当に色々あった。神に喧嘩売ったり、諏訪の地に戻ったり、たまに依頼を受けたり。

そういうや最近、都に美しい姫様が居るとか、いないとか。なんとも、貴族のアプローチを無理難題を押し付けて無視すると言う、中々肝の座った者のようだ。名は何だっけな：そうだ、確か『かぐや姫』だ。

まあ、野次馬の俺はやっぱり見に行くよな。四人も賛成だしね。

とは言え、現実は甘くない。案の定、会えないようだ。

青蛾「あくあ、やっぱりダメね：」

零「そうだろうよ。今大注目するぐらい美人の姫らしいし」

美鈴「じゃあ仕方ありませんね。食料を調達して旅を続けましょう」

二人「「え？：なんで？」」

美鈴「え？いや、だつて会えないんじやあ仕方が……まさか……」

零「屋敷に忍び込むぜ？」

美鈴「うわ、やっぱりですか」

芳香「なにするんだー？」

零「不法侵入」

芳香「そっかー」

美鈴「ハア……もう慣れましたよ……分かりました、今日の夜です……」

零「お、美鈴もやつと分かつてきたな。そうでなくちやあな」

「やれやれ」と、諦めた声のトーン的美鈴。俺との旅でようやく俺の性格が分かつてきたか。

さて、夜まで時間でも潰そうかな。うゝむ、今日は晴れか。このまま晴れば月が見れるかもな。あ、でも今日は新月かな？ じゃあ無理か。

そして、予想通り、星が見えるのにも関わらず月の姿は無かった。

美鈴「本当に行くんですか？」

零「当たり前さ。もう入り口は目の前だぜ？」

美鈴「はあ……」

零「いいか、芳香。声を出すなよ？」

芳香は喋らず首を縦に振っている。よし、大丈夫だな。

さて、『ナビゲーター』で確認した見張りは……正面に二人、池に三人、かぐやの部屋の前には……十二人!? 幾らなんでも多くねえか？

過保護と言うか……何かあるのか？

と言うか、かぐや姫の霊力……なにか懐かしい……なんだろうか。まさか……いや、

そんなはずは……

まあ、いい。さて、まずどう入るかだ。塀を越えて入るか……そうしよう。比較的かぐや姫の部屋に近い所から潜入しよう。

零「よし、此方だ」

三人を引き連れて、そこまで来た。

近くには池がある。この見張りの三人はどうしようか。池だから……これだ。

俺は地面に手をつける。湿っている。

零『水威矢』

水の弓矢を作った。

今から、怪奇現象を起こす。

俺は見張りの目の前に水威矢を射った。

ビシヤツ

見張り「うわ、濡れちゃった。んだ？誰か落つこちたか？」

と、手を差し伸べたが触れたのは……

見張り「ン？池はどこだ？」

見張り2「なにやっつてんだよ」

見張り「いや、誰か池に落ちたはずなんだが……」

見張り3「俺ら三人だけで見張っていたら？て言うか、そつちに池はねえよ。お前の

真後ろじゃあねえか？寝ぼけてんのか？」

見張り「そんなはずは……ン？ほら、誰かに手を掴まれたぜ？見えねえな……ちよいと灯をくれないか？」

見張り3「ホラよ」

見張り「おお、ありがとさん。さあ、さつさと引き上げ……ッ!!」

掴んでいたのは、地面から出てきた手であつたのだッ!!

水威矢を『遠隔操作』で手の形に変えたただけだがな。

見張り「ヒイ!？」

見張り2「ぼ、化けもんだ!!」

見張り3「に、逃げろオ!!」

すたこらさつさと逃げる見張り。

その内に侵入。

零「付いてこい」

みんな、屈みながら進むが芳香は関節が曲がらないのでほぼ意味はないだろう。

兎も角、部屋の前までついた。

この大量の見張りは……この木の枝に『熱の細胞』をつけて、また『遠隔操作』で浮かせる。

そして完成!!なんちやって火の玉。

見張りども「う、うわああああ!?」

とか言っでどっかに行く。

結構アツサリだな。等と思っていると、部屋の戸が開いた。そこにいたのは……

女性「誰かいるの？」

美しい、きれいな女性がいた。

満月は光る 11 『美貌』

まず、人目見た印象を話そう。

『美しい』。その言葉で良いだろう？もっと詳しくと言われても困る。

そうだな、強いて言うなら永琳と一位二位を争う程だ。流石、同じ……まあいい。質問されてる。なら、答えなくっちゃあなあ。

零「やあ、お姫様」

??「誰なの？今は警備が嚴重なはずよ？」

零「あれがか？量が多いだけで、嚴重でもなんでもない」

??「…そうね」

ふむ、結構無愛想。と言うより、警戒かな？

青蛾「うわあ…本当にきれいね!!」

美鈴「噂通りだ…」

零「うむ、同感だ」

と言う感じに、マジにきれいなわけだ。恐ろしい程。

??「あなたも求婚者？新しいわね。嫁を連れてくる人なんて。しかも夜中に」

そんなやつ居ねえだろ。と、心の中で突っ込みつつ、俺は返事をした。

零「いや、生憎俺達は結婚している訳じゃないし、求婚しに来た訳でもない。何故来たか…分かるよな？」

??「……ふん。そうと思ったわ。やっぱりあなたは月び…「ただ興味だけで見に来た野次馬旅人だ」……へ？」

フフン。引つ掛かった。ちよいと悪戯をしてやろう。

零「それより『やっぱり』ってなんだ？え？何か思い当たる節でも？」

??「ググ……べ、別に、なにもないけど？」

零「へえ、それより何か言いかけたよね？『月び』…何？」

??「うぐツ!!……焚き火と間違えたのよ!!『た』を『つ』と間違えたのよ!!」

零「仮にそうだとして、なんで今、焚き火なん？ン？」

??「ウガーー!!うるさいうるさい!!『月人』よ!!これでいい!!」

ハツハツハ!!もう終わりか!!……さて、本題に戻ろう。この切り替えの早さは異常だな。

零「よろしい。ならば、『八意永琳』を知っているか？」

??「ツ!!やっぱりあなたツ!!」

と、またまた警戒。なんだなんだ？トラウマかなんかか？

零「おいおい、月人が月人に『八意永琳を知っているか?』なんて聞かねえだろ?」

??「ン…それも…そうね…」

零「だろお?」

??「でも、何故永琳を知っているの?」

聞くと思っただぜベイバー。オラの来うまいべえ?略して米^{ベイバー}べえ。

零「それは…話が長くなるが…取り合えず、名前を言っておこう。俺は神田零。

宜しく」

??「え!?ちょっと待って嘘でしょ!」

ン?反応がおかしいぞ。普通の自己紹介は「へえ、そんな名前なんだ。確かに美貌さ

零ね」と返してくるはずなのだが…どう言うこつちや?

零「なんで初対面のお前に嘘をつかなきゃならねえの?」

??「神田零って…妖怪から皆を助け、核兵器で自分ごと妖怪を殺して、更に永琳の恋

人の『月の英雄』の神田零!」

零「合ってるけど、月の英雄?なんだそりや?」

月の英雄?英雄になった覚えはないし、そもそも月に行った覚えはない。

青蛾「貴方、どんな人生歩んでいるのよ…」

と、ジト目の青蛾。

美鈴「す、すげー…」

話を素直に信じる可愛い弟子。

芳香「……ン？話聞いてなかったー」

それはそれで悲しいぜ芳香。

輝夜「わ、私は『蓬莱山輝夜』よ!!月の英雄……神田零様!!」

零「止めてその呼び方。怖いよ」

いきなりの変わりよう。さつきまでの警戒心は一体何処のゴミ箱に捨てた?そう

思っていたら、こんな言葉が飛び込んできた。

輝夜「一緒に!!連れ出してください!!」

てね。流石にこの俺もビックリなんで、たった一文字でこの感情を表現できる不思議な文字を発するとしよう。

零「は?」

記号を入れたら二文字だった。

満月は光る 111 『英雄』

零「連れ出せって言われてもなあ…」

輝夜「お願いします!!」

零「取り合えず、その敬語やめてくれ」

輝夜「あ、うん…」

色々、分かんないぞ?

彼女は、さつきまで姫つばいしやべり方だったのに、いきなり敬語を使うという変化。連れ出せつてのはなにかから連れ出せば良いのか。

この二点だけハッキリさせよう。

零「連れ出せつてのは、なにかから連れ出せば良い?」

輝夜「私は、不老不死の薬を飲んだの」

美鈴「不老不死イ!?!」

不老不死…老いることも死ぬこともない訳か。薬となると、永琳が作ったわけか。

輝夜「薬は『八意思兼神』やごころおもいかねしんが創ったわ」

零「八意思兼神?」

輝夜「あ、永琳のことよ」

零「あいつ、神になったのか」

輝夜「ええ、知恵を司る神にね」

ふむ、あいつにピッタリの神だ。

知恵ね…今でも研究はしてるだろうから、もうあいつの方が上だな。前までは教えたりしていたが、たぶん会ったら逆に教えられる側になるだろうな。

零「で、その薬を飲んだからなんだってんだ？」

輝夜「重罪なのよ」

零「へえ、薬を飲んだだけで？」

輝夜「ええ。創るのもダメよ」

零「永琳は何故創ったんだ」

輝夜「そ、それは……今度にして。今はダメ」

零「…そうか」

今はダメか…。

どのような理由なのか。気になることではあるが、急ぐこともない。だって、今度教えてくれるんだから。

零「重罪か。それで、地上に逃げてきた？」

輝夜「いや、それが罰」

零「ン？どういう事だ？」

輝夜「地上で暮らすことが罰なの。月では、地上は穢れた世界っていう認識をしているのよ」

零「確かに、いつかを境に穢れていたが……」

輝夜「昔、貴方が妖怪を核爆弾で大量に殺したでしょう？」

零「……そうか。そう言うことか。その時に散った妖怪の血液と核の放射物により、この世界は穢れた」

輝夜「そうよ」

穢れ。月にはそれが無いから、永琳達がまだ生きているのか。

てつきり、薬を創って長生きしているのかと思っていた。

……俺は？俺は何故生きている？今まで不老と言っていたが、別に老いない薬を飲んだわけでもないのに、何故穢れたこの地で生きている？寿命は？脳に100%負担がかかれば速くて一日で死ぬんじゃないか？

原因は、俺が元々何だったのか。それが分かれば、それも分かる。

何者なんだ？俺は……一体……今、本当に俺は人間なのか？

……考えても仕方がない。

零「……その罰も終わりが近いから、月人が迎えに来る。それから連れ出せと言っているんだな？」

輝夜「ええ、そう言うことよ。この星が好きになったから……でも、もう男に言い寄られるのはコリゴリ……静かに暮らしたいの」

なるほど……。よし、分かった。

零「良いぜ？月人は俺が何とかしよう。きっと顔見知りも居るだろうよ」

輝夜「ありがとうツ!!」

青蛾「本当に、お人好しよねえ」

零「んにゃ、そんなことねえよ」

青蛾「どこをどう見たら違うのよ」

零「さあ？知らねえな」

さてさて、次の質問としよう。

立っているのがそろそろ苦痛なので、その場に座った。

零「さてと……話が変わるが、なんで俺がそんなに有名なんだ？」

輝夜「だって、素敵じゃない？恋人と仕事仲間、そして暮らしていた人々を救うべく、自らの命が危険にさらされても戦うなんて」

零「……………」

美鈴「照れてます?」

零「な、んだと!?!そんなわけないだろうが!!」

青蛾「露骨ね」

輝夜「まあ、まさか生きてるとは思ってたわ」

苦笑いしながら言う。

ここで1つ、疑問が生まれた。

零「何故、俺が神田零と信じた?」

輝夜「どう言うこと?」

零「そのままの意味だ。もしかしたら、嘘をついているかもしれないじゃないか」

輝夜「まあ、そうね」

アツサリ肯定した。

零「じゃあ何故?」

輝夜「そうね……力かしら。貴方の言霊の力と言うか」

零「どういう?」

輝夜「貴方は無意識でしょうけど、言霊に霊力や神力がこもってる。普通の人間は神力は持っていないし、そもそも言霊に霊力をこもらせるのは困難。出来るようになって、一言一言に膨大な霊力を吹き込まなきゃならない。なのに、貴方はそれを意識もせ

ずに、まるで呼吸や瞬きのように平然とやるの。そんなことをできるのは月人の上級の人達ぐらいしか出来ないのよ。そこに神力も入っているから、もう『月読命』つくよみのみこと様ぐらいしか出来ないのよ」

零「へえ…今まで気が付かなかった」

美鈴「だから、師匠が言ったことを信じちやうんですね」

零「ふーん、そう。わかった。迎えはいつ、来るんだ？」

輝夜「次の満月の時よ」

零「もうすぐじゃねえか」

今夜は新月だ。それから満月の時まで……十五日ぐらいか？

零「そうか……迎えが来る丁度、俺はお前を連れ出す」

輝夜「なんで？」

青蛾「今じゃダメなの？」

零「輝夜が、月に帰ったと言うことにして逃げる」

青蛾「ああ、なるほど」

我ながら良い考えだ。

零「それで良いか？」

輝夜「うん。良いわ」

零「んじや、決定だな」

それまで、都で観光だな。楽しみろ。

輝夜「あなた達がいつでももここに入れるように言っておくわ」

零「おう、分かった。じやあな!!」

そういつて、塀を越えていつた。

その内、見張りが戻つてきた。何をしてたの？とと言うと、何も答えなかつたので心中で笑つてやつた。

満月は光る I V 『藤原』

青蛾「この和菓子、美味しいわねえ」

美鈴「そうですね!!」

俺達は、都で観光をしている。

ほんの千年位でよくここまで築き上げたよな。俺の放った核爆弾で一回滅んだからな。

美味しいもんはあるし、風情ある建物もある。最高かよ。

零「はは、食い急ぐな。喉を詰まらせたら大変だからな」

美鈴「はい……うぐツ!」

零「言わんこつちやない……」

と、まあ……

……よくある光景だ。

こういう一時を生きることには幸せを感じる。普通が一番だな。

美鈴「ゴホツゴホツ……す、すいません……」

零「気を付けろよ?と言うか今思ったが、マナー的にどうなのさ」

美鈴「スミマセン……」

零「青蛾を見てみる。大人しく食ってるぞ？」

美鈴「うう……」

青蛾（喉が詰まりかけたなんて言えない）

芳香は相変わらず、蝶々と戯れている。

まあ……いいんだけどさ……

そんなことを思っていると、一人少女が話しかけてきた。安い着物を着た少女。

女性「ねえ」

零「んあ？なんだ？すまないが道案内は出来ないぞ？俺、旅人だから」

女性「知ってる」

零「そうか。じゃあ何用かな」

女性「貴方、神田零でしょ？」

やはり、有名なのだろうか。

まあ、どうでもいいが。

零「そうだが？」

女性「依頼とか、受けたりしてるんでしょ？」

零「依頼か、どうした？妖怪退治？」

美鈴「え？ 依頼ですか？」

実は、俺の収入元はこれだ。

旅をする為にはお金が必要。そう言うわけで、依頼を受けている。

女性「依頼の内容は『かぐや姫を殺してほしい』つてももの」

美鈴「え？ 何を……」

零「理由は？」

女性「父に恥をかかせたから」

察するに、この娘は貴族の娘だろう。

あの、輝夜に無理難題を押し付けられて、諦めさせられた貴族の中の一人だろう。

零「どうやって、恥をかかせられた？」

女性「かぐや姫に無理難題を求められた。父の難題は『蓬萊の玉の枝』だった。そんな難題は無理だから職人に造らせたの。持って行ってこれで嫁にできると思ったときに、職人が押し掛けてきた。父は大きな恥を負った」

なんとも間抜けな話だ。

零「それは、輝夜は悪くないな」

女性「悪いッ!!あの女が無理難題を求めなければッ!!欲にまみれた要求をしたからッ!!父は恥を負ったんだッ!!」

零「フーツ……なあ、君」

女性はこちらを睨み、歯をガチガチさせている。

女性「なんだッ!!」

零「俺と結婚しよう」

女性「え？」

美鈴「は!？」

青蛾「はあ!？」

芳香「ン？」

皆、予想通りの反応をした。勿論、芳香も。

女性の顔がだんだん赤くなってきた。

女性「え、あ、いや、…は!？」

零「落ち着け」

前言撤回。予想以上の反応だった。

零「まあ、そう言うことだ」

美鈴「どどどどどどどういことですかッ!？」

青蛾「そそそそそそそうよッ!!ちゃんと説明してッ!？」

芳香「皆、顔赤いぞー。タコみたーい」

激しく同意をしておこう。

零「好きでもない男に結婚してくれなんて言われたら、断るだろう？」

女性「ま、まあ……」

零「だから、無理難題を押し付けた。結婚しない為にな」

女性「……普通に断れば良かったじゃあないか」

零「貴族は無駄にプライドが高いからなく。絶対諦めない訳さ」

女性「……」

女性も納得してくれたらしい。

零「よって、依頼は承れない。納得した？」

女性「……うん」

零「一応……名前を聞いておこう」

妹紅「……『藤原妹紅』」

藤原……結構有名じゃあないか。

アイツ、結構勇気があるもんだな。

零「さて、さつきから気になっていることを聞いていいかな？」

妹紅「答えられるものなら」

零「貴族のあんたがこんな町中を歩いて、一体どうしたんだ？まさか、俺に依頼をす

る為とかじやあないよな？一人で、そんな格好をしてさ」

妹紅は、無言のまま後ろを振り返り、去っていった。

彼女の言う、答えられない質問だったようだ。

零「ま、と言つても、今の話の限りじやあ藤原の奴も悪い訳じやあないな。どつちも悪くない」

美鈴「にしても、驚きましたよ？いきなり、結婚してくれなんて」

青蛾「私なんて言われたことなんて一度もないのに」

零「お前には絶対言わない」

また、よく見る光景に戻った。

我ながら切り替えが早いと思う。そして、安定の芳香は蝶々と戯れていた。

満月は光る V 『開華』

少し湿り気を持つ風に苦しませられながら、ある場所に向かう。

花畑を見に来た。なにか、妖怪が持つ花畑らしい。この季節は向日葵があると聞く。

美鈴「楽しみですね!!」

芳香「そうだねー」

青蛾「どこに行くか分かっていないのに肯定する。今日も、いつも通りの芳香ちゃんね」

零「それダメだろ」

暑い。太陽がサンサンと俺達を照らしながら温めている。温めすぎている。

恨めしく太陽を睨もうと思ったが、生憎眩しいのでそれすらできない。

そんな、下らないことを考える内に着いた。花畑。

美鈴「綺麗……」

零「そうだな」

美鈴はその花を見て、感動したのだろうか。

辺り一面向日葵に埋め尽くされている。どうやら、相当長い年月を生きている妖怪な

のだろう。長く生きないと、ここまで多くの花を一人では管理できない。多分、大妖怪だろう。

女性「あら、どなたですか？ここに来るなんて」

零「ああ、ここの花畑を管理していると言う妖怪さんですか。綺麗ですねえ。観光できたんですよ」

女性「あらあら、ご苦勞様ですね」

零「いえいえ、ここの花を見たら疲れなんか吹き飛びますよ」

女性「フフフフ」

零「ハハハハ」

ガシイイツ!!

次の瞬間、女性は殴りかかってきた。

零はガード。

美鈴「え、ええ!?!何処に喧嘩する場面があつたんですか!?!」

二人「ないよ(わ)」

美鈴「ええ……」

幽香「私の名前は『風見幽香』。ヨロシクね」

ヨロシクされたくないのだが、今はどうでもいい。

零 『神田零』だ」

幽香 「フフフ…暦の上では夏ではないのに、もう夏の暑さになっている。花は太陽に左右されるの。人間や妖怪もね」

零 「知ってる」

幽香 「じゃあなぜ来た？焼き払う気か？」

噂では聞いていた、恐ろしい妖怪だと。

「どうやら、彼女は人間にいいイメージを持っていないらしい。一度何かされたのだから。」

幽香 「貴方の首をはねて、都にさらしてやるッ!!」

零 「……」

幽香 「死になさい!!」

零 「フツ…」

零は、殴りかかってくる幽香を押し、その反動でそっぽ向いて歩く。

幽香は訳がわからなく、零の歩みを止める。

幽香 「な、何やってるの!?!私を殺しに来たんじゃ…」

零 「なんで殺さなきゃなんねえの？」

幽香 「え?…え?…」

零「俺らは、ただただ花を見に来ただけなんだ」

幽香「……」

零「どうしても戦いたいのなら…『亜空間の原子』ッ!!」

瞬間ッ!!その場にいる零以外のものの真下に、亜空間が開く。

零「俺の連れと戦うんだな」

零の顔はもう見えなくなった。

幽香「うッ!!」

美鈴「イテテテ…:…なんで私たち何でしょう」

青蛾「知らないわよ」

幽香「…:…もういいわ、全員殺してやる」

まずは、あのずつと手をのぼしている。弱そうな奴を殺そう。

幽香は一瞬で移動し、芳香を殴るッ!!

芳香「なにやっているんだー?」

ビクともしない。変形さえしない。

何者だ?彼女らに恐怖を抱き始める。

青蛾「言つとくけど、そこら辺の妖怪とは違うわよ」

美鈴「あの人の弟子なんです。負けるわけにはいきませんのでね」

芳香「しぬのはあなたかも」

芳香は、幽香の両腕を掴んで地面に叩きつけたッ!!

いつもニコニコしている彼女は、戦闘中では生前の彼女その者だった。

満月は光る VI 『花畑』

私としたことが……こんな、頭が弱そうな娘に恐怖するなんて。

だが、この娘が人間じゃあないのは確かだ。なにせ、六割の攻撃を受け止めたのだ。

他の二人もか？一人は妖力を感じる。一人は……何だ？感じたことのない……なにかを……

攻撃をするために一気に近付くツ!!

芳香「ちーかよーるなー!!」

幽香「断るわ」

芳香「フツ!!」

幽香のパンチと芳香のただただその位置に置いただけの握り拳が交わった。

間接をずっと伸ばして居るはずなのに……いったいどういうことだ？

私はパンチを繰り広げる準備をしていたのに、アツチはしていない。なのに……こんなに強いのは何故だ!?

いや、私ほどの力はない。だが、あり得ない力を持っている。だって、何がなんでも間接を曲げないのだ。なめてる。

ハンデのつもりか？

幽香 「間接曲げたらどうよ」

芳香 「むりー」

何がなんでも曲げない気かッ!!

だんだんイラついてきた。

幽香 「ウウオオオオラアア!!」

心臓のある場所に拳……動いてない？

妖怪でも動いているはず。

さつきからチラチラと見える赤髪の女が鬱陶しい。

幽香 「貴女ツ!!何者よツ!？」

芳香 「芳香」

幽香 「名前じゃあない」

芳香 「えと……忘れたあ」

笑顔で、バカのような発言。

完全になめてる。

すると、後ろから気配。

青蛾 「私達をツ!!」

美鈴「忘れないで下さいッ!!」

幽香「チッ」

私は咄嗟に下へ逃げた。その状態で足を崩そうと足で蹴ろうとするが、案の定跳んで避けた。

そんなことを最初から知ってた私は彼女等の間で足を止め、能力を発動する。

幽香「食らいなさい。私の植物の力をッ!!」

私は、自分の足から茨を出し、青髪の女と赤髪の女を攻撃する。

間接を曲げない娘は足をつかんで転ばす。

芳香「うぬわぁー」

コケた。なんか、普通にコケた。

それはともかく、正反対の髪の色を持つ彼女等を縛り上げる。

幽香「案外楽だったわね。一度に全員を戦闘不能の状態にしたのだから」

青蛾「いや、それはないわ」

幽香「…?」

美鈴「私たちにだって能力はありますし」

芳香「終わらない。戦いは終わらない。何故なら、敗けてないから」

幽香「貴女はそうかもね。だって、間接を曲げればすぐ立てるもの。もう曲げたらいい

いんじやあないかしら？それともなに？悔しい？」

芳香「まがらないのー」

何を言っているんだ？

曲がらない？

幽香「本当なの？」

芳香「うん」

幽香「ええ…」

芳香「ハッ!!」

芳香は地面を噛み、勢いで倒立する。頭で体を支えている。

で、そのまま倒れる。そしたら、伸ばしていた手が地面に付き、またまた勢いで、そして腕の力で立った。

その間の秒数、三秒。

幽香「本当に何者よ」

青蛾「よつと、やつと動けるわ」

幽香「えッ!？」

そこには、茨で縛った筈の青髪と赤髪が居た。

奥を見れば、枯れた茨と枯れていない茨が在った。

青蛾「私の能力はね、零は知らないけど『壁をすり抜けられる程度の能力』なのよ。壁じゃあないけどすり抜けられたわ」

美鈴「そんな能力だったんですか。私は『気を使う程度の能力』です。だから、私の中の気を使って茨を枯らしました」

私の……植物を枯らした？

殺意。生まれた物は殺意だ。

殺してやる。

幽香「貴女を殺すわ」

美鈴「え、私単体!？」

幽香は日傘を向けて、宣言をした。

青蛾「うくん……ガンバ★」

美鈴「うおおおいッ!？」

幽香は、日傘からレーザー出した、ドでかいレーザーを。

美鈴「フーツ……ハアッ!!」

美鈴は殴った、レーザーを。

跳ね返るはずがない。食い止められるはずもない。

奇行を行った美鈴は、何をしている？

そう、思っていた。だが……

跳ね返したのだ、レーザーを。

美鈴「気を拳に集中させ、跳ね返しました」

幽香「……………チツ」

私は殺す気で戦っているのに……………コイツらはツ!!

美鈴「あ、惜しい」

青蛾「貴女……………わざと私の方に跳ね返したわよね」

美鈴「偶然です」

幽香「ちゃんと戦って」

美鈴「ちゃんと戦ってます。私は戦闘に誇りを持っている人でして」

どこがだ、戦っていない。

美鈴「いいえ、戦ってます。それじゃあ、おさらいをしましょう」

幽香「は？」

いきなりなにを言っているんだ？

美鈴「私の能力は『気を使う程度の能力』です。それにより、レーザーを跳ね返すこ

とが出来るのです」

幽香「一体何を」

美鈴「一番最初に攻撃された芳香さんに興味を持ち、一切私達に見向きもしなかった」
こいつは何を口走っている？

美鈴「今思えば、不思議じゃありません？芳香さんと戦っている間にもっと早く三人で攻撃をできたはず」

確かに、不思議には思っていた。

美鈴「なのに私は、周りをグルグルまわっているだけ」

チラチラとは見えていた。

幽香「それがなんだったの」

美鈴「もし、周りをまわっている時に『空間にレーザーを跳ね返す気だけを留めていたら』」

幽香「…?」

美鈴「そして、私が跳ね返したレーザーは青蛾さんに当てる為ではない」

幽香「まさかッ!？」

美鈴「もう遅い」

振り返ると……回避不能な所に私のレーザーが在った。

そして、飲み込まれる。

つまりだ美鈴が、留めておいた気のお陰で、この時代には無いがビリヤードのように

レーザーが移動していたのだ。ビリヤードって言う表現の方が、君も理解しやすいだろう？

まあ、いい。そう言うわけで、風見幽香を倒すことが出来たのだよ、美鈴は。

幽香「ウツ!!」

零「よく頑張ったな。美鈴」

美鈴「え、えへへ……そうですかねえ」

頭を撫でられ、美鈴はにやける。

それを見ている青蛾は羨ましそうに見る。

零「すまん、弟子達の実力を見たかったんだ。許してくれ」

幽香「許さないわ」

零「……そうか」

幽香「だって、私の茨を枯らしたのも。許さない」

美鈴「え？確かに枯らしましたが……元に戻しましたよ？」

幽香「……？」

顔をあげてみれば、綺麗な色をした茨しがなく、枯れた茨は見つからなかった。

幽香「ど、どう言うこと？」

美鈴「気を使ったんですよ。気は、大きく分けると二種類に分けられます。『再生』と

『破壊』です」

幽香「『再生』と……『破壊』？」

美鈴「まず、茨を『破壊』させ、そのあとに『再生』をしました」

零「まあ、結局枯らしたことは事実だしな。謝るよ、すまなかつた」

美鈴「い、いや!! 師匠が謝らないで下さいよ!! あ、あの本当に申し訳ありませんでした!!」

幽香「……………フフ」

美鈴「え？」

幽香「なんでもないわ。早く、ここから出してはくれないかしら？」

零「いいぜ。ほいッ!!」

久しぶりの外の空気を吸うかのように、深呼吸をする幽香。

幽香「ンー!! いい空気!! あの空間吐き気がするのよ」

零「む、すまん」

幽香「いいわよ、もう。なんか、いいわ」

零「なんだよ」

幽香「知らない」

この年一番内容がない会話をした気がした。

ともあれ、やっと終わった。見ればもう夜になりかけていた。

幽香「もう、今日は泊まりなさい」

零「良いのか？」

幽香「ええ、いいわよ。さあ、家はこっち。来なさい」

幽香の言う通りにすることになった。

月が、満ちかけてきた。もうそろそろだな。

満月は光る VII 『満月』

時は来た。月は満ち、夜は闇。見えるのは幾つもの行灯からの火。

風はなく、辺りには弓矢を持った兵士や輝夜の部屋を護る兵士が居る。

輝夜は渡さんと。

輝夜の養父である讚岐造さぬきのみやぢと、同じく養母の嫗おうなは固い表情を浮かべていた。

造「必ず返り討ちじや。月になど行かせん」

嫗「良いかい？ここから出るんじゃない」

輝夜「……はい」

造と嫗は、にっこり笑うとそこから出ていった。

輝夜「来るかなあ……零と、永琳」

輝夜は一人で座っていた。

すると……

兵士「来たぞツ!!」

という声が聞こえた。

私は体を縮め、泣きそうになって顔を隠すように埋めた。

場所変わり、屋敷の庭。

兵士「射てエエエツ!!」

兵士の言葉を切つ掛けに、雨のような矢が上向きに射たれる。だが、それは効かない。

月の兎により兵士たちは次々と倒れていく。

女性「良いぞレイセン。もつとやるんだ」

レイセン「……はい」

赤い瞳の兎により、ほとんどの兵士が幻覚を見ていたり、気絶をしている。

造「おい、お前ら!! 起きろ!! 目を覚ませ!!」

そして、後ろの戸が開いた。

開けたのは輝夜だ。

嫗「かぐや!? 部屋から出てはなりません!!」

輝夜「体が勝手に動くんです……」

輝夜は、迎えに来た月読命のところまで行った。

永琳は後ろにいる。

月読「これでわかったろう、汝の罪の重さを。穢れというのは辛いだろう?」

輝夜「……いいえ」

月読「なに？」

予想をしない答え。

そして、許されない理由を言い放った。

輝夜「地上よりもっと穢れているあなたの心が有る限り、ここは楽しい」

月読「なんだとツ?!? 我を侮辱しようというのかツ?!」

怒り、顔を真っ赤にしている。

しかし、なにかを思い出したかのように落ち着く。

月読「まあ、いい。帰ったら人体実験をするつもりだ。お前を使ってな」

輝夜「それが穢れた心だと言っているのです」

月読「チツ」

月読は、腹立たせて輝夜を睨んでいた。

反して、輝夜は目を閉じ、そこに正座し、なにか余裕を持っていた。

造「輝夜を返せ!!」

月読「返せ? 逆だろう。返してもらうのはこっちだ。よし、見えた。今までずっと

送っていた宝石や宝が欲しいからそう言っているのだろう? 分かった分かった。これ

からも送ろう」

造は、なにも言わなくなった。

姫 「輝夜を……お願いします。私の娘なのです……」

月読 「娘……フフ……貴女のじゃあないですよ。血が繋がってないのになにを言っているのです？」

姫 「血は繋がってない。そうです。ですが、それでも家族です」

輝夜 「お母様……」

母はいつも優しくかった。

だが、それももう終わる。

月読 「フツ、くだらない。さあ、行こう。永琳よ。……永琳？」

永琳は……そこに立ったまま、なにもしない。

不思議に思った次の瞬間ツ!!

兎 「うぐツ!!」

一匹の兎が苦しんだ。

それを最初に、ある程度雑魚の者はどんどん苦しむ。

何故雑魚だけか？ 弓矢が飛んできたからだ。強いものは回避した。

月読 「なんだこれは……？」

百も居た兎は、一羽しかいない。

レイセンと呼ばれた者。

?? 「やあ、輝夜。この前に会ったきりだったな」

数人を引き連れやって来た男。

月読 「お、お前は……神田零か」

永琳 「え……」

その名を聞いたまわりの者たちは驚いた。

なにせ、死んだと思われた人物がノコノコと弓矢を挨拶がわりに射ってきたのだから。

月読 「噂は本当だったとは……神田零よ。私と来ないか？君は良い戦力になる」

零 「断るよ。なにせ、この地より穢れた心のあるたに従うのは、地獄の他ない」

月読 「なんだと？」

零 「もしかして、輝夜がさつき言い放った言葉は挑発だと思ったのか？違う、本心さ」

明らかに顔を赤くして、睨む月読命。

月読 「永琳……やれ」

永琳 「……」

永琳は持っていた弓矢を、敵に向けた。

そして、射った。敵に射ったのだ。

月読 「何を……している？」

永琳「私は、敵に矢を射っただけです」

月読は、永琳が射った矢を空中で掴んでいる。

永琳は……恋人を選んだ。

零「久しぶり、永琳」

永琳「久しぶり……零」

永琳は涙を浮かべていた。

だが、月読は空気は読まず、剣を出した。

月読「貴様ツ!!私を裏切って、生きていられると思うなよツ!!」

永琳「五月蠅い」

月読「なツ!?ぐふツ!」

いきなりだ、背中から腹部にかけて痛みを感じる。

青い、手形のなにかがあった。

零「生きるよ。なんとしてもな。愛した者と一緒に生きる」

月読「ふ……ぎげ……なよ……」

永琳「いいえ、ふざけてなどおりません。貴方が邪魔だから、貴方を殺します」

月読はその場に倒れる。

圧倒的の強さを誇っていた月読が、呆気なく負けた。

女性「月読様ツ!!」

零「大丈夫さ、神は信仰が有る限り死なない」

零は亜空間を開け、永琳と輝夜を連れ、移動しようとする。

女性「待て」

二人の女性が、零を止めた。

零「なんだ？」

女性「私達と勝負をしなさい」

零「……」

永琳「依姫、もういいわよ。貴女に教えることはなにもないわ」

依姫と呼ばれた女性は、剣を持ち、戦いを挑んできた。

零「皆、先に行つてくれ」

美鈴「ですが師匠……」

零「久しぶりに動きたい。月読が呆気無き過ぎてつまらなかつた」

永琳「フフ……後で、今までの話を聞かせてね」

零「いいぜ、じゃあまた後でだ」

そう言い、亜空間を閉じた。

依姫「我が名は『綿月依姫』ツ!!」

豊姫「我が名は『綿月豊姫』」

レイセン「え、あ、『レイセン』です!!」

零「神田零。名前は神田零だ」

そう言い、構えた。

満月は光る
VIII 『夢月』

戦闘を申し込まれた俺。まあ、久々の戦闘で少し興奮気味。

零「にしても、月の民の科学は着々と進化しているようだな」

豊姫「はい、神田様が居なかったらまだここまでは進んでいなかったはずですよ」

零「神田様は……止めてくれないか？」

豊姫「え、ですが……」

零「どうせ会うことも少ない。敬語は要らん」

豊姫と依姫は、少し考えてから顔をこちらに向けた。

豊姫「断ります」

依姫「同じく」

零「ふむ、それは？」

依姫「私達は、あなたに憧れて部隊に入ったのです」

豊姫「目指す人物に無礼があってはなりません」

零「フウーツ……やれやれ」

考え方を少し変えろ。彼女達はまだまだ未熟だ。

俺は彼女達を強く見つめ、話を続ける。

零「俺は、月読を倒して、永琳を拐って、堂々と悪人役になった俺を憧れているのか？」

二人「はい」

レイセン「……………」

兎の彼女が正解だろう。仲間を大量に倒されたされたからな。

零「じゃあ、目指されている者として、アドバイスをやろう」

二人は、顔をパアッと輝かせた。

依姫「はいッ!!」

豊姫「はいッ!!」

零「元気がいいな…君はどうする」

レイセン「え……………あ、はい」

少し目的とズレたが、アドバイスも兼ねての戦闘だったら良いだろう。

零「取り合えず、来い。攻撃をしろ。お前達の実力を見る」

三人はそれぞれ違う構え方をする。

最初に攻撃は、依姫だ……………よな? 刀を地面に突き刺した。

零「……………」

依姫「『祇園様の力』」

刹那、俺の周囲には無数の刀が刃をこちらに向けている。

零「なるほど。下手には動けん」

依姫「よし……」

零「だがしかし……」

零は動いた。

依姫「う、動いてはなりません!!」

無数の刃がこちらを刺そうとしてくる。

零は、瞬間で右手の硬く青いモノを全身に纏った。

依姫「ツ!?!」

刃を弾いたのだ。

零「まあ、地上の人達からすりや人溜まりもない。だが、硬化系の妖怪等だったら効かない」

依姫「……」

目を大きく開かせて、驚かせている。

零「考えろ、どう倒すかをな」

依姫「柔らかい部分を刺す」

零「そうだ。たぶん共通して柔らかいのは目だ」

依姫「目、ですか」

零「目には水分がたくさんある。柔らかいはずだ」

全身の青いモノを、一瞬で消した。

零「相手の弱点を狙え。と言つてもどうすりゃいいか分からないだろう。だったら、

『弱者に共通するモノを探せ』」

依姫は礼をして、その場から退いた。

豊姫「お願いします」

お辞儀。それから、静かに扇子を広げ、こちらへ向ける。

依姫「お姉様!」

豊姫「私は、信じているからこそ、やるのです。『消えたら』それまでの人だった」

零「……?」

なにをやる気か? 考えていると、瞬間的に移動をして、俺に扇子の風をあびせた。

豊姫「……残念です」

依姫「……」

神田零が、その場から消えた。否、消されたのだ。

豊姫「この扇子は森を素粒子レベルに浄化させることもできる。貴方を浄化させまし

た」

失望感。それしかないだろう。

失望感と言うのは残酷なもので、人のモラル及びモラルの華を削ぎ落とす。

なんという残酷。なんという無慈悲。

だがもし、華を削ぎ落としたフリをしていて、それを本人達が知ったら、華はさつきよりももつと成長するだろう。

零「つまり、こういうことだ」

豊姫「……参りました」

何があつたか？ 順を追つて説明しよう。

まず、扇子を広げて、依姫が豊姫を止めにかかった。この時点で、扇子に注意を払う。そもそも広げた時点で風は起こる。空気中の水蒸気がHとO水素に分解及び浄化したのを感じた。その時点で、もう俺の勝ち。そして、彼女達の華を成長させる機会になる。

何故、俺が消えたか？ 水蒸気を纏つたのだ。

水蒸気を纏い、光の反射で消えたように見せた。ただそれだけさ。

そして、彼女の首元に青い右手を向けている。

豊姫「そういうことでしたか」

零「そう。君は扇子の扱いを注意した方がいい。とは言え、空気中の水蒸気が浄化す

るのを感じれるのなんて、俺以外居ないがな」

二人はなかなか強い。

最後にレイセンだ。

レイセン「……」

零「ほう……」

いきなりの攻撃だ。

彼女の紅い瞳により、辺りの気が狂い始めている。

つまり、幻覚。

零「……クツ」

酷い目眩。酷い吐き気。酷い怠さ。

全てが俺を襲う。この感覚は、ユーベ・ナイトバグの能力に似てた。

豊姫「レ、レイセンツ!! 止めなさい!! 私達にまで……」

レイセン「……仲間の仇だ」

やはりか。

レイセンは、俺に人差し指を向ける。そして……

零「うぐツ!?!」

何かを撃ってきた。

それは、俺の心臓を貫いていた。

なんだ？もしかしたら、俺の弱点なのかもしれない。この、吐き気をする感覚は。トラウマのような、何か俺を襲う。

お前を許さない 必ずだ

なんだ？この、見たことのない光景は？

頭痛が酷い。寒い。意識の朦朧とした中、女性が見えた。それは、豊姫でも依姫もでレイセンでもなく、ましてや、知った顔ではない。だが、どこかで見た顔。

ああ、ウジ虫が体に張り付いているかのような感覚だ。

なにか、女性は喋っている。

生憎、読唇術はない。ただ、何となく言っていることは分かる。

俺は……

人間じゃあないと言われている

いつの間にか吐き気もなく、頭痛もなく、心臓には穴も空いていない。レイセンが狂気の瞳から恐怖の瞳へと変わっていた。

俺に対する恐怖だろう。

零「……フフフ」

豊姫「神田……様？」

思わず笑ってしまう。

何かも分らない女性から人間じゃないと言われたのだ。

薄々は気付いていた。脳を100%使う？馬鹿馬鹿しい。そんなわけないだろう？

俺は誰だ？俺は誰だ？おれはだれだ？オレハダレダ？俺波誰打？俺ハ誰ダ？

おれ スペース エンター は エンター だれ スペース エンター だ エン

ター はてな スペース スペース エンター

俺は誰だ？

o r e h a d a r e d a ?

エラー エラー エラー

零「俺は誰だ？」

レイセン「え…」

零「…すまん。取り乱した」

所詮、記憶。あれ？記憶？

いや、記憶。

レイセン「私の敗けです。やっぱり御強いですね」

豊姫「神田様が怒るのも無理ないわ。反省しなさい。幾ら仲間の仇とはいえ」

零「いや、俺も悪かった。無慈悲に君の仲間を攻撃してしまって」

何をやっていたのだろう？いつの間にか勝っていた。

記憶が飛んでいる。

零「まあ、死んではないがな」

レイセン「え!？」

零「気絶させただけさ。時期に目も覚める」

レイセン「なんだあ…なら最初からいつてくくださいよお」

零「うむ、すまないな」

とはいえ、無事に終わった。

久しぶりの戦い。実によかった。

しかし、あの女性は一体何だったのだろうか。俺は、亜空間を空け、永琳の元へと向かった。

満月は光る IX 『月見』

既に、もう都の外に居た。

夜風は強くなく、弱々しい。月明かりに照らされた八意永琳は、俺を見つめて嬉しそうな表情で、目から溢す。

永琳「久し振りね……本当に」

零「ああ、久しぶりだな」

泣いている彼女に対し、俺は微笑む。

同時に近付き、彼女を思いつき抱き締めた。強く……もつと強く……

永琳「……ごめんなさい……ごめんなさい……」

零「何で謝つてんのさ？君はなにも悪くない」

多分、別れた時の事を言っているのだろう。彼女は悪くない。何も悪くない。

俺だって、何か方法はあつたはず。なのに、あんな自ら死を覚悟して行うような方法を選んだ。俺こそ、悪い。

零「永琳……会えて良かった。君に会えて……嬉しかったことしかない。なのに今まで、悲しい思いをさせてしまった」

永琳「ち、違う。確かに、悲しかったけど……でも、私達を守ってくれた」

ああ、こんな俺を思ってくれていたのに、どうして悲しませてしまったのだろうか。

胸が痛い。苦しみを感じる。だが同時に、長年味わえなかつた温かみを感じる。香りを感じる。肌の触れ合いを感じる。

永琳「零……」

彼女は目を瞑り、唇をこちらに向けている。

薄紅色に潤つたその唇を、向けている。

零「今はダメだ」

永琳「え……」

零「あいつらがいる」

木の影に指を差す。

永琳「良いわよ。なんなら、見せつけましょ!!」

零「……フフ、変わらないな。そうだな……こんなに祝うべき日に、人目を気にしちやあなにもできなく味気ない」

永琳は再び目を閉じた。

美しい顔立ちに、俺は惚れる。いや、昔から惚れている。

俺は、そのまま唇と唇を重ねた。

熱く、熱く重ねた唇は、懐かしい。

零「追っ手が来ててもいいように、隠れるように住んだ方がいい」

永琳「貴方は？一緒に暮らしましょう？」

零「……ある程度一緒にいることはできる。だが何故か追われているんだ。俺も」

永琳「そ、そんな……」

零「安心しろ。定期的に帰ってくる」

『ナビゲーター』で人が入りにくい、そして見つかりにくい場所を探す。

あつた。竹林だ。広範囲の竹林、所有者はいない。

零「おい、お前ら。こっちこい」

美鈴「き、気付いてたんですか」

青蛾「その上で見せてたの……」

輝夜「永琳があんなに笑ったの久しぶりに見た」

芳香「いいな」

ン？芳香のいいなはどういうことだ？

芳香「お花の蜜の味が分かってて」

蝶々の話かい!?

マイペースだよなあ…。

永琳「羨ましいでしょ」

青蛾「全くよ!!」

零「落ち着け。取り合えず…俺に掴まれ」

美鈴「あーなるほど、ハイハイ」

美鈴、青蛾、芳香は直ぐに俺に掴まった。

対して、二人はポカンとしてる。

美鈴「え、どうしたんですか？」

輝夜「何してるの？」

美鈴「ああ、そうだった。取り合えず、掴まっておいってください」

二人は不思議に思いながら俺を掴んだ。

永琳め、胸を当てやがって……いや、青蛾は対抗しなくていいから。

零「絶体離すなよ。『瞬間移動』」

刹那、視界が揺らいだ。

零「よし、着いた」

輝夜「え、ええ!?!」

零「五月蠅い」

そこは、もう竹林だった。

何本もの竹が並び、美しい。

零「『創造』」

瞬間、家が建った。

輝夜「すごい…」

零「だろ」

俺達はそのまま家に入った。

そして…

零「月が輝いている」

永琳「ええ、そうね」

美鈴と輝夜。青蛾と芳香。俺と永琳がペアで寝る。

部屋の数には余裕があるので大丈夫。

永琳「その…今日ってどうする？」

零「え？どうするって？」

永琳「その、久しぶりにあつた訳じゃない？だから…」

零「ああ、なるほど」

永琳は顔を赤くしている。可愛い。

零「今日は熱くなりそうだ」

永琳「……」

零「なあ、永琳」

永琳「どうしたの？」

やつと会えた。

やつと会えたんだ。愛するものに。

俺は、嬉しい気持ちも込め、言葉を発する。

零「月が綺麗だな」

玉の緒の刀

玉の緒の刀 1 『天狗』

小鳥の声が聞こえる。木々の声も聞こえる。

それに相反して遠くから聞こえる、さざめいた笑い声達。

人がいるのか？いや、ここは山奥。妖怪だろうか？

俺達は今、山にいる。旅には迷うことが多い。いや、『ナビゲーター』を使えばいい。そうかもしれないが、こう迷うと強き者共と出会うことが多い。

だから、声のする方へと進む。

美鈴「近くですね」

零「うむ、約一里と見たぞ」

後ろの青蛾は苦い顔をしているが、関係なしに進む。休憩はない。あるのは、睡眠だけだ。

天狗「待て、その旅人」

零「何だ？」

天狗「ここは通してはやれん。引き返せ」

しかめっ面な烏天狗。さっき嫌なことでもあったのか？

それとも、元々の顔か？

零「もう、日も傾いてきている。泊まらせてはくれないだろうか」

天狗「……待っている」

その烏天狗は、指笛をならし烏を呼ぶ。

その鳥になにかを呟いて、放した。飛んだ方向は声のする方。

天狗「確認をしている。暫し待っておれ」

青蛾「休憩!?足を休めて良いの!？」

零「ああ、良いぞ」

青蛾「ヤツタアア!!」

手を上に広げ、最高の笑顔で叫ぶ。

不覚にも可愛いと思った。

時は経ち、先程の鳥が戻ってきた。

その鳥は手紙を口に加えていた。その手紙を天狗が読み、暫くすると俺たちの方を見た。

表情は相変わらずのしかめっ面。

天狗「入れ。許可を得た。この紙を持っている許可証の代わりだ」

零「礼を言う」

天狗「その代わり、鞍馬様に会いに行け。貴様に話があるらしい」

零「俺にか？その鞍馬つて奴がか」

天狗「鞍馬様は、貴様らが来るのを予知していたらしい」

零「予知だと？」

何やら面白そうじゃあないか。

天狗も中々強い。美鈴の練習相手になるかもしれない。

零「ふむ、分かった。行こう」

そして、門は大きく開く。

天狗「鞍馬様、例の旅人が」

鞍馬「入れ」

襖が開く。すると見えたのは、妖力の豊富な天狗、幼くあどけない少女の烏天狗、殺気を放つ青年……こいつは人間か？

鞍馬「よう来たのう。ワシヤ鞍馬と言う。まあ、とりあえず座れ」

零「俺になにか用があるのか？」

鞍馬「……」

俺は立ったまま、彼に話しかける。

鞍馬「お主、神田零じやろ？」

零「何故知っている？ 門番が言うに、予知をしていたそうだな」

鞍馬「カツカツカ、後に話す。ほれ座れや、失礼じやろう？」

漸く座り、話を聞く。

鞍馬「気付いてはいるじやろうが、この『牛若丸』は人間じや」

零「ああ、知っている」

美鈴「え、そうなんですか!？」

鞍馬「カツカツカ、嬢ちゃん妖怪じやろう？ 人間の区別はできんと、後先大変でえ」

美鈴「いえ、彼の殺気が人間独特の気を掻き消しているので……」

そう、強い殺気。常人じやあ、気絶するだろう。

美鈴「え、じゃあ彼女は……」

文「『射命丸文』。烏天狗です……」

鞍馬「コラ、もつと愛想よくせんか」

文「……」

零「……君、相当強いな」

文「ツ!!」

あ、笑った。

それに気付いたのか、顔を片手で隠す。

鞍馬「お主の言う通り、射命丸は中々強い。力じゃあ負けんが、速さはワシ以上じゃ」
零「フフ、顔が子の自慢をする親のようだ」

鞍馬「ン、すまぬ」

零「それで、本題に入ろう」

鞍馬「うむ、そうじゃな」

気になる点は幾つかある。

零「まず、俺は何故ここへ呼ばれたのか」

鞍馬「そうじゃな。お主には頼みたいことがある」

零「それはなんだ？」

鞍馬「ワシの……『ワシのフリ』をしてくれぬか!!」

零「……あんたの『フリ』？」

鞍馬「そうじゃ。ワシらの山は、見ての通り天狗が仕切っておる。じゃが、先日到大

江山から手紙が届いてのう」

零「大江山？」

大江山。鬼の住まう山だ。

詰まり、鬼から天狗に手紙が届いたと言うことか。

鞍馬「その内容は、領土の引き渡し交渉じゃった。二週間後に来るそうじゃ」

零「……」

鞍馬「ワシでも、鬼には勝てのじゃ。じゃがお主。お主は、神をも倒す旅人じゃろう？ 情けないのは分かかっておるが、どうか聞いてはくれんか？」

零「いいぜ」

美鈴「即決ッ!？」

零「楽しそうだ。鬼となんて会ったことすらねえ」

この、楽しみが込み上げてくる感じは好きだ。

さて、次の質問と移るか。とは言え、後この質問しか無いのだが。

零「どうやって、俺らがここへ来ると分かっていた？」

鞍馬「うむ……」

一番の気になる点だ。

『予知』……もし、能力ならそれで終わりだが、違うのなら……何故？

鞍馬「ワシは……その手紙を貰った日……夢を見た」

零「……？」

鞍馬「暗く、薄気味悪い場所にポツンと……老妖怪のワシが立っていた」

零「おい、なんの話だ？」

鞍馬「寿命かと思ったわい。じゃが、どこか違う。頭を整理している時に、いきなり記憶が入り込んできたのじゃ。否、お主の顔が、頭の中に出てきたのじゃ」

零「……」

鞍馬「……この顔は見たことがある。確か、生きる伝説と言われた男『神田零』じゃ。そう、理解した。じゃが不思議じゃった。何故、お主の顔が出てきたのか」

零「……暗く……薄気味悪い……？」

鞍馬「すると後ろから、女の声がしたんじゃ。『神田零は貴方を救いにやって来る』とな」

零「おい、それもしかしてツ!？」

いきなり、立った。

零「……その夢、目の前に大きな岩があったか？」

鞍馬「なんじゃとツ!?!やはり、偶然ではなかつたかツ!!ああ、有ったぞ」

零「なんてことだ……」

あの女は一体誰なんだ。

付きまとうな。去れ。そう言つてやりたいが、なにか……言えない。躊躇つてしま
う。

鞍馬「……引き受けてくれたこと、感謝いたす」

零「…堅苦しい爺さんだ」

鞍馬「お主は気楽すぎるジジイじやろうて」

二人は笑う。よく見ると、そこに盃があつた。

今は、気分がいい。

鞍馬「呑もう、零よ。これは、仲間の印じや」

零「そうだな」

互いに互いの酒を酌み、腕を組み合いながら酒を飲む。

飲み干す。

鞍馬が小声で喋る。俺にしか届かない声。

鞍馬「あの射命丸。お前に憧れて、強くなつた。んで、お主の前で照れておる。良く
してくれ」

零「分かつた」

射命丸は未だに片手で顔を隠していた。

玉の緒の刀　ⅠⅠ　『風神』

朝の稽古だろうか。山を駆け巡る、威勢の良い声達。

その中に、射命丸文は居た。

文「ハッ!!セイツ!!」

天狗「一本ッ!!」

文は、連勝。ここ数十年負け知らず。

文「フウーツ…」

汗を拭い、水分を補給する。

この稽古は本来、大中天狗が行う稽古。

周りには大人ばかり。一人ポツンと立っている少女であるために、どこにいるかわかりやすい。

文「アツツウウイ……」

零「重心が少し左に片寄っているぞ」

文「あっそう。気を付けるわ」

・・・ン?

顔を見上げる。見えたのは、きれいな顔立ちをした旅人『神田零』が居た。彼は、私の憧れである。

文「うわあああああああああッ!?!」

零「そんなに驚くか普通」

ケラケラと笑ってこちらを見ている!!

こちらに向けて笑っている!!

憧れの人がッ!!私にッ!!笑っているッ!?夢でも見ているんじゃないやあ…

零「とりあえず落ち着け」

文「わ、わわ、分かりましたアア!?!」

零「分かっけないじゃん。面白いなあこの娘」

お母さんお父さん、生まれてこの方初めてこんな喜びを味わいました。

あああ、手が震える…

文「あああ、あのオオ…アド、アドバイスを…の、続きを…」

零「そんなんでアドバイスなんか聴いてられないだろう?まずは目を瞑れ」

文「ひゃい!!」

零「……………」

私は目を閉じた。

見えるのは闇。だがそれは、瞼の皮を貫通してきた光によって、少しだけ明るい。零「よし、じゃあまず深呼吸だ。吸って……吐いて……吸って……吐いて……」

文「スウーーツ…ハアーア…」

零「そうそう。何事も落ち着かなきゃ、良い判断はできないぜ」

文「はい…」

しよぼーんとしている。

憧れの人の前で見事なテンパリを見せたのから当たり前ですけど……

文「あの、重心が左に寄っているっていうのは…?」

零「うむ、癖なのかな? 左に重心が寄っている所為で、左に回避することが多い」

文「なるほど…」

零「聞くけど、後ろから名前を呼ばれたらどっちから振り向く?」

文「……左かも、しれません」

零「やっぱり?」

それから、専門的な質問の連続。

零「片足で何回か跳んでみてくれ」

文「こうでしようか?」

零「そうそう……ふむふむ。君、走るときは地面を蹴ることを意識した方がいい」

文「え？どうしてそんなことが分かるんですか？」

零「跳んだとき、地面に着けていない足を折って跳んでたよな」

文「そう言えば……そうですね」

零「そういう人は蹴るイメージを持つんだ。ついでに言うと、前に足が出る人は、足を上げるイメージを持つんだ」

文「ふむ……」

とか、

零「ちよいと椅子に座ってみ」

文「は、はい……」

零「ん、じゃあ、手を前に出してみ」

文「え、あ、はい」

零「人差し指、出して」

文「はい」

零「よし、俺は指を掴むから、それを頼りに立ってみて」

文「分かりました」

零「よし、じゃあまた座って」

など、色々自身の体の構造を知り……

次の対戦。

文「うわ、強い奴だ」

零「まあ、頑張れ。さっきのやつだが、意識し過ぎると逆に動けないぞ。俺は審判でもしている」

文「はい!!」

威勢良く返事をし、進む。

天狗「おうおう、今日こそ叩き潰してやるぜッ!!」

文「かかってこいッ!!」

相手の先制攻撃。素早く力強いパンチを放つ相手。

それを紙一重で回避。回避した方向は、右だ。

腕を掴み、そのまま投げる。

天狗「うおっと、あぶねえあぶねえ」

天狗もなかなかやる。

投げられて、真つ逆さまになったが、勢いを利用して前方倒立前転をして一本を回避。

文「流石ね…」

天狗「だろろう? さあ、行くぜ!!」

天狗の右足の回し蹴り。それを後ろに回避。

だが、追撃で左足の蹴り。

文「フツ!!」

素早くしゃがんだ。それを予測していた天狗は、またも蹴りの勢いで姿勢を低くして文に蹴りを与えようとする。彼は蹴りが得意なのか？毎回毎回力を加えている。

文はしゃがんだ状態にも関わらずジャンプし、バク転。

天狗「なツ!?!」

文は地面に足を着けた瞬間ツ!!思いつき蹴ったツ!!

文「うおおおおおツ!!」

跳び箱のように天狗を飛び越えると同時に、胴体を持ち上げて地面に叩きつけたツ!!

その姿は周りの人や零、そして文自身が感動していた。

零「一本ツ!!」

皆「うおおおおおツ!!」

文「え、えへへ……」

零「見事だったぞ、文。圧勝だ」

文「ありがとうございます!!」

なんとなく、文の頭に手を乗せ、撫でた。

文「んあツ!?!」

零「ああ、すまん。つい」

文「あ、あややややあ…」

顔を真っ赤にして道場を出ていった。

よく考えるとセクハラだと気付き、自重することにした。

玉の緒の刀 111 『偽装』

文「良いですか？いかにも鞍馬様っぽくしてくださいね」

零「おう」

遂に鬼の来る日が来た。

周りの天狗達は緊張と恐怖の空気を漂わせている。

本物の鞍馬は俺の側近として、身を隠している。

争い事になっても、全面戦争は避けねばならない。一対一、俺と鬼のてっぺんと。

牛若丸「……零様」

零「なんだ？」

牛若丸「もし負けたら殺すからな」

零「……フツツ、分かった分かった。そんな心配するな。負けはしない」

牛若丸は俺に殺気を放ちつつ、そこに座る。

零「殺気は消せ。バレるぞ」

牛若丸「……」

殺気が消えた。

その強い殺気が消えたことで、更に細かい殺気を感じることができた。遠くに居るから細かいが……多分大きい。鬼の殺気か？

次第にどんどん大きくなっていく。近付いてくる。

零「……………」

楽しみで仕方がない。

その殺気は、すぐそこまで来た。多分三人、建物の前に居る。

零「入れ」

女鬼「お邪魔するわよ」

零「宜しく。鬼さん」

勇儀「私は『星熊勇儀』さ」

零「ワシは鞍馬、ここのでっぺんをやらせてもらっている」

勇儀「フウン……………」

物凄い気を感じる。

後ろの美鈴や青蛾は辛そうな表情をしているだろう。

芳香は……………知らん。

勇儀「んで、このちっこいのが『伊吹萃香』だ」

萃香「誰がちっこいだッ!!」

勇儀「そして、この薄紅の髪をしたのが『茨木華扇』だ」

華扇「宜しく願います」

零「ああ、宜しく。まあ、座れや」

その命令に従い、鬼三人は座った。

勇儀「いやあ、すまないね。本当は鬼全員で来る予定だったのに、鬼の四天王だけで行けって言われてね」

零「鬼の四天王……」

萃香「そ、鬼の四天王。天狗なら聞いたことぐらいはあるでしょ？」

き、聞いたことがねえ……

零「もう一人は？」

萃香「風邪」

零「え？風邪で休みか？」

萃香「風邪を移しちゃいけないからって、来るのをやめたらしい」

なんか、イメージと違う。

なんか、鬼つてもつとこう……オラオラ系だと思ってた。

なのに意外にも礼儀正しく……って、それは失礼か。

勇儀「にしても、天狗以外にも何か居るねえ」

零「……」

勇儀「他の妖怪、死人、仙人……そして、人間。天狗には誇りが無いのかい？」

牛若丸「ツ!？」

勇儀「人間と妖怪は敵対する生き物。なのに、鞍馬。あんたはその人間を育ててる。全く、笑い話にも出来やしないねえ」

牛若丸が拳を握っている。強く。血が出るほどに。

華扇「勇儀さん、もう挑発はよしましょう」

勇儀「思ったことを言っているだけさ。頭がおかしいとしか思えない。もしその育てた人間に殺されたら……自業自得だよ」

牛若丸はもう、我慢が出来なかった。

牛若丸「私が鞍馬様にそんなことをするわけがないツ!!」

勇儀「ハハハ、本当かねえ? そんなに怒っているのも演技かもしれないな?」

牛若丸「貴様アアアアツ!!」

牛若丸は刀を引き、鬼達に切りつけるツ!!

勇儀「……フツ」

牛若丸「クツ離せ!!」

零「……」

だがそれは、零に腕を掴まれて、終わった。

牛若丸「離せといっているだろうツ!!」

零「やめろ」

牛若丸「ツ!?!」

牛若丸は恐怖した。この男に。

あの目付き。あの力。あの殺気。全てが自分の比じゃない。

まるで天敵に見つかった動物のように、牛若丸はその場で腰を抜かした。

勇儀「やっぱり教育は出来てないようだね。妖怪じゃあ人間を教育することなど出来ないのさ」

零「……………」

零はゆっくり勇儀に近付いて行く。

勇儀「なんだい？詫びの品でも出すのかい？鬼の機嫌を損なわない為に？だとしたら、あの青年の方がもつともつと強い心を持つているね」

零「……………」

そして、勇儀の前に立つ。

勇儀「ほら、早く座りな。人間なんか庇う鞍馬天狗さん」

零「…………嘘は嫌いか？」

勇儀 「は？何を言って……………ッ!？」

次の瞬間ッ!! 勇儀の顔は地面にめり込んでいたッ!!

それは零が殴ったからだッ!! 誰にも見えぬスピードッ!! 誰にも真似できないパワーツ!!

その拳で勇儀を殴ったッ!!

勇儀 「グアハッ!？」

萃香 「勇儀!？」

華扇 「勇儀さん!？」

零 「もし嘘が嫌いなら、謝っとくよ。俺は鞍馬天狗じゃあねえ」

鞍馬 「お、お主」

勇儀 「な……………んだと?」

零は勇儀の胸ぐらを掴み、押し出した。

勇儀は倒れそうになったが、後ろの鬼二人が支えた。

零 「表に出ろ。『治癒の細胞』で傷は治した」

勇儀 「なに?」

確かに、もう痛みはない。

零 「三人とも来いよ。鞍馬の侮辱を償わせてもらおう」

牛若丸「……………」

牛若丸は見た。彼の後ろ姿を。

牛若丸は見た。彼の正義を。

牛若丸は見た。彼の……………

生き様をツ!!

玉の緒の刀 I V 『必殺』

零「まずは誰からだ？それとも全員同時に掛かってくるか？」

勇儀「コケにしやがって…ッ!!」

萃香「私が行くよ」

勇儀「分かった」

一人の鬼が前に出てきた。伊吹萃香という鬼。人からは『酒吞童子』と恐れられている。

だが、そんなものでもいい。

鞍馬の侮辱を取り消させる。それしか考えていない。人間だって素晴らしいものだし、妖怪も素晴らしいもの。確かに、妖怪は人間に悪さをして、人間は自身を護るために妖怪を退治する。その繰り返しが続いているが、絶対に人間と妖怪が共に生存できる世界があるはずなのだ。できるはずなのだ。なのに、殆どの奴等は無意識に匙を投じている。「どうせ無理だ」と。

それが許せない。

萃香「いくよッ!!」

零「……」

先制は萃香。高速のスピードで拳を突き出す。

だが甘い。次の予測を余りしていない。それは考え方によっては良いことだが、普通はダメだ。

こつちが予想を簡単にできてしまうからだ。

次は右のアップーだ。

萃香「ウオラッ!!」

やはりだ。

俺は彼女の手を掴み、一瞬で大きく捻る。

……おや? おかしい。普通は骨が折れる筈なのだが、折れた振動が伝わって来ない。

答えは、彼女の能力にあった。

萃香「怖いねえ。私にこの能力がなかったら骨がバッキバキだったよ」

零「なるほど……」

彼女の腕の間接から手前が霧状になっていたのだ。

どんどんと、霧状になっていく。そして……

彼女の姿はなくなった。

部屋に霧が籠っている。

萃香「そういうことよ。あんたは私に攻撃できない」

霧は一ヶ所に集まって行き、萃香の形を型どつてゆく。

萃香「なにせ霧状になるから」

零「……………」

霧状になるか……

零「だから？」

萃香「え？」

零「だからどうしたっての」

萃香「え、いや、だから……………」

口ごもる。

鬼つてもっと堂々としている印象があった。それとも、俺がおかしな事を言ったからだろうか？どちらにせよ、困った姿は普通に女の子に見える。角がなかったらな。

萃香「ええい!!もうどうでもいい!!」

零「あ、諦めた」

萃香「ウヌオラアアツ!!」

零「うツ!!」

馬鹿力だ。ガードしていても響く。

なら俺もツ!!

零「オウヤアアアツ!!」

案の定、霧になった。

萃香「絶対に勝つてやる」

零「無理だよ」

萃香「え？」

深呼吸。それで、後ろに倒れる。

地面に着いた瞬間、消える。

見え方によつては、地面にめり込んでつたようにも見える。

萃香「え!？」

勇儀「なにツ!？」

華扇「そ、そんな……!？」

鞍馬「なんじやと!？」

文「んなツ!？」

牛若丸「……!？」

皆、同じ反応をしている。

それもそうだ。急に消えたのだから。

だが、実際は消えていない。逆に、目の前にいるのだ。

萃香「うっ?! 何だッ?! 勝手に霧が集まってくッ……何かに押し込まれてるッ?!」

零「俺だよ」

萃香「ッ!?!」

零「あんたの能力、借りたぜ。俺の細胞を空气中に舞わせた」

「霧が一ヶ所にどンドン集まっていくな。どンドン形を作っていき、二人の男女の形になつた。」

萃香が零に押し倒されていた。

萃香「んぐッ!!……ハア……動けない。これはもう、負けたね。完敗だよ」

零「よし。ほら、立てるか」

萃香「ん、立てる。ありがと」

零は萃香に手を伸べて、立てるかどうかの確認をした。

萃香は少し驚いたが、その手を借りて起き上がった。

零「次は誰だ?」

華扇「私です」

零「……」

茨木華扇。『茨木童子』と恐れられている……筈だが……なんか、こいつは鬼っぽく無

い。

敬語で話してくる。いや、俺の単なる鬼への偏見だったのかもしれない。気を付けなければ。

……ン？そう言えば、包帯でグルグル腕を巻いている。怪我か？だとしたら、風邪の奴よりも休んだ方が良かったんじゃないや……ま、いいか。

華扇「いきますッ!!」

零「おう。かかってこいや」

少し楽しくなってきた。

先制は、またしても相手。

華扇「ハアアアッ!!」

地面を蹴り、猛スピードで接近。

パンチを繰り出すだろう。そう思い、ガードをする準備をしたが……

華扇「フッ!!」

通り過ぎたッ!? どういうことだ？ そう思い目を追わせようとするが……

零「居ない……」

居なかったのだ、どこにも。

まさか……そう思いつつ、殺気を感じた。

華扇「ハッ!!」

零「……やはりか」

後ろからの攻撃。直ぐ様避け、彼女が何をしたのか理解した。

零「瞬間移動か……」

華扇「ッ!?!」

零「その様だな」

凶星。そんな驚いた顔をしている。

当てたことに満足をしたが……

零「久しく血を流した」

頭から、少しだけ流れる血。

華扇「フッ!!」

零「またか……」

殺気。今度は横から。と思うとまた瞬間移動。

横から。前から。横から。横から。後ろから。横から。後ろから……

そういう作戦か。

来る……

前から来た。

華扇「ハアアアアツ!!」

零「『瞬間移動』ツ!!」

華扇「なツ!?消えたツ!」

逆にやり返す。その瞬間移動の速さは未恐ろしく、零が二人、三人、四人と、残像が見えてくるのだ。

華扇にもこれは出来ない。

華扇「うツ!!」

一回殴りそのまま続ける。

二回、三回、四回………どんどん回数が増えていき、比例してスピードも増していく。この光景だけを切り取ってみたら、同じ顔の集団が、一人の女性を殴っているように見える。

そして……

零「オラアアアツ!!」

華扇「……ツ!!」

腹に拳を入れる。

容赦はしない。もし、女性だからって腹に拳を当ててそれで終わりとすれば、彼女に失礼だし、女性だからと言う差別になる。俺は差別が嫌いだ。

華扇「……ウグツ!？」

零「……………」

華扇「ま、負けました……」

驚いた。まさか喋れるとは。

少しは気絶すると思っていた。流石鬼だ。

零「よし。最後は……」

勇儀「……………」

零「あんただな」

勇儀は仁王立ちでこちらを睨んでいた。

同時に殺気を放ち威嚇。随分と鬼らしい。

本気で、挑ませていただこう。そう思い、俺は汗を拭った。

玉の緒の刀 V 『仲立』

勇儀「行くわ」

零「おう、来いや」

完璧に楽しんでる俺はそう答えた。

……悪い癖だつてのは俺も理解している。ただ、感情つてのはそう簡単に制御できるもんじゃあない。

勇儀「四天王の二人が誰かに負けるなんて初めてでねえ……本気で行かせてもらおうよ」

零「んじゃ、俺も」

俺は右手から、久しぶりに青い物体を出した。

そろそろこれに名前を付けたいな。そう言えば、名前がない。

そんなどうでも良いことを考えていたら、鬼達はこれに反応した。

萃香「それは……!!」

華扇「まさか……!!」

勇儀「……アンタ、神殺しだね」

零「人聞きの悪い……神は、信仰が有る限り死なないんだよ」

勇儀「ふうん……でも、結局は戦って勝ってきたと」

うーむ……コイツらは何が言いたいのか。よくわからん。

取り合えず、YESの反応を示した。

勇儀「………フフ」

零「……？」

勇儀「ハッハッハッハッ!!」

零「!?!」

いきなり笑い出すと言う謎。

その笑い声に俺らや天狗達は勿論、相手の鬼達も困惑していた。

勇儀「ハッハッハッ!! いやあ、だったら当たり前だわ」

零「は？」

勇儀「そりゃ負けるよ。あー腹痛い」

ひ、開き直りってやつか? まだ戦ってないのに。

勇儀「だけど勝つよ、アンタにね。そんな気持ちで戦わないと失礼だしね」

零「お、おう……」

勇儀「フウ……ハアアッ!!」

降ってくる俺にビックリしたのか、口を開いていた。

そんな勇儀を掴み真下の亜空間に入る。ループだ。

どんどん加速して行く。そして、一瞬で真下の亜空間が閉まり、勇儀を地面に叩き付けた。

勇儀「ガハッ!!」

零「良し」

最後に閉め技。

これで身動きがとれない。

勇儀は観念したのか、俺の背中をポンポンと叩き、ギブアップのサインを出した。

勇儀「あくあ、直ぐに負けちまった」

零「ほら、立てるか?」

勇儀「ン、ありがと」

俺の手を掴み立ち上がる。

勇儀「神は殺して私は殺さないんだね」

零「罪悪感のある殺生は苦手でね」

勇儀「そうかい。………領土の事だね。分かった、諦めるよ」

天狗達「おお!!」

天狗達の喜ぶ声が聞こえた。

中には鞍馬や文の声。

勇儀「鞍馬はいるかい？」

鞍馬「ワシだ」

勇儀「領土は諦める。ただ、友好的にアンタ達と接したい」

鞍馬「うむ、それなら構わない」

文「い、いいんですか!？」

鞍馬「こやつは本気で諦めたようじゃ。コイツらよりは弱いけど、コイツらよりは長く生きている。目で分かるわい」

流石、と言つて良いだろう。

この鞍馬のカリスマ性は尋常じゃあないだろう。根拠がないが、何か説得力がある。

こいつも……言霊つてやつか。言霊は余り感じにくい物だな。

零「んじゃ、記念に呑むか」

勇儀「いいねえ」

鞍馬「みな、今宵は宴じゃ。酒を倉から出せ」

天狗「はい!!」

すると萃香が俺に話し掛けてきた。

萃香「あのさ、私は人間には死んだってことにされているからさ……」

零「ああ、言わないよ」

萃香「そう……ありがと」

その言葉を聞いて、俺は亜空間から酒を取り出した。

玉の緒の刀 VI 『酒呑』

萃香「そう言うわけで、私は死んだように思われている」

零「ハア……悪い人間も居たもんだな。毒入りの酒とか……あり得ん」

宴会の中、二人で呑む。周りの奴等は気分が上がって、バカをやっている。

しかし、その宴会にはあまり馴染みのない妖怪などもいる。河童や……神様等。

零「しかし、何故生き延びれた？毒が入っていたのだろう？対妖怪用の」

萃香「ああ、入ってた。だが、生きている。何故だろうね、この悪運っているのかな」

零「……」

萃香「夢を見たのさ」

零「……!!」

零は、もしや目の前に大きい岩があるあの夢じゃないかと思い、無意識に眉が動いた。しかし、どうやら違うようだ。

萃香「あそこにいる華扇が出てきたのさ。その、夢にね」

零「……ふむ」

萃香「確か……『貴女に教えられたのです。希望の存在を、光に進む価値を、栄光を。』

幾度も貴女はふざけていて迷惑しています。ですが……そんな迷惑な貴女を失いたくない』つてね」

零「良い話じゃあないか」

萃香「……………馬鹿らしくなったよ。ああ、もう死ぬかもなあって思ってたから」

萃香は少し恥ずかしそうに酒を飲んでた。その頬の赤みは月明かりによつてよく見える。

たぶんその事を言ったら、本人は酒のせいだと無理な言い訳を言うだろう。

萃香「私が目を覚めたとき、周りの鬼達が殴り、人間等は刀で斬ってた。刀……それは私の首を斬る為にとってきたものだど理解した」

零「…なるほど」

萃香「鬼にも器用な奴はいてね。いつかそんな日が来るかもしれないつて言つて、偽の首を作つていたらしい」

零「そして、彼らはまんまと騙されたわけか」

萃香「そう言うこと」

なんとも許し難い話だ。少し、人間に対して怒りを感じる。

正式に戦い、勝つなら良いが……酒に毒を盛る。日本の者として恥ずかしくはないのだろうか？

萃香「さあ、私の過去は話したよ。次はアンタの番さ」

零「……分かった。話そう」

今までのことを話した。永琳との出会い、諏訪子達との出会い、青蛾や神子達との出会い、芳香と美鈴との出会い、輝夜との出会いと永琳との再会等々。

その、出会いの物語は次第に皆の興味を引き付けていた。

萃香「そんな作り話みたいなのが……」

美鈴「いいえ、作り話じゃありません」

萃香「分かってるさ、例えだよ。にしても、相当辛い人生だったろう？」

零「まあな、俺のせいで人の死んだことが二回あったからな」

青蛾「貴方のせいじゃ……」

零「俺のせいさ。な、芳香」

芳香「ん〜？分かんないや」

零「そりやそうか」

俺は芳香の頭に手を乗せ、撫でる。

芳香は気持ち良さそうに笑顔になるが、その笑顔によって生前を思い出し、気持ちが苦しくなる。

勇儀「その……なんだ。あんたは長い年月生きているから、友人の存在に対して強い

思いがあるんだな」

零「そう言うことだ。『深く広くの友好関係』を目指している」

勇儀「なるほど」

鞍馬「零よ。お主ならその友好関係は築けられるぞ」

零「ありがとう」

俺は芳香に乗せていた手を、漸く下ろしたのだった。

勇儀「そういや、知ってるかい？軍が妖怪を雇ったって話」

零「知らないなあ」

俺は、あまり重要だとは思わなかったの、そのまま聞き流した。

そして、宴会は再開する

玉の緒の刀 V I I 『再開』

牛若丸「皆さん、お世話になりました」

鞍馬「立派に育ちよって……」

文「死ぬんじやあないわよ」

牛若丸が母親に会うべく、旅をするらしい。ついでに俺達も、そろそろ旅を再開させる。

鞍馬「零よ。お主には感謝してもしきれん」

零「そうか、そういつてくれると嬉しいぜ」

鞍馬「鬼達に領土を渡さず、更にその鬼達との交流もできた。本当に感謝するぞ」

鞍馬に続き、文も。

文「わ、私も、ありがとうございました!!その、そう。アドバイスとか……」

零「どういたしまして、とだけ言っておくよ。そこまで感謝することでもない」

文「いえ、それだけじゃありません!!」

文がものすごい勢いで寄ってきた。

なにか……うん、言いたいのだろう。

文「あ、その…」

零「…？」

文「わ、私!! 貴方が…」

芳香「ガオーー」

零「ん? うおツ!？」

文が何か言いかけたとき、芳香に膝がつくんされた。いきなりは怖いぞ。

零「こんのゝツ!! 許す!!」

芳香「ハツハツハアゝ!!」

文「ハ、ハハハ…」

零「んで、なんだっけ？」

文「いや、なんでもありません…と、兎に角、病氣しないでくださいね!!」

零「おうよ。お前も、元気でな」

そして、頭を撫でてしまった。うツ、セクハラだつて思つてもうやめてたのに…
芳香を撫でるので癬になつちまつた。直そう。

文「エ、エへへ…」

零「…」

意外と喜んでた。

まあ、なら良しとしよう。そう思いながら、手を頭から下ろした。

文「あつ……」

そんな悲しい顔をするなよ……

零「んじや、そろそろ行くとするか。おーい」

芳香「はーい」

美鈴「はい」

青蛾「ハイハイ」

いつもの如く皆が集まり、そのまま出発することにした。

零「じやあな。定期的には戻ってくるよ」

鞍馬「勿論じや。牛若丸……」

牛若丸「はい」

鞍馬「お前は戦闘の天才として、軍の先端を生きることとなるじやろう」

牛若丸「……」

鞍馬「じやがな……」

鞍馬が牛若丸の肩をがっしり掴んで言葉を放った。

鞍馬『自身の意思を貫くのだ。今、人間が失った大切な心を取り戻せ!!』

牛若丸「御意ッ!!」

男達は固く誓った。

零「牛若丸、そろそろ行こう」

牛若丸「はい、行きましよう!!」

そうして、俺達は山を後にした。

・・・・・

牛若丸「零さん」

零「ん?なんだ?」

牛若丸「私は、貴方のことをあまり信用してなかったです」

零「うん、知ってる」

その言葉に、牛若丸が少し苦笑した。

牛若丸「でも、鬼との戦いを見たとき、感じたんです。貴方は素晴らしいお方だと」

零「……………」

牛若丸「今までのご無礼、誠に申し訳ありませんでした」

零「……………フ」

牛若丸「?」

零「フフフ…ハツハツハツハ!!」

牛若丸「ええ!？」

突然のことに牛若丸は驚く。他の皆は慣れたのか、何も反応はない。

零「あーおかし。あのな、そんなん気にしてたら天下取れねえぜ？腐りきったこの平安をぶち壊せ」

牛若丸「は、はあ……」

零「例えば……」

俺は道に染み込んだ水分を取りだし、『水威矢』を作る。

他の皆はハテナマーク。

そんなことは気にせず、俺は真横に射った。すると……

??「ウグアツ!？」

零「フウーツ……話に集中するだけじゃなく、周りに敵が居ることも集中するのかな」
なんと、影から何十人もの人……いや、妖怪が現れ、俺達を睨み付けている。

零「…何用だ」

妖怪「あんたを殺すよう、上から言われているのさ」

零「上から？もしかして、軍が妖怪を雇ったつてのと関係が……?」

妖怪「その通り、まあ、もう気にしなくて言い。何故なら……」

牛若丸「お前が死ぬから」

牛若丸が妖怪の首を斬った。目にも止まらぬ速度で斬った。ふむ、伊達に天狗の弟子ではないな。

零「ウオオオオオオツ!!」

その雄叫びに気付いた美鈴達は、牛若丸を持って飛んだツ!!
そして、零は地面を殴るツ!!

零『痺の細胞』ツ!!

その電撃は地面を伝わり妖怪達を倒していった。

だが、美鈴達を見て飛んだ妖怪もいる。そんな妖怪を：

美鈴「ハアアアツ!!」

青蛾「テイヤアツ!!」

美鈴は蹴り、青蛾は簪を飛ばした。

芳香「……」

芳香が弱そうに見えたのか、囲まれているが手助けは無用。

芳香「……イナクナリナサイ」

妖怪「…ツ!?!」

妖怪達は恐怖を覚えた。

そう、恐怖。汗が大量に吹き出している。

次第に意識を失い、その場に倒れる。

芳香「ハツハツハツハツ勝ったぞ〜」

零「よしよし」

青蛾「あ、私にもして〜」

零「……よしよし」

青蛾「フフフ〜」

美鈴「良い体操になったな」

牛若丸「……うそやん」

俺達の強さを思い知った牛若丸であった。

玉の緒の刀 V I I I 『情報』

あの後、牛若丸とは別れて旅を続けている。

あれから時は過ぎ、今では目的の母親に会ったそうだ。祝福すべき出来事だ。

今では『源義経』みなものよしのねとして、兄弟である『源頼朝』みなものよりともと軍を率いているらしい。

彼らの時代だ。今は彼らの時代なのだ。

俺は、そんな情報を聞いて、心が踊るような気分だ。久しぶりに諏訪へ行ってみようか。

そう言うことで、諏訪へと来た。

零「んく久しいな」

美鈴「本当に定期的に帰りますよね」

零「んまあ、帰ってくるって約束したしな」

俺達は今、階段を上っている。

すぐに見えた建物、『諏訪大社』だ。

諏訪子「んあッ!? れ、零!? か、か、帰ってくるなら言ってくれれば……もつと準備出来たのに……」

零「いや、いつもこのぐらいいは来てるだろ。何で毎回同じ反応なん？」

諏訪子「あーうー……あ、どうもお久しぶりです。お弟子さん達」

美鈴「お久しぶりです」

青蛾「ヤツホー」

芳香「あーうー」

青蛾は軽しいし、芳香は挨拶じやねえ。ただ諏訪子の真似しただけだ。

神奈子「おや、零じゃあないか。久しいな」

零「……？」

神奈子の後ろに誰かいる？

もしや……

零「神奈子、その子は次の巫女かい？」

神奈子「ん？ああ、そうだ。ほら椿、諏訪子が恋した男性だよ」

諏訪子「んなツ!」

椿「はじめまして……」

零「ん、初めまして」

照れたのか、俺が嫌なのか直ぐに神奈子の後ろに隠れた。

神奈子「ハッハッハ、この子は人見知りだからねえ。さ、中に入ろう」

零「そうだな」

そして、神社の中に入っていった。

零「久しぶりに呑む酒もウマイ」

諏訪子「もつと呑め。そして酔え。そして私を勢いで襲え」

零「遠慮しておく」

諏訪子「くう……」

零「つていうか、お前が酔ってるやん」

明らかに焦点が合っていない。ベロベロに酔ってるなこりやあ。

神奈子「そつてしておけ」

零「おう。そうする」

神奈子「そーいや、今は源頼朝だとか義経だとかが有名だよなあ」

零「義経な。懐かしいね」

神奈子「知り合いかい？」

零「色々あってね」

今彼は何をしているのだろうか。

神奈子「……だとしたら、言いづらいが悲報がある」

零「……何だ？」

神奈子「今、彼は追われる身になっている」

零「何故？」

神奈子「天皇の仕業さ。天皇が戦に強い義経を、良い地位につけた。そして、頼朝にはなし」

なるほど、やりやがった。

腹の底が煮えたつような怒り、それは信じなかった兄へのもだった。

零「……今日はもう寝るよ」

神奈子「……そうかい。じゃあ私も寝るか」

そうして、夜を越えた。

零 「みんな、もう準備は出来たか？」

青蛾 「勿論」

零 「じゃあ行くぜ。義経のもとに。『ナビゲーター』。場所は……『東北』？」

美鈴 「相当逃げたのですね…」

俺は、今すぐにも彼を助けたいと思った。そして、兄を殴ってやりたいとも思ったのだ。

零 『瞬間移動』ッ!!」

玉の緒の刀 I X 『靈魂』

俺達はその光景に絶望した。

何故か？そこはもう、火の海だからだ。そこらに死体が転がっている。

零「これは……」

言葉を失う。この中に義経がいるのだろうか。

……心配だ。

青蛾「彼なら大丈夫よ。捜しましょう」

零「そうだな」

再び『ナビゲーター』で位置を確認する。

どうやら屋敷に居るらしい。途中で大量の妖怪がいる。軍が雇った妖怪か……クソツ!!何故義経がこんな目にあわなければならないのだろうか。

俺は目を閉じた。心を落ち着かせる。

零「義経は屋敷に居るが、途中で大量の妖怪が居る……だが、気にしてられねえ。強行突破だ」

美鈴「分かりました」

零「行くぞツ!!」

瞬間、風をも追い付けぬ韋駄天の如く。

俺達は走った。

目の前にぶつかりそうになつたら右手の前腕から、青に輝く鉾石のようなものを出す。そして斬った。何度も何度も。速すぎで血なども着かない。ああ、体が裂けそう
だ。

暫くすると目的地が見えた。

零「……………何だとツ!?!」

だが、その目的地は火に覆われていたのだ。

直ぐ様ドアを開け、『冷の細胞』で消火する。なかにいた人々も気付いたようだ。

男性「何奴!?!これ程の火を消す等とは…………」

零「義経はどこだ!?!生きてるか!?!」

弁慶「その慌て様、敵ではないな。私は『弁慶』だ。義経様に一生付いて行くと決めた者だ」

零「んなことはどうでもいい!!生きてるのか!?!」

弁慶「ああ、生きている。地下に隠れているのだ」

零「本当か!?!」

安心した。アイツはまだ生きているのだ。

そうさ。アイツはここで死ぬべき人間じゃあない。彼は生きるべきなのだ。

弁慶は床に通じるドアを開き、中に入って行った。

弁慶「義経様、私です……義経様」

零「……ッ?!まさか!!」

直ぐ様走ったそれを追いかけるように後ろの四人も付いてくる。

嫌な予感。それが零の心を渦巻いていた。

零「なッ!」

その嫌な予感は当たっていた。

血の臭いが漂っていた。光景は、残酷だった。義経の体に義経の体に刀が刺さっている。

弁慶「これは……この刀、この人のものだ……」

零「なに!」

自分の刀に殺されたと言うことか?どう言うことだ。

弁慶「……グッ!?!な、なんだ!?!くるし……い……」

零「おい、どうした!?!」

突然、弁慶が苦しみ始めたのだ。

苦の表情を浮かべ、その場に倒れこんだ。

?? 「フツフツフ……久しぶりだなあ」

零 「……誰だ」

?? 「あ？ 忘れたつてののか？ そりやねえぜ。俺達の仲じやねえか」

零 「お前など知らぬ。顔を出せ」

?? 「そうだな……良いだろう。俺の顔さえ見れば分かるだろう」

そして、そいつは物影から出てきた。

零 「お前ッ!」

妖怪 「ハツハツハ!! 驚いただろう？ 当たり前さ、一、二億年前に殺した妖怪がいるんだからな」

そう、そいつは昔、永琳を拉致した妖怪だったのだ。

あのときにこいつは殺したはずだった。なのに、何故……存在するんだ。

妖怪 「おーおー驚いているなあ!! 立派になりやがって、可愛い弟子まで居るじやねえか」

零 「……」

いや、きつと黄泉から来たのだ。

ユーベ・ナイトバグ、そして屠自古を殺した妖怪も黄泉から来たらしい。あいつらの

言う『あの人』という者が俺の命を狙っている。

妖怪「ああ、そうだ。俺の名前、知らないよな？」

零「興味はない」

妖怪「まあ、聞けって」

何故、名前を言いたいのだ？

不思議に思った。だが、それどころではない。

ユナ「俺は『ユナ・ネイティブ』だ」

零「……だからどうした」

ユナ「あれ？分からない？そのキョンシーを見る限り、蟲野郎には会ったよなあ？」

零「……」

ユナ「答えろよ……ああ？」

こいつはなにがしたいのだ？分からない。

いや、待てよ。何か引っ掛かる。

ユナ「まあ、いい。死ねよ」

刹那、俺は吹っ飛ばされた。

訳が分からない……というわけではない。やつの能力は、『物を移動させる程度の能力』だ。

奴は、予め持っていた石か何かを俺の腹に高速移動指せたのだ。手は動かさず。

ユナ「さっきの弁慶の顔見たか!? 最高だったよなあ!! 苦しむ顔。最高さ!! 只の毒殺だぜ!? 能力なんて使ってもいない!!」

零「うるせえ…」

ユナ「あ? ……なツ!?!」

俺は奴に石を返した。『熱の細胞』付きをね。

それは見事命中し、奴も吹っ飛んでった。

ユナ「アツチイイイツ!?! クソがツ!!」

零「はあ、はあ……奴を殺すぞ」

美鈴「勿論です」

青蛾「ええ、喜んで」

芳香「…死になさい」

零が水威矢を創り、そして射る。

ユナは咄嗟に右に回避する……しかしッ!!

美鈴「テイヤア!!」

ユナ「ガハアツ!?!」

美鈴の拳を食らう。

血ヘドを吐くユナに更なる追い討ち。

青蛾「ちよつと残酷だけど、許してね」

壁をすり抜けた青蛾はユナの頭を持ち、そのまま……壁に叩き付けたツ!!

ユナ「……チツ」

その舌打ちと共に、横に居た弁慶の死体が、何にも触れていないにも関わらず青蛾と美鈴、そしてユナの方向へ動きだし、三人にぶつかった。

多分、死体を移動させたのだろう。

ユナ「あぶねえなあ」

ユナは不意の拳をガードした。

その拳は芳香の物であった。

ユナ「嬢ちゃん。キョンシーなんだろ？その割には、生前の感情が残っているなあ、いや、実は全部覚えていたりして」

芳香「……」

ユナ「なんだ、本当に忘れていいのか。ただ、少し感情が残っていることは事実だな」

ユナは大刈りで芳香を転ばし、腹にパンチをする。

芳香にはあまり効かないが、分かっただけでも腹が立つ。

ユナ「んじゃあ、俺のターン」

瞬間ツ!!自身の体を瞬間移動させ、美鈴達の前に出た。

直ぐに構えるが遅い。既に二十発程殴られた。芳香にも同じく。

ユナ「フツフツフ。成長か……素晴らしいぞ。残りは……オマエダ」

零「ツ!?!」

刹那、重力が俺に対して強く働く。

重い。何だこれは……ツ!?!

ユナ「おお!!これが『あの人』の言っていた特典か……」

零「うぐツ!!」

ユナ「フツフツフ……」

俺に近付き、しゃがみこんで不気味な笑みを浮かべる。

ユナ「あんときの仮を返すぜ。お前を後でなぶり殺してやるよ。今は、あんたの弟子

達を強姦でもしてるから、そこで見てろ」

零「……や……めろ……」

ユナ「ああ?やめろ?おつかしいなあ……敬語がないように聞こえたなあ」

零「やめ……て……ハア……く……だ……さ……い……」

ユナ「うゝん、ゴメン無理」

零「ツ!!」

ユナは高笑いしながら、美鈴達の方へ進んでいく。

俺は死んでもいい、だから、彼女達だけは汚さないでくれ。また、俺のせいだ。

俺が居るから、周りの人は地獄を見る。

俺が居なければ、彼女らは幸せだったのだ。俺が死ねばよかったのに……俺が……
死ネバヨカツタノニ

「そんなことはありません」

……？

声が聞こえた。義経の声が聞こえたようだった。

「零さん、私はここにいます。死んでしまいましたが、霊として」

いや、聞こえた。確かに聞こえた。

義経はいる。ここにいます。俺は目を開いた。そこに居たのは浮遊する玉の緒。

「私の緒を持つてください。そして、挑んでください」

義経……いや、牛若丸。お前が居てくれて良かったよ。

「その言葉、そつくりそのままお返しします」

重力の重みが消えた。

俺は立ち上がり、牛若丸の玉の緒を掴んだ。

零「おい、腐れ外道」

ユナ「なにッ!?!」

そこには、鋭い刀の形をした義経の魂を持った零が居た。

ユナ「お、お前ッ!!何故立っている!?!」

零「二人だからだよ」

ユナ「は?」

零「もう、痛みも重さも無い。傷や負傷は、友によつて書き消されるのだ」

零は構えた。鋭い目付きを向ける。

零「行くぞ。丸」

牛若丸「はい!!」

玉の緒の刀 X 『友情』

零「……………」

ユナ「なるほど……靈魂か……しかも擬態化するとは珍しい。よっぽど強い念だ」

義経「当たり前だ。零さんの命が狙われているんだ。そのままにはいかぬ」

こう思ってくれる人がいる。そう気付く。それは、美鈴達や諏訪子達、神子達や文達、そして永琳達。挙げると数多の数だった。

ユナ「まあ、どうでも良い。どっちにしろ……死ね」

ユナは瞬間で俺の前へと出てきて渾身の一撃を食らわした筈だが、その拳という名のビームは刀によって遮られた。

美鈴達も目を覚ましたようだ。

ユナ「ツク!!……あんただけが、刃物を扱うなんてフエアじゃあないよなあ!!」
零「……………」

義経「まさか!? 零さん、構えてください!!」

言われた通りに構えるが、ユナはお構い無しに弁慶の死体の方へと向かった。

ユナは弁慶に触れる。軽く撫でる程度。

そしたら、空中に幾つもの武器が浮かんできた。あらゆる場所から出てくる。

義経「あれは弁慶の所有物です。武器を集めるのが趣味でした」

零「おかしくないか？アイツ、武器に触れていないのに能力が発動している」

義経「なにやら『特典』というもので、『生物に触れるだけで、その所有物を扱える』らしいです。俺も、彼に触れられて刀を奪われていたのです」

『特典』……か。次から次へと問題が降りかかってくる。その一つ一つの問題を繙くのにどれだけの流れに乗らなければならぬのだろうか。苛まれるぜ。

徒花を見ている気分だ。憂鬱な気分。

ユナ「いくぞオツ!!」

零「……」

それらは一気に向かってくる。

勿論避けるが、限界が来るのは当たり前。何処かで防がなくてはならぬ。

……否、その必要性はない。

ユナ「当たれエエエエ!!」

零「回りを見ねえのが、あんたの悪いところ」

ユナ「あ?」

次の瞬間ツ!!ユナは吹っ飛ばされたツ!!美鈴の拳によってツ!!

勢いで零の方へ。そして……………

零「ハアッ!!」

ユナ「ウグッ!」

斬る。それだけである。

ユナ「ハア……ガハッ!?!ハア……まだまだ……刀に触れたからな」

瞬間。義経である刀はユナの後ろの方へと刺さった。

ユナ「お前に刃物は効かない様なもんだからな」

零「よくわかつているじゃあないか」

ユナ「お前を殺すためにお前を知ってきた」

零「その努力は無駄になる」

ユナ「どうかな?」

零「……フツ……もうなっているか」

ユナ「あ?」

何かが勢いよく斬れる音。

ユナの背中が斬れたのだ。斬ったのは、義経である。

零「こいつは刀になるだけじゃあない。幽霊なんだから、人の形をするのは当然。

なあ、丸」

義経「ええ、そうですよ」

ユナ「…ク、クソ…クソどもがああああッ!!」

義経「秘技『百艘潰し』」

出鱈目に斬っているようで毎回致命傷を与えている。正に秘技である。

義経「テイヤアツ!!」

トドメ。ユナ・ネイティブはもう動く様子がない。

零「いやあ、終わったな」

義経「そうですねえ」

ボロボロになりながらも朝日を眺める。

美鈴「強くなっただけですねえ」

義経「ええ、それはもう。死んで霊になっても、力は死なん」

青蛾「貴方、あのユナ・ネイティブって人と知り合いみたいだったけど……」

零「まあな」

俺は空を見上げ、目を瞑る。

すると感じる。微かな風の流れを。

零「なあ、義経。一緒に来るか？」

義経は少し驚いた。が、直ぐに笑顔になり……

義経「勿論です」

と、答えた。

零「よし、じゃあ行くか」

そして、旅は再開する。新しい仲間を加えて。

心の隙間の温かみ

心の隙間の温かみ I 『喪失』

時は戦国時代。織田信長が勢力を上げ、全国を統一するかと予想されていた時代。ここで、零は今後の人生を変える妖怪とで会う。

場所は蝦夷地。新たな地として踏み入れた。

零「しっかし、寒いな」

美鈴「ええ、もう一枚着てくればよかった」

義経「私は何も感じませーん」

零「お、おのれ……」

思いの外寒い。

蝦夷は寒いとは言え、そこまでだろうと思ひ込んでた。

不意に声が聞こえた。

零「……ん？何か聞こえる……？」

遠くから聞こえる。

妖怪の声か？人間か？どちらにしても、とても楽しそうには思えない。

美鈴「…………行くんですか？」

零「勿論だ」

青蛾「ハア…………お人好しね」

零「まだ、人かどうか分からない。ホラ、掴まれ」

皆、俺に掴まったことを確認して…………

零『瞬間移動』!!」

く場所変わり、その声の持ち主く

男「おい、紫。人と妖怪が共存するだあ？舐めたこと言っつてんじやあねえぞツ!!」

紫「うツ!!」

蹴られる。思いきり、強く蹴る。

一帯には血が広がっている。

それでも、『八雲紫』は願ひ出る。式の『八雲藍』も心配するほどに。

イペタム「妖刀と呼ばれた『イペタム』様がお前らの言うことを聞くと思ってたか？」

紫「願ひします」

藍「紫様、もうお止めになった方が…………」

紫「黙りなさい」

藍「……………」

頭を地面に擦り、いつまでも願ひ出る。

イペタムは見苦しく思つたか、どこかへ行こうとした。が……

紫「お願ひします!!」

紫はイペタムの脚にしがみつ き、諦めなかつた。

最早プライドと言うものは無かつた。

イペタム「しつこい奴だ」

イペタムは剣を取りだし、紫に振りかざす………筈だつた。

不思議に思い、イペタムは振り返つた。

零「殺生は好ましくないなあ。別に悪党でもないのに」

零がそこにいた。神田零がそこにいたのだ。

彼はイペタムの腕を掴んでいたので。

イペタム「な、なんだお前!」

零「神田零だ。しがなない旅人さ」

紫「神田………零?」

イペタム「んな?!………チツ、分かつたよ。生きる伝説を見ることができたし、今回は

許してりやる」

そういつて、イペタムは森の方へと消えていった。

零は紫の方を見て、しやがみこんで手を差し伸べた。

零「大丈夫かい？」

紫「零……なの？」

零「んあ？まあ、そうだが……どうした？」

紫「零!!」

零「ふぬおツ!」

いきなり抱きつくというナンパか？逆ナンか？

いや待て、まず様子を見るに俺のことを知っている？だが、俺の記憶には彼女のよう
な人は居ない。誰だ、この娘は？

紫「やつと……会えた……うつ……うつ……」

遂には泣いてしまった。

もう、逆に心配になってきた。俺が忘れているだけなのか？だとしたらスゴく申し訳
ない。

彼女の付き添いも目を点にしている。

零「……すまないが、俺は君のことを知らないんだ。忘れているのか、本当に会った
ことがないのか分からない」

紫「え……そ、そんな」

酷く絶望した表情。申し訳ない。

零「すまん、本当に君が分からないんだ」

紫「……そう……やっぱり、私のせいなのかもね」

零「え？ どういう……」

紫「ううん、気にしないで」

そう言われても気になるんですが……

紫「私は『八雲紫』。この娘は私の式の……」

藍「『八雲藍』です。以後、お見知りおきを」

零「うむ、分かった」

自身の自己紹介を改めてやった後、美鈴達の紹介もした。

紫「キョンシーや幽霊も一緒に……しかも幽霊が源義経って……」

藍「式ではないんですか」

零「うん、青蛾や芳香は親友、美鈴と丸……義経は弟子だ」

義経「なんか、しれっと弟子になってました」

紫「いや、どうやったらしれっと弟子になれんのだよ」

ごもつともな意見だ。

紫「……」

零 「どうした？」

なにやら真剣な顔付きになった。

どうかしたのだろうか？

紫 「ねえ、零」

零 「どうした？」

紫 「その…人間と妖怪の共存できる世界を一緒に創らない!？」

零 「いいよ」

紫 「…ええ？」

零 「え？」

何故疑問になった？

紫 「い、いいの？あ、あれだよ？妖怪と人間の共存する世界だよ？」

零 「だから、いって言ってんじやん。なあ？」

美鈴 「んくそうですね、出来んじやないんですか？師匠だし」

謎の根拠。

俺って何なんだよ。

そうして俺はすんなりと謎の妖怪、紫と約束を結んだ。

心の隙間の温かみ I I 『契約』

少し二人で話したいと申し出たので、そこにあつた誰かの納屋で話し合うことにした。

紫「その……零？本当に良いのよね？」

零「ああ。というか、さつきからそう言っているだろう？理論上は可能だしな」

紫「創るのにも膨大な霊力と妖力、それに神力が……」

零「膨大に有り余ってる」

紫「……うん」

なんだ？そんなに信用ならないか？

取りあえず広い土地を境界で囲めばいい。理論上は可能であるはず。

紫「あ、貴方にそこまで負担はかけたくないし……」

零「君が誘ってきたんだらう？」

紫「うう……でもお……」

ん？何をそんなに遠慮してるのか。やはり、俺が忘れていただけで過去にこいつと何かがあつた？

だとしても、思い出せない。

零「ああもう、めんどくせえ!! なんだったら、霊力が豊富な神社の巫女や神主も誘ったら!？」

紫「え……?」

零「その世界。出来た後はどうなる?」

紫「後?」

ハア……やれやれ。計画性がまるでない。

良いだろう。手伝うと契約を結んだんだ。折角なら助言をしてやるよ。

零「いいか? その世界を創って永遠に平和がくるわけじゃない。平和は只じゃないんだよ」

紫「…なるほど、必ず『異変』が起きる」

零「そうだ。結界で孤立した世界だぜ? 妖力と霊力で溢れて仕方がない。暴れたい妖怪も出てくるさ」

紫「……それを解決するために『巫女』、もしくは『神主』と言うわけね」
理解したようだ。

零「しかしだ、油断してはならない」

紫「え、なんで?」

零「その異変を解決する者自身が異変を起こすかもしれない」

紫「……」

零「異変を解決する者は二人以上であり、そして親しい仲や犬猿の仲等の様々な関係性を持たせた方がいい」

紫は納得したように頷いた。同時に肩をすくめた。

紫「しつこいようだけど、本当に覚えてないの？」

零「すまない。やはり、君の顔を見たことはない、俺の脳が判断している」

紫「そう……昔はこうやって意見を言い合ってたのに……」

だが……分からないものは分からない。

零「聞くが、俺達が出会ったのはいつのことなのだ？」

紫「……いえ、いいわ。もしかしたら、同姓同名の顔が似た人なのかも」

零「そんな人、いるのか？」

紫「存在の否定は出来ないわ」

零「確かにそうだ」

俺は強く肯定したが、心の中では否定した。少なからず、顔のパーツは何処か違うだろうし、久しく会ったにしろ、抱き付くほどの仲の異性の顔を間違えるだろうか？ 雰囲気だつて違ふだろうし、態度だつて違ふはず。

そう思っていたら、戸が開く。

青蛾「零、ちよつと来て」

零「分かった。すまん、少し空ける」

紫「いいわ、気にしないで行ってらっしゃい」

俺は後ろ手で戸を閉め、青蛾の顔を見て聞く。

青蛾「気になったのだけれど、何故彼女の計画に参加したの？」

零「何故って？」

青蛾「きつと、永琳達を匿うためと、彼女のこと、記憶にないから償う為に乗ったの
だろうと思うけど、その他に理由があるんじゃないの？」

鋭いな。流石青蛾だ。

零「何故そう思う？」

青蛾「……勘？」

零「結構。ならば教えよう」

青蛾は少し前屈みになった。

零「自身の正体を知るためさ」

青蛾「え？なにか関係が？」

零「力を結界で閉じ込めていれば、自と住民は強くなるだろう。その人達に頼んで一

緒に正体を暴いてほしい」

青蛾は少し驚いた様子だった。

零「うむ、自分勝手なのは分かっている。だが…」

青蛾「意外…」

零「え？」

青蛾「意外と気にしたのね……自分の正体なんて気にも止めてないのかと」

零「おい、それどういう意味だ」

青蛾「そう……でも、私達だけじゃ不満かしら？」

零「ツ!」

漸く気がついた。これは、青蛾達に対しての侮辱であると。

しかし、今となつては断れない。身勝手すぎる。

零「すまない……だが、多い方が早く分かると思い……」

青蛾「ふふ、良いのよ。別に悪気があつたわけじゃないでしょうし」

零「……」

何故、こんなことをしてしまったのだろう。酷い人だ。俺はなんて酷い人間なのか？

青蛾「ほら、彼女の顔を見て」

零「え？」

青蛾が指差したのは芳香だった。

芳香は芋虫の行動に興味を示している。前まではあれほど虫を嫌っていたのに、不思議なものだ。

青蛾「彼女、実は生前の記憶をほんの少しだけ取り戻したそうよ」

零「なにツ!？」

青蛾「いつも蝶に戯れてたでしょう?それで、良い記憶じゃないけど『ユーベ』を思い出したらいいの」

零「……………」

青蛾「貴方も、見つかるわ」

そうだな、と応えた。しかし、俺の心は晴れない。

青蛾「もう!!いつまでもイジイジしてたら抱き付くよ!？」

零「……………お願いだ」

青蛾「え?」

零「……………少し、人肌が恋しい」

青蛾「……………うくん、ダメ。紫さん、放っておいてイチャつくのは悪いわ。後、本気にしちゃうから止めて。貴方にはもう居るでしょ?」

零「……………そうだな」

もはや、精神が歪んできているのかもしれない。

その可能性があることに、酷く絶望した。それがダメなのだ。

青蛾「じゃあ、納屋に入ってらっしゃい」

零「ああ、分かった」

俺は、背中に何かが乗っかるような辛さを味わいながら、納屋に入っていった。

心の隙間の温かみ I I I 『計画』

紫「……うん、ある程度は話し合ったわね。それじゃあ皆を呼びましようか」

零「ああ、呼んでくる」

俺は納屋の戸を開け、青蛾達に呼び掛けた。

青蛾達はそれに気付き、納屋の方へと向かってくる。

美鈴「終わりましたか？」

零「ああ、中に入ってくれ」

青蛾「お邪魔しまーす!!」

中に入れた。納屋は意外に広いのでみんな入る。あと二、三人は入れる。

立ててる蠟燭を円陣に囲むように座った。

青蛾「それで、どういう話になったわけ？」

紫「まず、私の理想郷を創るためには土地が必要。出来れば山奥が良い」

零「旅をしてきた俺達は土地には詳しい。だから候補を挙げた」

候補は二つ挙げた。

一つは北方領土のどれか。国後島とか良いかもな。

そして、白馬村の山。信州にある山に囲まれた村。大きいから半分にしてその理想郷を創ろうという魂胆だ。

零「妖怪と人間の共存する世界。しかし妖怪がいなきや意味がない。だから、全国から妖怪を集める。そして、その理想郷を創るわけだ」

紫「その理想郷の名前は『幻想郷』というの」

美鈴「幻想郷……」

美鈴がその名前を聞いて復唱した。

零「これは膨大な計画だ。治安を守る巫女や神主を幻想郷の主要人物に決めたり、しかしある程度悪さを働く妖怪や人間も必要だ」

青蛾「悪さを働く？またどうして」

案の定の質問が来た。

零「皆が善人で世界が長続きすると思うか？」

青蛾「ええ、私はそう思うけど……」

零「いいか？善人であることは良いことだ。しかしだ、言い方を悪くすれば刺激がない人間だ」

美鈴「刺激がない？」

零「優しさに刺激があると思うか？無いな。人間は誰しも刺激を欲する。つまらない

からだ。人生を退屈しないためにな。分かったか？」

皆は「なんとなくは理解した」と言うような顔で頷いた。

零「これは日本各地を廻って行く計画だ。そうだなあ……この計画を『東方Project』と呼ぼう」

青蛾「東方ぷろ……何？」

紫「東方Projectよ。Projectの意味は計画って意味」

青蛾は納得したようなしていかないような、そんな微妙なラインでの頷きを見せた。

そして更に、美鈴からの質問が来た。

美鈴「何故『東方』のですか？日本全国なのに」

零「日が昇るのは東からだろう？日本は日が昇る国。つまり、世界の東方に存在する国って訳だ」

美鈴「ああ、成る程!!」

こちらは凄く感心した上で理解した。

零「取りあえずだ。土地の確保だ」

紫「先に北方領土に行きましようか」

零「そうだな」

美鈴「北方領土に行くのですか？懐かしいですねえ」

芳香「今度こそコロポツクルを見るゾ」

零「もう何回か見ただろう？」

いつもの雰囲気で、まるで観光をしに行くように話しをしているが、このプロジェクトはこの人生で最も最難関なものだろう。しかし、面白味も詰まっている筈。楽しみで仕方がない。

俺は湿った土を踏みながら、蝦夷の風を感じ、そう思うのである。

心の隙間の温かみ I V 『小人』

紫「このオホーツクを渡れば島に着くのね？」

零「ああ、そうだ」

紫「それじゃあ、早速いきましよう!!」

零「待って待って、俺も久し振りに来た。昔からの友人たちに挨拶をさせてくれ」

紫「友人たち？」

俺達は紫と藍を連れ、森の中へ入った。

森の樹々は入り乱れて躓きそうになるも、何とか奥へ進んだ。そして……

藍「ハア……ハア……一体何処まで……」

零「静かに」

藍「……………」

耳をすますと声が聞こえる。

零「イランカラプテ!!」

藍「え？」

紫「こんにちはって意味よ」

暫くすると俺たちに向けて話しかける声が聞こえた。

?? 「誰だ？」

零 「神田零だ。仲間を連れ来た」

?? 「合言葉は？」

零 「アシリウ新パシ雪」

?? 「零!! 久しいな!! さあ、入れ!!」

すると目の前の地面がいきなり空いた。それまでは踏んでも跳んでもただの地面だったのにと、藍は驚いている。

その穴から、小さな人間が現れた。コロポックルだ。

零 「久しいな。一尺」

一尺 「その名前は嫌いなんだ。背はそこまでないし、俺の器にしては小さいからな」

零 「はいはい、今まで通り『シヤク』って呼ぶよ」

義経 「シヤクさん、お久しぶりです」

一尺 「おお、義経じゃないか!! 久しい面がこんなにも……そのベツピン達は？」

紫は至って平常に自己紹介。対して藍は啞然としながらも、自己紹介を始めた。

紫 「八雲紫です。こちらは私の式の……」

藍 「や、八雲藍です……」

一尺「紫さんに藍さんね……そんなことより早く入りなよ!!」

零「おう、分かった」

俺達は一尺に続いて中へ入っていった。

藍「綺麗……」

一尺「だろう？ 何せ我らが先祖、少名毘古那樣から授かった理想郷だからな」

零「何度見ても絶景だな」

紫「そうね」

零「え？ 初めて来たんじゃないのか？」

紫「え、ああ、絶景って所に共感したの」

零「なるほど」

そこには幻想的な風景、町を照らす炎の光、天上に滴る小さな雫、それが落ちた緑の泉、所々に生えた草、全てが美しかった。

一尺「大きい人用の通り道はこつちだ」

決して広くはないが、確かに通れる道。実は俺が来た時の為だけに作ってもらった道なのだ。

紫「でも、地面に理想郷を作つてよかつたの？もし、地面が掘られたら……」

一尺「ハツハツハ、いらん心配さ。此処と彼処は異次元の場所にあるのさ」

紫「そうなの。だからか……」

一尺「ん？どうかしたか？」

紫「いえ、なんでも」

しばらく歩くと、開けた場所に出た。

ここは人間が人数いても座れる程に広い場所。ここは元からあつた場所だ。

一尺「さあ、座りな」

一尺の言葉で皆は腰を下ろした。芳香は足を伸ばして座つてる。

気付くと周りにはコロポックル達が大量にいる。

一尺「それで、どうして蝦夷なんかに？」

零「いやあ、ただの里帰りさ」

一尺「お前の里は幾つ有るんだつての」

零「ハハハ。でも、目的が此処で出来ちやつてね。な？」

紫「ええ」

紫はゆつくり頷いた。

一尺「へえ、聞かせちゃあくれないか？」

紫「わかつたわ」

一尺「ハア、幻想郷ねえ？」

紫「はい」

一尺「良いんじゃないか？ 零も付いてるんだし。実現するさ」

零「照れるな」

と言っておきながら、フツツと笑う程度。

一尺「にしても、まさか俺らもその幻想郷に招待する気じゃあねえよな？」

紫「そうしたいですが、嫌なら構いません」

一尺「弱いねえ。ま、でもそうだね。その船になる気はねえな。俺達は蝦夷で充分さ」

紫「分かりました」

イペタムに土下座してまで幻想郷を創りあげようと思っていた割にはすんなりとし

ている。

俺達という協力者が出来たことにより余裕ができたか？

一尺「にしても……『一寸』は元気かねえ」

零「さあな」

藍「え、あの…一寸つて…あの一寸ですか？」

一尺「なんだ？御伽だと思つてんのか？チツチツチ、実話だよ」

藍「えッ!？」

藍は分かりやすく驚いた。手を地面に着け、前屈みに一尺の言葉に興味を持った。

なんだ？一寸の愛好者か？

一尺「俺の息子である『少名一寸』の本当の話、聞きたいか？」

藍「息子!？」

一尺「おうよ、息子さ。実はだな、奴を姫様の所に送つたのは俺達なんだぜ」

藍「御地蔵様が老夫婦に授けたんじやなかつたんですか!？」

一尺「そんな話の誇張さ。いや、逆か。膨大な話を抑えたんだ」

一寸自身が、そうやって語っているからな。

一尺「お父さんに迷惑は掛けたくないんだとよ。親孝行な奴だよなあ？」

藍「そうだったんですか……」

一尺「昔は『零さんのような強者になりたいです!!』なんて言ってるな!!」

零「そうそう!!あの頃は泣きそうになったね。嬉しくて」

一尺「俺も泣きそうになったな。妬ましくて」

藍「やっぱり零さんってお強いのでしょうか…?」

一尺「ツたりめーよ!!なまら強いぜ。なんてつたつて、性格に似ねえ『神殺しの零』つて二つ名を持つてんだからな!!」

取り残された紫。青蛾達は他のコロポックルと話している。

紫「……居場所がない」

小声で呟いた。

その声が零に聞こえたらしい。零は振り返り、紫に話した。

零「そうだ。なんならこれからについて話そうか。シヤク達の意見も聞いてさ」

それなら君の居場所は有るだろう?と言うように零は笑った。

ありがとう、やっぱり貴方は私の知っている零だ。そう呟かず心の中で思った。

心の隙間の温かみ V 『排煙』

零 「まさか、君の式が船に弱いとはね。意外だよ」

紫 「ふふ、気にしないであげて。心配をしたら落ち込むから」

藍 「う、うつぶ」

藍は海に真つ青な顔を向け、口から出しそうな顔をしている。それを見て、紫はニコニコ笑っている。鬼か？コイツは。

俺も海に体を向け、懐から煙管と少し湿った干し草を取りだし詰めた。

零 『熱の細胞』

干し草に火がつき、零は吸った。

零 「フーツ……」

紫 「煙草は体に悪いのよ？」

零 「よく知っているな。だが、俺の体はこんなもんじゃ弱らない」

紫 「フフフ、それもそうね」

口と煙管から出る煙は海風に流れ、天高く昇る前に薄れていった。

それを見ていた芳香は何を思っているのか、ただただずっと見ていた。何も、喋らず

に。

青蛾 「どうしたの？ 芳香」

芳香 「わからない」

青蛾 「……………」

芳香 「あの煙……………焼かれた蟲に似てる」

焼かれた蟲……………ユーベ・ナイトバグのことだろうか。零の『熱の細胞』で焼かれた奴のことと言っているのだろうか？

芳香は急にその場に座り、汗を大量に流している。

青蛾 「芳香!？」

零 「どうしたんだ？」

青蛾 「芳香が急に!!」

芳香 「う、うう……………」

苦しそうな顔をして、目を瞑る。

零は芳香のこめかみを指で触れ、何を苦しんでいるのかを探す。重ねて『ディア』も行う。

零 「……………記憶がまた少し戻ったようだ」

青蛾 「……………」

芳香「うう、零……辛いよ……痛いよ……怖いよ……」

零は芳香の頭を撫で、子を愛でるように囁き安心させる。

痛いという感覚がある。それは死んでいるはずの芳香には無いはずの感情だ。ならば何故？もしかしたら……首だけだった時、彼女は生きていた？

分からない。もう、痛みは彼女を襲っていないらしい。ぐつすりと眠りについた。

零「……どうやら、彼女には自身も知らぬ真実があるようだ」

青蛾「真実？」

零「確実ではないが仮定がある。今はまだ言えないが」

紫も心配するように芳香の顔を覗く。藍の心配はしなくせにな。

零は藍の方へ行き、背中を擦った。

零「少し落ち着いたか？」

藍「あ、ありがとうございます……その……芳香さんが大変な状態なのに御心配を御掛けして申し訳ないです……」

分かりやすく落ち込む。本当だったんだな。

紫は、あくあ、やってしまったよと呆れるような顔をした。鬼かよ、コイツ。

零「心配？まさか。君は強いんだから、心配する必要がない。俺はただ、落ち着いたかどうかを聞いたただけだ」

藍「え、あーその…慣れては来ました。あと、その、恐縮です」

恐縮ですの声が震えていた。絶対慣れてない。今にも吐きそうな顔をしている。相変わらずの真っ青顔の藍に、背を向け芳香を部屋へ運ぶ。

藍「…おえ…」

紫「なにが慣れてきたよ」

藍「ス、スミマセン…：う!!うう…：」

藍の呻き声は一日中、オホーツクの海に響いていた。

心の隙間の温かみ VI 『未来』

紫「藍、もう着いたわよ」

藍「は、はい。ありが…うツぷ」

紫「ハア…」

零はもう地を足で踏み、広がる光景を眺めている。

これが、零の挙げた候補の島か…

紫「そう言えば、芳香は？」

青蛾「ぐっすり寝てるわ」

紫「そ、そうなの」

この人達は普通の感覚になっているけど…キョンシーって元々は死人だし、さつきみたいに痛いなんて言わないし、寝たりもしない筈。つまり、その…人間らしいことはないのよ…

やっぱり、おかしいわ…彼女って…

零「紫？」

紫「へあ!？」

零「うお。す、すまない」

紫「え？ああ、気にしないで、考え事をしていただけだから…」

零「そうか？なら良いんだ」

驚いた。心臓が体内で跳ねた気がした。その後も血液が体を巡る音が聞こえて止まない。

取り合えず落ち着くために少し大きく息を吐くが、なんの変わりもない。

紫「今は幻想郷のことだけを考えるのよ……」

藍「あゝ落ち着いてきた……」

紫「あら、もう落ち着いたの？良かったわ」

藍「すみません……」

しかし、女なんだからあゝと汚い声を出すんじゃない。いや、女だからって言うのは差別を感じるわね。止めましょう。

零「にしても、変わったな。この島は」

美鈴「そうですね……」

義経「同意です」

紫「なにが変わったの？」

ただ単に森が広がっている様にしか見えない。昔は巨大都市があったとか？

零「昔は、自由な島だった。楽しさで溢れた、笑顔の耐えない島」
もし昔がその様な島立った場合、今はそれに合わない。似もしない。
この島に、声も動物も見えない。なにかに支配をされているよう。

零「……ダメだな」

紫「え？」

突然の否定に声が漏れた。

ダメ……なんとなく何を指して言っているのかは分かるが……

零「今日の朝飯、当たったぜ……本気でダメだ……」

紫「いや、そつちかよ!？」

零「すまん、部屋に戻る」

ええええええええ……

呆れたよりも驚きが多い。久しぶりに零の変人つぷりを見た。少し嬉しい。

藍「あの人こそ自由ですよね」

青蛾「そこが良いんだよね。なんか母性本能がくすぐられる……」

それはない。

美鈴「と、兎も角、私達も休みましょう。潮風に当たり続けて疲れましたし」

青蛾「そうね、寝ましょー。芳香も気になるし」

藍「落ち着きはしましたが……ちよつとまだ胃に違和感がありますね」

義経「じやあ、疲れてないので修行をしますね」

私も特にないけど……

紫「私も寝るわ」

そう言つて、部屋に戻つた。と見せかけ、零の部屋へ向かつた。

ドアをノックし、返事を待つ。

……ああ、そうだった。

紫「零？入つて良いかしら？」

零「ん？いいぞ」

私はドアを開け、中に入る。

紫「お腹、大丈夫？」

零「ダメだ。まあ、心配するな。俺の体だし、すぐに回復する」

確かにそうよね。でも、心配は心配よ。

零「心配するなつて。別に死ぬ訳じゃあないし」

紫「無理ね。心配するなつて方が」

零「……優しいんだな」

紫「……そんなこと……ない」

もし、優しかったら貴方を……こんな事に巻き込まない。巻き込まなかった。私に自信がないから貴方達を巻き込んでしまったんだもの。

紫「ねえ、零」

零「ん？」

紫「必ず幻想郷を創ろう」

零「当たり前だ」

零は静かに頷いた。

心の隙間の温かみ V I I 『悪神』

にしてもだ、この島の殺気は静かだ。多分この殺気に気付いているのは、俺と気を扱
う美鈴と仙人である青蛾。この三人だけだろう。いや？紫も微妙な表情をしている。

殺気と言うのは基本、大きければ大きいほどその者は強い。しかし、この殺気は小さ
い訳ではない。この島全体を、まるで縄張りを示すように覆っている。

しかも、この殺気はわざと気付かれないようにされてる。そんな器用な事を出来るの
は……………

零「どうやら、この島は呪われているようだな……………多分、悪神かなにか」

紫「悪神……？」

零「靈魂が島の中心に集まっている。更にその中心に神力を感じる」

先程、『ナビゲーター』でこの島を調べた。奇妙なことに中心に靈魂が神力を纏うよう
に集まっている。

人間の反応を少なく、最早その命ももう僅か。

義経「死者をなんだと思っっているんだ」

零「……………命の尊さを知らぬとは、愚か過ぎるな」

周りの者は揃って頷いた。その悪神、滑稽で思わず失笑をしてしまう。何も言えん。

紫「でも、相当強いわ。油断はならない……藍、この島に悪神が逃げないよう結界を張りなさい」

美鈴「そんなことしたら悪神に存在を気付かれてしまうんじゃない……」

零「宣戦布告さ。これ程の悪神、小さな挑発にも乗るだろう……いや寧ろ」瞬間、零の足元に矢が刺さった。

零「もう乗っているだろう」

その矢から黒いオーラのようなものが溢れ出て、そこから霊が出現した。

美鈴や紫、藍や青蛾はその場で構えた。が……

芳香「成仏せよ、親不孝者共」

青蛾「え？」

芳香の、突然の発言に皆も俺も驚いた。先程から黙り混んでいた芳香が開いた口から出てきた言葉は芳香らしからぬものだった。

霊「……………」

芳香「親に産んでもらい育てられ、それらを護るべく自らは戦士となったのだろうか？それを途中で目的を忘れ、いざ死んだら恨めしくこの世に参ってくる」

異様な事だった。

それは怒りからなる言葉である。何処か八つ当たりのようにも聞こえる。

芳香「恥を知れ」

霊「……………!!」

芳香「お前を冥土で待っている親をいつまで待たせるのだ？ 悲劇ぶるなよ。どうすることも出来ない者の方が余程悲劇なのを思い知れ」

その言葉に、霊は刀を降ろした。そして、その姿は薄れゆく。

零「お、おい。芳香……………」

芳香「……………うん？ どこ、どこ？」

そこ瞬間、表情や仕草など、全ていつもの彼女のものとなった。

やはりだ……………彼女は、生きていた時に戻ろうとしている。記憶を呼び覚まそうとしている。

芳香「零く頭撫でてく」

俺はいつものように彼女を撫でる。いつものように暖かい。なんなのだろう。

彼女は死者。しかし、死者とは程遠い。

死者であり、死者ではない存在。近い内、彼女は記憶を完全に取り戻すのかもしれない。

俺は芳香の笑顔を見つめながら、そう感じた。

心の隙間の温かみ V I I I 『知名』

男が妖怪の脳天をナイフでほじくっている。

それは、八つ当たりと、村を襲っていた妖怪を退治して感謝されるといふ二点を報酬に戦った後である。

男「どうしてだよツ!! どうしてツ!! 俺は讃えられないんだツ!!」

ただただ、生々しい音だけが響いた。

男「幾ら悪人を殺しても、殺しても有名にも評判にもされやしねえツ!!」
暫くナイフで抉っている内に、楽しくも嬉しくもないのに、笑ってきた。

狂気じみたその笑い声。

男「……………ならいつそ」

お前が悪となればいい

零「……ッ!？」

今の記憶は……?いきなり俺の頭の中に入った。

もしかして、今のはこの島を支配している悪神か?しかも、最後の言葉……『お前が悪となればいい』……話の流れ的におかしい。『俺が悪となればいい』じゃないのか?

しかし、何故いきなり……?

青蛾「零?どうかしたの?」

零「あ、ああ……気にするな」

こんな入り込んできた記憶なんてどうでもいい。

目指すは島の奥地。靈魂の集う場所。

零「そこまで時間はかからない筈だ」

紫「なんなら、私の能力を使いましょう?」

零「え?君の能力?」

紫の能力……?一体なんだ?

それらしき現象は何回かあったが……

紫「私の能力はね……」

パチンツと指を鳴らした。

瞬間、落下したような感覚。いや……これはッ!!落ちているッ!?

紫「『境界を操る程度の能力』よ」
そして、俺の視界は暗転した。

男「誰だ!?!」

■「お前…:そんなにこの世から注目をされたいか?」

男「な、何?」

正しくその通りだ。俺はこの世から注目されたい。

だが、そんな理由で妖怪退治をやっているなんて知られたら、格好が悪い。

男「そんなはず…:ないな」

■「それなら、何故一瞬でも悪になろうと思った?」

男「…:それは」

■「注目をされたいから、だろう?」

男「ッ!?!」

凶星。先程から正論で突いてくる。

こんなの、嫌だ。苦でしかない。そう、この頃思っている自分がある。

■「良いじゃあないか。夢のない者より断然にな」

男「……」

■「なればいいじゃないか。悪に……お前のスゴさを理解しようとしぬい奴等を支配しろ」

男「支配……」

零「……」

またか……俺は顔を上げ、回りを見た。

森。しかし、霊力が強い。

紫「どう？ 凄いでしょ」

零「ああ、驚いた」

紫「フフン♪」

分かりやすく上機嫌になった紫。それを呆れたように見ている藍。

二人は、よく考えると凄^レいコンビだよな。

世界で一種の妖怪と伝説の大妖怪である九尾^{キュウビ}。そもそも九尾が式と言うのも少し面白^い。

藍「…どうかしました？」

零「んや、気にするな」

藍「難題ですね。その口癖、直したらどうです？ 気にするなって本当に無責任な言葉ですよ」

零「……………」

説教されました。

心の隙間の温かみ IX 『擲掬』

俺が予想するに、多分布都を襲った妖怪。名前は知らないが、その遠隔操作系の能力を持ったあの妖怪が関係している筈。

いきなり入り込んできた記憶の中の声、男に話しかけていた声が、アイツだった。

あいつはもう死んでいる。つまり、アイツに襲われたことのある人間が死後、悪神となりこの島を支配しているのだろう。

藍「零さん。中心部はどの様な状況でしょうか？」

零「急かすな。待ってろ」

俺は『ナビゲーター』で状況を確認する。

零「……………ハア」

紫「…?」

零「いやなに、そこまで強くないように思える」

紫「でも、この殺気……………」

零「取り巻いている霊達、集められていると言うより『護らされている』ようだ」
まるで細胞。核を核膜が覆っているように、悪神を霊達で覆っている。

そしてこの島は細胞質基質。悪神の殺気が細胞膜。……うんうん、我ながらいい例えだ。

零「とりあえず、近付くだけだったら危険じゃあないらしい」

え？と皆は耳を疑った。

何故、そう言えるか。俺達がテリトリーに入ってきているのに、確りした攻撃を受けてない。

さつきの矢も当てる気はなかったし、そこから出てきた霊も説得如きで成仏だ。それに中心部の悪神、まるで生きてる気がしない。こう言うときは大体、敵を目の前にして戦う気がない時である。

紫「うーん、じゃあ行きましよう」

藍「もう少し慎重になった方が……」

紫「臆病ね」

藍「むう……」

中心部に迫れば迫るほど景色は不気味になってゆき、雲の色が青紫になったり、木から血液が出てきたりして。決して竜血樹じゃない。白樺だ。

そんな景色を数分見ながら歩いて、中心に着いた。

そこには大きな核のようなものがあり、中に人影が見える。コイツが、悪神だ。

零「……」

先程、悪神がまるで生きてる気がしないと云ったが、ちゃんと生きてるし、証拠に膨大な殺気がある。

戦う意思がないのに殺気だ。

この不思議な感覚、どういうことなのだろうか。

紫「にしても、殺気はもうないのね」

零「え？」

紫ほどの妖怪なのに、この殺気を感じられない？俺単体に向けての殺気か？

その時、不思議な感覚が蠢く。蠢きながら、蝕むような気がした。

紫「零？」

意識が遠退くような気がした。まるで何者かに崖から突き落とされたような……感覚。

視界が完全にブラックアウトした。

れい……れい……零……

青蛾「零!!」

零「ん……」

青蛾「大丈夫?」

氣絶していたのか? 確かに殺気は強いが、この俺が氣絶をする程ではない。

何が起きた?

零「……あー、すまない。心配をかけてしまつて。大丈夫、俺は元気だ」

青蛾「そう、良かった」

というか、なぜ膝枕? 今、彼女に膝枕をされている。

……まあ、気持ちいいし良いか……いや、良くねえよ。永琳がいるつてのに……

零「どっこいしょ」

青蛾「まだ寝てて大丈夫よ」

零「え?」

青蛾は俺が起きようとするのを止めた。

青蛾「今、美鈴達が漢方薬作ってくれているから、疲労回復のね」

零「俺のためにか？」

青蛾「ええ、そうよ。だから、まだ寝てていいわ。あの悪神は攻撃しないらしいし」
その悪神に背を向け、そう言った。

……今日は、彼女に甘えよう。その、えっと、決して浮気ではない。うん、絶対。
俺はそのまま彼女の太股に頭を置いた。柔らかいです、はい。

青蛾「フフ、それは何よりよ」

零「え？」

青蛾「口に出てたわよ」

やッベーマジかよ。この場に永琳がいなくて本当に良かったと思う。浮気と勘違い
されそう。

……勘違いだからな？

ていうか、女性の太股に対し「柔らかい」って、なんか変態っぽい。違うからな？俺
は変態なんかじゃあないからな？性欲は人並みだし……うん、変態じゃあない。

……でも、前から人にこう甘えたかったという願望は、少なからずあった。それは認
めよう。

何故か今は青蛾のことを綺麗に思える。いや、元々綺麗な顔立ちだし、近くに顔があ
るからそう思えるのか？

青蛾「可愛いわね」

零「む、嬉しくないな」

青蛾「でも、貴方つてカッコいい……つて部分もあることはあるけど、顔は物凄く可愛いわ。男としてね？」

零「よくわからないな」

青蛾「そう？ざーんねん」

不意に彼女はニコツと笑った。その行動に心臓が跳ねた。

可愛い。そう思った。ヤバイ、正直惚れそう。いや、もしかしたら……

零「……………」

青蛾「……………」

こんな、まるで妄想のような出来事が、あつていいのだろうか。永琳がいるのに……な

……

青蛾は無言で、顔を近付けてきた。まさか……

青蛾「口付け……していい？」

零「お前……………」

青蛾「二番でも良いから……貴方のことが……」

零「……………」

ある意味、絶対絶命である。

……もういいや。俺は目を瞑る。

青蛾「……………」

零「……………」

青蛾「……………」

零「……………」

中々来ない？い、いや、別にその、口付けを待ってた訳じゃねえし？

その、なんだろう……えっと、うーん……取り合えず違うから!!

しかし、気になるは気になる。

俺はゆっくりと目を開けようとしたが、半分空いた瞬間、見開いた。何故か？驚いた

からだ。

青蛾「……う……………」

零「せい……………が……………」

彼女が血を吐き出しているのだ。

横目からは青蛾の腹が見えるが、そこからは緋色の液体が服を伝い、中心には鋭利な

ものが突き出ている。

俺は急いで顔をあげた。そこには悪神がいる核から突き出た何か、青蛾を貫いてい

た。

その何かはすぐに核へ戻る。そして、その場に倒れ込む青蛾の血が俺に飛び散った。勢いよく血は吹き出て、頭の中が真っ白になった。

零「青蛾アツ!!」

俺はひたすら、彼女を呼び掛けた。『治癒の細胞』を傷口に垂らす。治らない!?

零「そんな……青蛾!!青蛾!!青蛾!!」

青蛾「零……」

青蛾は俺の手をとる。

青蛾「もういいよ……貴方の『治癒の細胞』も効かないなら、私はもうダメね」

やめろ……

青蛾「今まで、貴方の力になれて良かったわ」

やめろ

青蛾「ありがとう、零」

零「やめろオツ!!」

ごめんね、れい

零「あああああああああああああああああああッ!!!!」

青蛾が、喋らなくなった。眼の光はスツと消え、彼女の体温も消えた。

彼女の手は一ミリも動かない。動かない。うごかない。うごかない。動かない。

心の隙間の温かみ X 『無駄』

零「……………」

もう彼女は動かない。

なんなんだ、この気持ちは。心臓を抉り取られたかのようにだ。

？「全ては汝の所為なのだ」

零「……………なに？」

初めて、敵が喋った。その声は、吐息混じりの声だった。

こいつが、青蛾を殺した。

アン「我が名は『アンダイン・ナルキッス』。汝を黄泉へと引きずりに来た」

零「また…か…」

アン「汝を想うあの女人も連れる事にした。よって、辛き別れなし」

零「……………」

俺の為に死んだ？ 奴はそう言うことを言いたいのか。

アン「次は汝が死ぬ。然らずんば、女人の死は無駄であるぞ」

零「……………」

無駄……

冷静に考えろ。青蛾の死は全てを失ったかのように、辛い。代わりに俺が死ねば良いとも思えてくる。が、しかし、俺は死なない、この目の前の屑を殺すまでは。

冷静さを……俺には今、冷静さが大切だ。

考察しよう。まず、この状況だ。

最初に、美鈴達が漢方を作っている。青蛾曰く、俺が急に倒れたから疲労を回復する漢方を作っている。

これが、状況その一。

次に、決して動かないと思われていた、奴が急に動いた。何か条件があつてか？せざる終えなかつた？それとも……？

これが、状況その二。

次に、青蛾を刺したアレ。アレはなんだ？俺は殺気は一流だが攻撃出来る力がないと判断した。自惚れじゃあないが、俺がそんな安易に判断は間違えない。

これが、状況その三。

最後に、この感情。それは青蛾が死んだから。彼女のことでも好きなのかもしれない、そう気付いた瞬間に死ぬ。それが一番の要因。

これが、状況その四。

アン「何をしている？ 汝は生きると言うのか？ ああ、我を殺してから自害するか？ 構わぬ、殺せ。元より汝の死を望んでいたのだからな」

零「……………」

追加。

彼は生前、目立ちたいと思っていた。しかし、今は自分を殺していいと言っている。

まだ、彼は目立ったとは言えない。なら何故？

これが、状況その五。

零「そうか……そうだな」

アン「決心がついたか」

零「お前を殺す。それは絶対だ」

アン「ああ、良いだろう」

零「言ったな？ 殺していいと」

零は、ニヤリと笑った。

零「なら……『現実世界のお前を殺す』」

アン「なッ!？」

零「フツ、全て分かったぜ。全てだ」

零はアングダインの周辺を廻りながら説明する。

状況から掴める真実、そして奴の能力を。

零「まず、俺が何故急に倒れたか……それは、『俺の妄想の世界に入ったから』だ。いや、これじゃあ語弊がある。俺の精神世界にお前が干渉して『俺の意識を引きずりこんだ』んだろ？」

アン「……………」

アンダインは苦虫を噛んだような顔をしている。

零「だから、俺は青蛾と『妄想』みたいにイチャイチャしてたわけだ」

アン「何故……………」

零「何故、気付いたか？美鈴達がこの場にはいない理由がおかしい。漢方を作っていない？滅多に倒れない俺が倒れたなら、まず、原因であろうこの場所から遠避けようと、船に運ぶはずだ」

アンダインは黙って俯いている。

零「いつ、俺の精神世界に干渉してきたか。それは、この島に入った瞬間だろ？」

アン「ツ!!」

零「ビンゴ。あの記憶はやはりお前の、生前の記憶。干渉したことによりお前の記憶が見えてしまった。お前、目立ちたいらしいな、そんなやつが、殺しても構わないなんて、言わないな。妄想の中で殺したって、意味ねえもんな」

アン「殺さないでくれ」

ここに来て命乞いか。だが……

零「いいぜ？ただし、『あの人』とか言う奴の詳細を聞こうか？」

アン「分かった……あの人は……」

零「ん？どうした？」

いきなり、アンダイスが苦しみ始めた。そして……

零「消えた？」

跡形もなく、なにもなくなった。

目覚めると、見慣れた顔一つと船の天井。

帰ってきたらしい。

青蛾「零っ!?よかった……」

零「みんなは?」

青蛾「船に妖怪が来ないか見張ってるわ、紫と藍は貴方が倒れた原因を調べる為に核の部分を調査してる」

零「そうか……」

「どうやら、現実らしい。」

零「なあ、青蛾」

青蛾「何?」

零「ありがとう」

心の隙間の温かみ XI 『現実』

零 「ありがとう」

青蛾 「うん？なにが？」

ありがとう……生きていてくれて、ありがとう。

それしか、言葉は見つからない。しかし、俺はその言葉を伝えようとはしなかった。

零 「いや、なんでもないさ」

青蛾 「……？」

青蛾は可愛く首を傾げ、不思議そうにポツンとこちらを見ている。

零 「さて、みんなの所に行くか」

青蛾 「大丈夫？」

零 「平気、平気……よっこらせ」

しかし、瞬間に目眩。立ち眩みだ。

青蛾 「え!? ちよ、ちよつと……」

視界がぼやけて、更に思考が出来ない。

今、自分がどういう状態かが、分からない。

青蛾「ど、どうしたのよ？」

段々と、霞みがかつた視界がクリアになってくる。思考力も復活してきた。

そして、理解する。今、自分がどういう状態かを。

零「……ごめん」

青蛾は頬を赤くしている。まだ、妄想の中なのではないかと疑う程、俺は運が良い。

俺は、青蛾に抱き付きながら後ろに倒れたらしい。後ろは布団がある。

青蛾「その、どうしたの？」

零「立ち眩みが……」

青蛾「貴方にも立ち眩みはあるのね」

零「そりやあるだろ」

失礼なことを言う奴だ。

許すまじ。

零「……」

青蛾の顔がこんなに近い。妄想の中にいた時よりも、ずっと近い。

青蛾は俺の顔から目をそらす。しかし、逃れようとはしない。

青蛾「……あの。立ち眩みはおさまった？」

俺をチラッと見ながら、そう問いかけてきた。

零「え？あ、ああ……」

フツと我に返る。

あまりの恥ずかしさに、次はこちらが目をそらす。

何を考えているんだ俺は。早く紫と藍の所へ行かなければ。

理由は、まだアンダインが死んだとは限らないからだ。

アイツは確かに消滅したかのように崩れていったが、飽くまで俺の妄想の中。死んだ
と思いつまらせているだけかもしれない。

だとすると、彼女らが危ない。彼女らはアンダインの調査に行ったらしい。

俺は、急いで戸を開けようと取っ手を持つ。が、それは勝手に開いたのだ。

紫「あら、もう起きていたのね」

零「え？……よかった、俺の考え過ぎか」

紫「なにが？」

零「いや、なんでもない」

紫は不思議そうな表情を浮かべつつ、調査の報告をした。

紫「結果から言うと、何が分かる前に分からなくなったわ」

青蛾「どういうこと？」

紫「あの核、消滅のよ」

やはり、その場から消滅したか。

紫「しかも、消え方が気持ち悪くて……」

零「……」

紫「悪神が核を破って飛び出してきて、それは毛穴からウジ虫が蠢きながら出てきてたわ」

ユーベ・ナイトバグは関係しているかいないか、それはまだ判断できない。

同じ黄泉の者だということしか分からない。

紫「その際、『見るな!!』って叫んでた」

零「なるほど……」

紫「瞬間、地面から黒い手のような何かが、悪神を……多分黄泉に引つ張っていたわ」
零「何故黄泉と分かった？」

紫「生気のない殺気が、私を襲ったわ。正直、もう味わいたくはないわね」

紫は苦い顔をしながら、それを話した。

にしても、『生気のない殺気』か……思い当たるものがある。

神子の所にいた時に見たあの夢。あのウジ虫だらけの女性から、それを感じれた。

そして、ウジ虫という点で、奇妙な一致をしている。

興味深い。それと同時に怖い。

まるでトラウマをずっと見ているかのような、そんな恐怖が襲う。

零「この島は酷く穢れてしまったようだ。穢れがある程度除くには相当な時間が必要になる。50年ぐらいだろうか、それほどはかかる」

紫「そうね、この島は諦めましょう」

青蛾「それじゃあ……次は白馬村？信濃の」

そうだ、と頷いた。

信濃か……諏訪子や神奈子に顔を見せてやろう。

零「行くか……アイツら呼びに行くぞ」

青蛾「はい」

紫「分かったわ」

アイツらを呼び、俺達は島から出てオホーツクの波に乗って蝦夷に向かう。

その際、潮の香りを嗅ぎながら、潰れる藍の背中を撫でた。

椿の香り

椿の香り

I 『九相図』

腐敗した臭い。

しかし、この臭いにも慣れた。私は今、腐っている。
犬や鳥が私を食い散らかす。

やがて骨に成った私は、やっと見つけられ焼かれた。

私は……

アイツらを許さない

零「懐かしいな」

青蛾「雰囲気が明るいわね……なにかあったのかしら？」

零「祭りはこの時期じゃあないしな」

蝦夷から出て、今は諏訪にいる。

本来、10年に1回は帰宅するのだが、何かと昨年は忙しくてアイツらに顔を合わせ
ていなかった。

そして、久方ぶりに帰った第2の故郷は、異様に明るくて、一体何があったのか。

零「なあ、そのの」

適当に、老いが来ている商人に問うてみる。

商人「おお、神田様。お帰りなさいませ。どうなされた？」

零「妙に明るくてな。何だ？今年は豊作か？」

商人「いえいえ、そうではないのです」

はて、では何があつてこう盛り上がっているのか。

零「では何故？」

商人「4代前の椿様が若くしてお亡くなりになられたでしょう？」

零「……ああ」

『東風谷椿』、諏訪大社の巫女の4代前であり、僅か15歳で亡くなった少女。

死に方が残酷で、とても思い出したくはなかった。

零「椿が、どうした？」

商人「なんと、生き返ったのです!!」

零「ツ!？」

彼女は焼かれて灰になった。しかも、灰になったのだって、極僅か。骨しか残ってない様なものだ。

生き返ったにしろ、どうやって？

商人「まあ、神社に行けば分かりますよ」

零「……分かった、ありがとう」

商人「いえいえ」

俺は振り返った。

顔を青くした仲間達。紫と藍は違うが。

零「おーい、ただいま」

戸を開けながら言う。

諏訪子「ええええええ!!か、帰ってくるなら言つてよおおおツ!!」

零「毎回うるせえ」

最早、恒例行事へと化した。

いつになつたら彼女は慣れるのだろうか。正直めんどい。

神奈子「よう、久しぶり」

零「おう」

芳香「おう」

ある程度挨拶らしい挨拶を済ませると、奥から犇々と誰かが来る。

いや、わかつてはいる、先程聞いたから。しかし、果たしてどのようにしてこの世へ

戻つたのかが、気になって仕方がない。

椿「あら、神田様。お帰りなさいませ」

零「あ、ああ…」

冷や汗がたりりと頬を伝わり、とてもではないが、喜べない。

彼女は椿ではない。

しかし、彼女は椿である。

分らない。椿の反応があれば、違う反応も混ざっている。違和感。一体どういうことなのか。

椿「まあ、新しい旅のお供ですわね」

紫「初めまして、八雲紫です」

藍「同じく八雲藍です」

諏訪子「また女性……」

初めましてと笑顔を向ける椿。

やはり、おかしい。妙に彼女は落ち着いている。いきなりのお客なのに。

諏訪子ではないが、少なからず驚く筈だ。

椿「あら大変!! そう言えば、倉のお酒が少ないわ。すみません、少々お待ちください。

唯今買いに行きますので」

青蛾「気を付けるのよ」

お気遣いありがとうございます。そう言って、彼女は出た。

そして、沈黙。

俺は途中で声を発した。

零「なあ、椿って……」

諏訪子「死んだよ」

零「……そうだよな。じゃあ、彼女は？」

諏訪子「……………」

分かるわけがない。

零「……本当に、倉に酒はないのか？」

諏訪子「え？……いや、たぶんあるはず」

では、何故彼女は買いに行ったのか。

彼女の言葉は、あまり信じてあげれない。

零『『視界ジャック』』

眼を閉じる。彼女は今、何を見ている？

『意外に早くいらっしやっただわ。どうでしょう？どう料理しましょう？』

野菜が並んでいる店を見ている。

……宴の料理に困っているのか？分からないが、そうなのだろう。

とすると、特におかしな所もない。

俺の早とちりか……？

零「ふう……」

諏訪子「その、どう？」

零「いや、料理がどうかしか言っていなかった」

諏訪子「へ？」

拍子抜けた、と言うような声が出た。

だが、それを笑おうとは思わない。

神奈子「しかし、雰囲気は全く違う。とても椿とは……」

青蛾「確かに、椿はもつと明るい。目にも光がないし」

分らない。とても、理解出来ることではなかった。

紫「ねえ、なんでそんな考え込んでるの？ 聖人が生き返るなんて、ない話じゃあないでしょ？」

紫が言いたいことはよく分かる。

が、無理なんだ、絶対に。何故なら……

零「彼女には『生き返る為の身体』がない」

紫「え？」

彼女の身体は、ほとんどが土としてある。

あんな残酷なことを、言っても良いだろうか？ 俺は悩むばかりである。

椿の香り I I 『料理』

椿が帰ってきて、彼女はそのまま台所へと向かった。

今のところ、彼女に殺気は感じられない。どうしたものか……

諏訪子「椿が生き返ったとき、あの子思いつきり私達を抱き締めて泣いていたの」

零「ふむ……」

疑わしい。何が、と言われれば分からないが、強いて言うならば彼女が偽物だということ。いや、正確には半信半疑なのだ。彼女が本物と信じ込ませるために、そうやって抱き締めたのかもしれない。

視界ジャックをしたときも、もしものために言葉を隠していたのかもしれない。

例えば『料理』だって、他人から聞いたら今日の晩ごはんのことに聞こえる。しかし、実は俺を料理する。という意味かもしれない。

彼女がもし、俺を殺すために黄泉の世界から来た者なら、『ディア』をしても意味はないだろう。きつと俺の能力はバレている。今まで、色々な技を見せてきた。当然である。きつと何かしらの処置をするに違いない。

しかし、ならばどうするか？

椿「はーい、零様の好きな鰻ですよ」

零「ありがたいな」

俺の好物も、その俺流鰻の料理の手順も知っている。この料理のやり方は代々巫女に伝わっている。俺流というように、俺が考えた調理方だ。

簡単さ。鰻を開いて串で刺し、火で炙る……それを飯に乗せ、最後に秘伝のタレをかける。これで完成だ。

しかし、予想じゃそろそろ世間もやり始めるな。そんな気がする。

零「にしても、魚を捌くのは慣れたか？まだ魚屋に任せてないだろうな？」

椿「あ、あはは……」

零「ハア……分かった。俺が後で教えてやる。生きた魚買ってくるから」

椿「まさか、べるところからやるんですか……？」

零「当たり前だ」

椿「あーうー……」

諏訪子の真似をしてたらなった口癖も、彼女が苦手とするものも、質問する時に首をちよいと傾けるのも、すべて生前の彼女だ。

明らかに一致する。しかし、明らかに違う。

暗い。もつと明るかった。彼女が一番良いところは明るいところだ。

昔、彼女にそれを言ったら激しく喜んでいたのを鮮明に覚えている。そんな彼女が、こんなに悲しい目をするだろうか？否、あり得ない、余程の事がない限り……いや、あった。彼女には余程なんてもんじゃあない死があつた。

だからと言つて、生き返つたのならば明るくなれるのでは？とも一瞬思つたが、それは人による。

駄目だ、考えたら考える程分からなくなる。

椿「零様？お口に合いませんか？」

零「え、あ、いや、違う。考え事をしていたんだ」

椿「そうでしたか、てつきり……」

零「椿のご飯は俺の好物だ。合わない訳がない」

そう言つて、つい昔のように頭を撫でてしまった。

椿「えへへ……」

零「ツ!？」

今、確信した。彼女は東風谷椿だ。間違いない。

頭を撫でたときの、声、笑顔、動作。すべてが東風谷椿だ。

だとしたら、そもそも何故、彼女は生き返つたのか？どうやって生き返つたのか？

分からない、どう考えても。

零「ごちそうさま、美味しかったよ」

椿「お粗末さまです」

零「お粗末なんかじゃあないさ!! 旨かったぞ」

椿「えへへ、ありがとうございます」

一瞬、彼女の悲しい目は消え失せ、昔のように笑った。

そうだった。彼女はそういう人だった。人前では華奢な姿を見せ、女性から憧れの存在として目を向けられていた。が、諏訪子や神奈子、俺の前では甘えん坊になるのだ。いと美しう。

諏訪子や青蛾が羨ましそうに見ている? そんなに椿の頭を撫でたいのか?

椿「それでは、私は器を洗いに行きますので、おかつろぎ下さい」

零「手伝うか?」

椿「いえ、家事は私のお楽しみになので」

なら、お言葉に甘えさせていただくか。

俺は部屋に戻り、考えることにした。

布団の上に胡座をかき、正面に丸が座った。

義経「零さん、彼女は……」

零「椿は間違いなく、椿だ。ああ、間違いない」

義経「そうですか……しかし……」

零「ああ、丸の言いたいことも分かる」

どうやって生き返ったか？ということ。

先にも言ったが、彼女には生き返る身体がない。考えられるのは、『黄泉からの刺客』として現れた。

それなら無いことはないのだ。言い切れる理由は、ユナ・ネイティブを最初に殺した後、俺は奴を完全に燃やした。骨が溶ける程、熱く。

しかし、奴は再び目の前に現れたのだ。

それを考えると、彼女が目の前にいるのも納得がいく。

彼女の死は、決して忘れない。あの不幸を、忘れるわけにはいかないのだ。

椿の香り　　I I I　『過去』

零「ただいま〜」

芳香「ただいま〜」

諏訪子「ヌワアツ!?か、帰ってくるの早くない!?アアアアアツ寝癖があ!!」

零「うむ、今回ははやく帰ってきた」

芳香「うむ」

義経「お、お邪魔します」

諏訪子「あ、新しい仲間だ。おー、男だ。珍しい」

それどう言うことだ。

丸を旅の仲間に加えた5年後、今回は早くに帰ってきた。

何故か、と言われれば、特に理由はない。

椿「あツ!!零さまー!ーツ!!」

零「へぶらツ!?!」

青蛾「うわあ、痛そう」

俺は長生きしているため、ちよつとの帰省程度だが、椿にとっては久しぶりに会った。

そういう感覚なのだろう。

俺を見るや否や、腹に飛び込んできた。痛いです。そして、青蛾の他人事な言葉に腹が立つ。

椿「お帰りなさいませ〜」

零「た、ただいま……」

消えるような掠れた声で返事をし、椿を撫でた。

椿「えへへ……」

零「……」

鳩尾が痛い。その感情を全力で抑え込んで、ニコツと笑った。

思えば、出会った当初は人見知りだったな……遊んで信頼を得て今に至る程に。あの時は、よく一日でここまでなつかれたな。

旅再開の時はギャーギャー泣いてたな。

零「大きくなつたな」

椿「ハイ!!」

チラツと前を見る。

諏訪子「なんで私を見るのさ!?!」

諏訪子は越えたな、確実に。

神奈子「やあ、今回は早いな。新しい仲間も連れて」

零「ああ、何となく帰ってきた。今回は長く居座るかもしれん」

青蛾「聞いてないけど」

呆れたように俺を見るな。

まあ、俺がいつも無計画なのは今に始まったわけではない。そうだな、一年はここに居ようかな。去年は永琳のところ一年半居たし、そろそろ旅をしよう。

椿「零さま!!私、お料理練習しました!!」

零「なら、今日は椿の手料理だな」

椿「ハイ!」

諏訪子「この子、凄く上手になったんだから」

まるで我が子を自慢するように、えっへんと腰に手を置いて言った。

いや、諏訪子や神奈子にとって、今までの歴代巫女は娘同然なのだろう。

零「あーツと、椿?そろそろ離れてくれるか?身動きがとりづらくてな」

椿「じゃあ、頭を撫でて下さい。そしたら離れます」

あーもうかわいいなあ!!反抗期が来ないでほしい!!

はあ……反抗期が来た巫女は何人もいた。その度に落ち込んでしまうんだよなあ。

これが、子を持つ父親の気持ちなのだろうか?

零「幾らでも撫でてやるさ」

椿「あーうー……」

頭に手を置いて撫でると、たまに諏訪子が言う『あーうー』と言う謎の言葉を発する。椿が真似してたら口癖になっちゃったやつだ。寧ろ、本人より言ってる。

諏訪子「ずるいなあ……」

零「……諏訪子、こつち来い」

諏訪子「！」

察したようで、嬉しそうに近寄ってきた。

諏訪子「ほい!!」

零「よし……」

久々な気がする。諏訪子を撫でたのは。

諏訪子は気持ち良さそうに笑顔で顔を緩めた。青蛾がガン見してくるが、無視しておこう。

椿「それじゃあ、ごはん作ってきますね」

零「おう、期待してる」

離れるときに残念そうな顔をしていた。まだ反抗期は来ないはずだ。

神奈子「にしても、諏訪子は本当に零が好きだね」

諏訪子「まーね…夫になってほしいぐらいよ」

零「あー……えつとな…」

諏訪子「分かつてる。零が一途だつてことは」

神奈子「損だよな、一夫多妻だよ？神の世界は。いや、人間も偉い奴は皆そうだ」

それが、俺は好かないんだ。女性は一つの方向を愛するのに、野郎はあらゆる方向を愛する。それが気に食わない。ただの欲張りなんだよ。

諏訪子や、青蛾は、自惚れでなければ、俺のことを好いている。が、俺は永琳と同じように愛せるか？と言われれば、無理だろう。

理解ができない。多くの女性は愛せない。

青蛾をチラツと見る。

いや、やはりできないな。俺は、永琳ただ一人。青蛾を好きと想うことは多分ないだろう。

ははは、ありえんありえん。俺が永琳以外の女性を好くなど、砂漠に落ちた米粒を見つけることと同じぐらい難しい。

神奈子「ま、お前の考えは理解できなくもないがな。珍しい奴だよ。全く……」

零「世間がおかしいのさ」

絶対、将来的には俺の考えが当たり前になるはずだ。

椿「出来ました!!どうぞ召し上がって下さい!!」

零「やべえ、めっちゃ旨そう。いただきます」

美鈴「いただきます」

煮物、緑野菜の素揚げ、サンマの塩焼き、お吸い物、玄米と、庶民的なものなのに、見た目が高級な食べ物並みに旨そう。

煮物の人参を口の中に入れてよく噛む。すると、ほのかに温かく、中まで味が染み込んでいて、柔らかすぎずに味も食感も美味しい。

素揚げもパリパリして、塩はつけておらず素材そのものの旨味が伝わる。しかも、その伝わり方が衝撃的だ。塩もなにも付けてないのに、旨味が溢れるように分かる。どう調理したらこうなる？

他の献立も非の打ち所もない旨さだった。

永琳と一位二位を争うぞ。

義経「う、うまい!!」

零「ご馳走さま」

青蛾「はやッ!」

零「旨かった、マジで旨かった」

椿「えへへ、ありがとうございます!」

諏訪子が自慢してきたのも納得がいった。

この成長具合は、育ててきた諏訪子からしたら、この上なく嬉しいのだろう。

零「こんなにもうまくなったなら、『あれ』を」

諏訪子「ッ!!」

神奈子「ッ!!」

二人「本当(か)ッ!?!」

マジで好きだな。コイツら。

椿「あの、『あれ』とは?」

零「まあまあ、ちよつと台所に来てみな。あ、諏訪子、鰻ある?」

諏訪子「あるよ!」

椿と一緒に俺が開発した『鰻の蒲焼き』を教えることにした。

が、ここで椿が魚を捌くのが苦手と言うことが分かり、完成には少し時間がかかった。時間がかかったことに、椿は酷く落ち込んでいた。

椿「うう……」

零「別に椿が下手な訳じゃない。ちよつとずつ、出来るようになるうぜ？」

椿「はい……」

零「さ、食いな。食ったら気分も上がるもんさ」

そう言われ、パクツと食べた椿。瞬間、驚いたようで、暗い気分どころではない。

すぐに笑顔になり、嬉しそうにまた一口、また一口と、箸は止まらずどんどん進む。

椿「零さま!!これ美味しいです!!」

零「だろ？」

こんな一時がずっと続けばいいのにな。

そんな遠い未来になりそうな夢を見ても意味はない、分かっただけはいるが……

ご馳走さまでしたと、笑顔な椿の頭を撫で、無理に笑顔になった。

お知らせ

皆様ご無沙汰しております。東方化物脳の作者である葉売りです。

この小説は、私が中学生の頃から投稿している作品でしたが、私のリアルの忙しきにより投稿が出来なくなっていき、最終的には完全に投稿が途絶えてしまいました。待っていた皆様には深くお詫び申し上げます。

さて、今更なぜこのような文章を活動報告ではなく、小説の最新話として載せているかと言うと、これから先、この『東方化物脳 〜100%の脳が幻想入り〜』にて、最新話を投稿することは正式にないことをお知らせ致します。代わりに、東方化物脳のリメイクである『東方化物脳 Re:make』を新たに投稿させていただいております。先日から投稿を始め、今作では詰めが甘かった設定や、文章の方式など、様々変わっております。大まかな流れは変わっておりますませんが、投稿できなかつたこの先の話は大きく軌道修正しております。ご閲覧していただけると幸いです。

改めて、葉売りの『東方化物脳 Re:make』をよろしく願います。

←こちらからご覧頂けます。

<https://syosetu.org/novel/303069/>

.....